

ごあいさつ

今号の特集テーマは「里山」です。「兔追いしかの山、小鮒釣りしかの川……」。日本人にとってのふるさとの原風景は、里山ではないでしょうか。実際には里山で暮らしたことがない人でも、里山の風景にふるさとのなつかしさを感じるのはどうしてなのか、と以前から不思議に思っていました。もしかすると日本の昔話に描かれる里山のイメージが、こころのふるさととして定着したのではないか、というのが今のわたしの「仮説」です。私たちの先祖である昔話の登場人物の多くは、里山に暮らしています。昔話の中の里山が、いつの間にか日本人のこころに共通するふるさと像を作り出してきたのかもしれない。一方、リアルな生活空間としての現代の里山は、里山資本主義、Satoyama Initiativeなどの言葉とともに、最近改めて注目されています。森、里、海のつながりを見直す学際的な学問領域も生まれています。日本人にとって里山のもつ意味を、改めて考えてみたいと思います。

2015年7月

京都大学こころの未来研究センター長 吉川左紀子

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

2015 vol. 14

目次

ごあいさつ	吉川左紀子
01 巻頭言 心を遠い場所へ	小川洋子
02 石牟礼道子さんインタビュー 花ふぶき生死のはては知らざりき——里海の世界	石牟礼道子+鎌田東二
論考〈特集 里山〉	
14 京都三山と里山の実像	高田研一
19 里山とたたら製鉄	海老澤衷
23 里山の天敵を使った害虫管理	高林純示
28 アフリカ熱帯雨林のさとやま	四方 篤
32 里山と現代アート ——人と自然のかかわりってなんなのか	伊勢武史+三井麻央
エッセイ	
36 個人のこころと社会のこころ	福島慎太郎
37 頭蓋骨に刻まれたもの ——チベットで出会うこころ・からだ・人生	小西賢吾
研究報告	
38 スピリチュアルケアの裏庭	ティモシー・ベネディクト
40 日本のインフォームド・コンセントと患者・家族のための支援	ローラ・スペッカー・サリバン
研究プロジェクト	
42 研究プロジェクト一覧(平成25年度)	
43 こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究(人類はこころをどのようにとらえてきたか?)	鎌田東二
44 こころとモノをつなぐワザの研究 ——伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に	鎌田東二
45 ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
46 他者理解に関わる感情・認知機能:直接対面 vs. 映像対面での表情表出	吉川左紀子+上田祥行
47 コミュニケーションの言語・文化的基盤	内田由紀子
48 癒し空間の比較研究 生態智の拠点としての聖地文化 ——こころ・場所・癒しの研究	鎌田東二
49 子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
50 発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	田村綾菜+小川詩乃+吉川左紀子
51 こころ学創生:教育プロジェクト	吉川左紀子
52 東日本大震災関連プロジェクト ——こころの再生に向けて	鎌田東二
53 地域の幸福プロジェクト	内田由紀子+福島慎太郎
54 心理療法場面にみられる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	前川美行
55 子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀
56 高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	積山 薫
57 身体と象徴:自然・社会・人体のリズムの総合的研究	木村はるみ
58 被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究II	大西宏志
59 2014年度仕事一覧	
69 センターの動向(2014年10月~2015年3月)	
編集後記	

心を遠い場所へ



小川洋子 (作家)

1962年岡山市生まれ。早稲田大学第一文学部文芸科卒業。1988年『揚羽蝶が壊れる時』で海燕新人文学賞、1991年『妊娠カレンダー』で芥川賞、2004年『博士の愛した数式』で読売文学賞、本屋大賞、『ブラフマンの埋葬』で泉鏡花文学賞、2006年『ミーナの行進』で谷崎潤一郎賞、2012年『ことり』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。ほかに多くの小説やエッセイを発表している。

Yoko OGAWA

ある日少年は峠の向こうの不思議な小山に行き着く。友だち大勢と一緒にわいわいするより、たった一人で静けさを味わいたい、と思わせてくれる小山だ。やがて彼はそこを領地とする小さな小さな人々、“こぼしさま”を発見する。

日本初の本格的ファンタジー作品とされる、佐藤さとるさんの『だれも知らない小さな国』は、両者のこの出会いからスタートする。こぼしさまたちは、小山の地面の下に町を作り、腐った木から発せられる青いリンの光を頼りに暮らしている。

しかし彼らはすぐさま打ち解けたのではない。最初は手探りである。こぼしさまは目にも留まらぬ素早さで動くために、なかなか正体がはっきりしない。そのうえ喋るスピードも桁違いで、少年の耳にはただ、「ルルルッ」と言っているようにしか聞こえない。そこに、ゆっくり話す訓練を受けた通訳が登場し、彼らの関係は一気に近づく。こぼしさまたちの小さな世界に触れながら、少年は自分の外側にある広い世界へ、たくましく踏み出してゆく。

この物語の出発点が、小山の静けさにあったのは興味深い。そこで少年は生まれて初めて孤独の心地よさを知り、自身の感覚の深いところまでゆっくりと降りていった。日常のざわめきから遠く離れた、純粋な感覚に従ったからこそ、こぼしさまを異物として遠ざけるのではなく、ともに成長してゆける仲間として受け止めることができた。

現実社会で行き詰まった時、しばしば救いとなってくれるのは、こぼしさまのような存在である。あらゆる面で自分とは全く異なる何かでありながら、確かな存在感を持ち、こちらの予想を超えた世界を編み出しているもの。

例えば最近、霊長類学者の山極寿一先生と対談してから、ゴリラに思いを馳せることが多くなった。強風や雪で新幹線が不通になり、予定が狂って苛立った乗客が、駅員さんに詰め寄っている。そんな時私は思う。「熱帯雨林のゴリラを見なさい。昨日、美味しそうな果実がたくさん生なっていた木に、今日何も実っていないからと言って、怒るゴリラはいません。何一つ自分の思い通りにならない世界で、彼らはお利口に生きているのです」

だから私は、小説の執筆が計画通りに進まなくても、ゴリラを見習って決してイライラしないように努めている。

夜、眠れない時もまた彼らのことを思う。遠いジャングルの奥、木の上にしらえた寝床の中で、母の温もりとボスの力強さに守られ、寝息を立てている赤ちゃんの姿を想像する。あるいは地面の下、朽ちた木が放つ光の中、宝石を転がすように「ルルルッ」と合図を交わし合う小人たちの声に耳を澄ます。

すると自分を取り囲む輪郭が悠然と引き伸ばされ、深く息を吸い込めるような気がしてくる。心を遠い場所へ運ぶと、そこには必ず安らかな眠りが待っている。

花ふぶき生死のはては知らざりき — 里海^{さとみ}の世界

石牟礼道子さんインタビュー

聞き手 | 鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)
Toji KAMATA



石牟礼道子 (いしむれ・みちこ) 1927年、熊本県天草郡に生まれる。1969年、『苦海浄土 — わが水俣病』刊行、文明の病としての水俣病を魂の文学として描いた作品として高く評価される。1973年マグサイサイ賞、1986年西日本文化賞、1993年紫式部文学賞(『十六夜橋』)、2001年度朝日賞、2002年度芸術選奨文部科学大臣賞(『はにかみの国 — 石牟礼道子全詩集』)、2014年、第32回現代詩花椿賞(『祖さまの草の邑』)を受賞。2002年、新作能「不知火」を発表、東京、熊本、水俣で上演された。2004年から2014年、『石牟礼道子全集 不知火』(全17巻・別巻1)、2009年から2010年『石牟礼道子・詩文コレクション』(全7巻)、2015年『石牟礼道子全句集 — 泣きなが原』刊行。また、石牟礼道子の世界を描いた金大偉監督の映像作品「海霊の宮」(2006年)、「花の億土へ」(2013年)がある。

泉を掘る言葉

鎌田 私は夏休みに『石牟礼道子全集』を全部読もうと思って買いました。しかし、東北の被災地を回っているうちに、左目が網膜剥離になり、手術をしなければならなくなりました。それで2週間ほど、病院のベッドに伏せたまま、妻に『苦海浄土』の第1部、第2部、そして第3部の途中まで読んでもらい、目が治ったので途中から自分の目で読みました。

石牟礼さんは非常に鋭くつかんでいて、記録も含めて、綿密に、きちんと言葉にされているので、学問的な見地から言っても、文学的な見地からしても、とても優れた深いものを書かれています。

石牟礼 お恥ずかしい。何も知らないもので、とりあえず思ったことを吐き出さなければと思って書きました。

鎌田 何も知らないで書けるような言葉ではないと思います。とくに2000年代になって謡の脚本『不知火』という新作を書かれていますね。あれは日本文学の伝統を踏まえた見事な言葉のつづれ織りで、その感性や、詩的なイメージは、すごいと思いました。

『苦海浄土』は、特に熊本弁で物語っている漁師さんや地域の人たちの言葉や、東京に出て行って訴えていくときの言葉1つ1つが、くっきりと映像として立ち上がって見えてきました。ずっと目をつぶって聞いていますから、映画のように動いている感じでした。

『苦海浄土』を読んで、鶴見和子さんが、「石牟礼道子がアニミズムそのものなのよ」というのも非常によく分かりました。

また、『石牟礼道子全集』第1巻に初期詩篇が収められています。水俣病のことが大きくなっていく昭和30年代に、石牟礼さんが書かれている言葉は、ぐさりと胸に突き刺さってきました。その詩の中で、自分はみんなのための泉を掘るというふうなことを書かれています。石牟礼さんがされている取り組みとは、まさに泉を掘って、みんなに命の水をもう一度飲んでもらう。そして、終わりかけている何ものか、命の最期のあえぎみみたいなものを看取りに行っている。そういう感じを強く持ちました。詩としても、すごく胸に迫るものがありました。

石牟礼 そんなふうを読んでいただけるとはありがたいですね。約50年間、脇目もふらず、間に合わないと思って無我夢中で書いてきました。

山の生き物と海の生き物のつながり

石牟礼 私の家は、いまでも水俣川の川口にあります。川口というのは海と接しています。川口の続きは海で

すよね。小さいとき、チッソ¹⁾のそばの町筋の栄町から没落して、海辺のとんとん村²⁾に移った。それは猿郷³⁾というところ。実際、時々サルが出てきました。

そのころは、まだ海辺をコンクリートで固めていませんでしたから、海辺に行きますと潮が引いているのが分かります。15日単位で、大潮、小潮と言って、小潮のときは浅く潮が満ちてくる。大潮のときは、うんと沖まで引いて、干潟が出てきます。これは『不知火』に書いていますが、干潟が多いです。そうしますと磯ものがたくさん出てくる。いろいろな貝類が出てきます。

水俣病の研究の資料となったムラサキガイは、岩の裂け目にびっしり重なって付いていて、これを取って、おみおつけにしていました。梅雨のころがいちばん大きくなる。海で洗ってきて、そのままおみおつけに入ると、とてもおいしい。

鎌田 それは海辺の人たちの日常的な食べ物だったんですね。でも、ムラサキガイは定着しているから、よけいに水銀をため込んだ。

石牟礼 水俣病の初期の研究者たちは、これで研究をしていました。

鎌田 それを日常食にしている人たちに被害が大きかった。

石牟礼 そうです。それからイワガイというのがあります。これはひだがありましてね。これをゆでて、塩をひとつまみ入れて、身を取ります。そしてあくる日、貝ご飯をつくるんです。貝に味を付けておいて、それを温かいご飯に混ぜて食べるとおいしい。

鎌田 聞くだけでもおいしそうですね。水銀さえ入っていなければ貝は最高ですね。

石牟礼 最高です。

鎌田 今回の私たちの雑誌の特集テーマは「里山」です。石牟礼さんは『花の億土へ』(2014年)の中で、海と山との連関、海の中にも里山があるというようなことを言われています。いまのお話を聞いていると、海の中のドンダの実を拾って食べるようなものですね。

石牟礼さんの世界には、『しゅうりりえんえん』³⁾の狐がすんでいる山、しゅり神山⁴⁾とかも出てきますね。山の生き物と海の生き物のつながりをどう捉えておられますか。

石牟礼 渚には特殊な植物が生えています。海の潮を吸って生きている。たとえば、アコウの木というのがありました。

鎌田 その写真をちょっと見せてもらえますか。樹根が垂れていて、沖縄のガジュマルに似ていますね。

石牟礼 ガジュマルの仲間だと思います。

鎌田 沖縄のガジュマルはキジムナー(樹木の精霊)がすんでいますね。これは天草にあるんですか。



明神に生えていたアコウの木

石牟礼 水俣に入ってきたものが天草にもあります。海の潮が満ちてくるところに生えています。それを陸に持ってきて植えてもつかない。潮がないとだんだん枯れてきます。これはチツソの裏の明神というところに生えていました。ここは渚です。海と陸は呼吸合っていますね。

鎌田 そうですね。お互いにつながり合って、刺激を与え合っています。

石牟礼 それで海も陸も生きている。でも、今はそれができなくなりました。父は、コンクリートで石垣をつくるようになった時代に入ったとき、「日本は墮落するぞ」と言っていました。

鎌田 まったくそのとおりにになりましたね。いま、東北でも15メートルの防潮堤を造ろうとしています。底辺が80メートルですよ。こういうピラミッドみたいな巨大な防潮堤を気仙沼や石巻の近くなどにコンクリートでつくろうとしているんです。

私ももちろん反対をしているけれど、地元の人たちは、海を見ながら生活したい、海といっしょに呼吸をして生きていきたいのに、そんなことをすると呼吸を止めてしまうじゃないですか。だから、やめてくれと県知事とかに申し立てているんですけど、公共工事はお金が下りるものですから。水俣の問題も同じだと思うんです。土木建設業は、それによって潤うところがあるから、国も県もどんどん進めようというのが基本的な流れです。

気仙沼に^{はたけやましげあつ}畠山重篤さんという、「森は海の恋人」というキャッチフレーズで運動をしている人がいます。畠山さんたちは、コンクリートの防潮堤なんかとんでもないと言います。

石牟礼 とんでもないですよ。

鎌田 これは海を殺してしまう。人間の生活圏も変えてしまう。コンクリートは日本列島を窒息死させます。

石牟礼 そうですね。そして、原子力発電所の汚染水をコンクリートの島みたいなのをつくって閉じ込めようとしているんですけど、閉じ込められるのは日本列島そのものですね。それでは日本列島は呼吸ができなくなります。

鎌田 本当ですね。石牟礼さんは、

毒死列島身もだえしつ野辺の花

という俳句を作っておられますが、まさに毒死列島のような状態ですね。コンクリートもそうだし、放射能や汚染水で取り巻かれているので、そういう意味では、呼吸もできないし、どんどん毒素がまわって死にかけているような状態ですね。

石牟礼 はい。それで「毒死列島」と名付けたんです。

鎌田 そこに花を咲かせたいですよ。

石牟礼 川と海は行き来がありましたよね。いま、それができなくなっています。川の上流では、木のこずえがあつて……。

鎌田 その木のもとに小動物がいて、花が咲いて、鳥や蝶がやってきて、花粉を飛ばして……。

石牟礼 1本1本の木が、川の源流ですね。

鎌田 「森は海の恋人」という運動の人たちも、同じようなことを言われていました。1本1本の木が水の源にあつて、海に会いにいくというか、海に流れ込んでいって、森と海が抱擁し合っているような感じ。

「道路道楽」

石牟礼 私の家は石屋で、祖父や父は石工でした。水俣の八幡というところに八幡神社をつくることになって、わが家が鳥居を請け負いました。

鎌田 おじいさんが、その鳥居を建設されたんですか。

石牟礼 1人じゃありません。親友と3人で大鳥居と2頭のこま犬をあげています。いまも「吉田松太郎」と祖父の名前を刻んだものがあります。不知火海（八代海）の東シナ海への出口に長島という島があります。その島の山に入って大鳥居の原石を見つけたのだそうです。あれは1本1本山で切つて鳥居の柱の形にして運び出すので、よっぽど大きな岩じゃないとできない。

鎌田 コンクリートが出てきて、お父さんが、日本はこれから墮落すると言われた。それはいつごろのお話ですか。

石牟礼 私がまだ学校に行かない、小さいときです。

鎌田 昭和10年代でしょうね。そんなところに、すでに日本は墮落すると。

石牟礼 はい。祖父も父も道路工事が大好きでした。親類やまわりの方は「道路事業」とは言いません。「道路道楽」と言っていました。

鎌田 「道路道楽」。道路をつくるのが楽しいという。

石牟礼 「人は一代、名は末代」というのが晩ご飯のときの話題でした。でも、もうけ道を知らない。もともと天草に住んでいましたが、水俣に山をたくさん持っていて、その山を片っ端から売ってしまった。「また山を売って道をつくるのかい」と天草の親類たちが言うんです。「山を道に食わせてしもうて」。それでとうとう持っていた山がなくなってしまったんです。

鎌田 道をつくることは寄付しているようなものだったんですか。

石牟礼 そうですね。請け負った道はたくさんできました。それは残っています。湯出^{湯のつる}⁵⁾という山の温泉がありますが、そこに行く道もわが家がつくりました。

鎌田 おじいさんやお父さんは、村や市のために公共事業的なことをたくさんされたんですね。

石牟礼 自分の道楽のために。

鎌田 でも、道をつくるということは人のためにもなったわけですよね。

石牟礼 そうですね。道をつくるには根石、土台石がいちばん大事と言っていました。松太郎は石を見つける名人だったそうです。

鎌田 土台石がいちばん大事だというのは人間も同じですね。

石牟礼 雨が降ればすぐ壊れるような土手をつくるのは末代の恥、と言っていました。

鎌田 道路も生き物だということですね。風雪に耐えて長く生きられるか、すぐに壊れてしまうか。それは昔の人が自然の摂理から学んだ人間教育ですね。

石牟礼 そうですね。湯出に行く道をつくったときは、途中で村が3つぐらいあったんです。道をつくるのに石垣を積みまなきゃいけないので、石方の人たちをお願いしなければならない。どうやって石方を集めようかと思いつきながら村に入っていくと、村の段々畑の石垣がたいそう立派につくってあった。そこで、こういう村からうちに来ていただきたいと言って頼んで歩いた。それで湯出の道が出来上がったんです。

いよいよ今日は道が通り始めますという日に、あちこちの村から道を見物にいらっしゃったんです。誰が最初にその道に足を下ろすか。勇ましい人が、出来上がった道にそっと足を乗せようとしたんですけど、道に足を着けるのが怖くて飛び上がっていきなされた。誰も足を着ける人がいなかったそうです。

鎌田 その村の人の感覚はすごくよく分かります。道の渡り初めはそれぐらい神聖なものだったんですね。

石牟礼 それで、おばあさんたちがお祝いに、歌を歌って、踊りを踊って、板三線を引きながら行列をして通った。

鎌田 もう、お祭りですね。

石牟礼 道のお祭りです。松太郎は「それを見たときに道をつくったかいかがあったと思った」と言いました。

鎌田 それは最高ですね。神さまも人間も全部通じていく道、そういうものをおじいさんやお父さんがつくったということですね。

石牟礼 そうですね。「これがあるけん、道をつくることは、やめられん」と。

鎌田 おじいさんが石牟礼さんの「道子」というお名前前の名付け親ですか。

石牟礼 みんなで道子と付けたそうです。村中が寄って、お祝いしてくださったそうです。

鎌田 きっとそういうおじいさんの思いも込められているんでしょうね。人の道、獣の道、生き物の道、いろいろな道が続いていくようにという願いが。

石牟礼 はい。でも、いまのコンクリートの道はとてもそんな気持ちにならないですよ。

鎌田 命が通わない。むしろ、窒息させる道です。

石牟礼 そうですね。

鎌田 私は比叡山に1週間に1回登って、山頂で、うしろに宙返りするバク転をするんです。山に入っていくと、シカとかサルとかへびとかに出会います。そういう道は、もちろん完全に自然な、コンクリートの一切ない道です。その山の道は、汗をかいて登って下りてきても疲れないんですよ。疲れないどころか、元気になります。森のいろいろなものを感じて。森に、いろいろな友達がいるようなものですから。

でも、人間がつくったコンクリートやアスファルトは無機質で、窒息させるような、押しつぶしているような感じで、ものすごく歩きにくいし、疲れますね。

石牟礼 父は「墮落した」ってコンクリートを憎んでいました。

鎌田 本当にそう思いますね。道路もそうですし、築港作業も、波打ち際のところにテトラポッドを設置して、渚の呼吸を止めてしまっているわけです。日本列島全体を窒息させていくような動きを戦後、特に高度経済成長以降、作り上げてしまっています。

石牟礼 うちでは晩ご飯のとき、お客さまがいっぱい来ていっしょに食べていましたが、よく「道が花の道に見えた」と話していました。「花の道」というのが耳に残っています。

鎌田 花の道。美しいイメージですね。花の道というのはそこに生き物がいっぱいあるということですから、



石牟礼道子さん

命が通い合う道ということですね。

石牟礼 祖父は、地面に紙を広げて、筆を持って仏さまの絵を描くんです。それが立派に描くんですね。とても手が自由に動いていました。

鎌田 そんなにお上手なんですか。石工の棟梁さんですよ。きっと名人級だったんでしょうね。

石牟礼 名人級だったと思います。

鎌田 石牟礼さんのDNAの中には、そのおじいさんのDNAも、向こう側の世界にいるおばあさんのDNAも入っておられるので、おばあさんの精神世界と、おじいさんの現実的な技や、みんなのために大盤振る舞いしていいものをつくりたいみたいのところと、それらがそっくり引き継がれているのでしょうか。

石牟礼 多少、影響を受けているでしょうね。

鎌田 自分で自覚されている以上に、おじいさん、おばあさんの生きざまというか、息吹が受け継がれているんだと思います。

石と星

鎌田 これはアイルランドの石なんです。私はこれを毎朝、比叡山に向かって吹いています。私の聖なる三種の神器の1つです。これは自然に3つ穴が空いている。いまから20年前にアイルランドで拾ったんです。

(石笛吹奏)

石牟礼 すごい音。

鎌田 いまは迷惑になるので抑えています。ぴいっというもっと高い音になるんです。能管と同じような音です。

石牟礼 私も能管を思っていました。

鎌田 広島に原爆が落ちて50年目の日、アイルランドにいた私は広島に向かって祈りました。そのあと、アイルランドの西の果てのアラン島の海岸で、この石が「私を吹いて」と呼び掛けてきたんです。それで手に取って吹いたら、ぴいっという音が鳴りました。縄文人も自然に穴の空いた石を吹いていました。

石牟礼 驚きました。いまの音。

鎌田 アイルランドでも西の向こうには、「ティル・ナ・ノグ」という常若の島があると信じられています。ここにはアーサー王とか亡くなった英雄、死者の霊がいるといわれます。「ティル・ナ・ノグ」は古代ケルト語で、日本語に翻訳すると「常若」という意味です。

沖縄で言うニライカナイ。石牟礼さんの『不知火』にも常若という名前の弟が出てきますね。

私は『古事記』を小学校5年生のときに読んで、非常に印象に残っているのは「草木が言問う」ということです。祝詞の中に必ず出てくる言葉に「語問ひし磐根樹根立」、つまり岩の根とか草の片葉が言葉をしゃべるといのがあります。子どものころから、草木や岩がしゃべるといのに非常によく共感できました。

石牟礼さんの文学の世界は、『苦海浄土』から今日に至るまで、草木、空や風、すべてが物語るという世界ですが、とくに最近、石のことに関心を持っておられるようで、そのことをお聞きしたいと思います。

石牟礼 石というのは、宇宙の成り立ちの中でどういうものだったろうと思っています。最初は何か、宇宙の中のしずくのようなものだったかもしれない。それが、何十億年とか、さらに大きな数の時間があって、だんだん石が固まったとき、星になったと思うんです。父が、「星は地球と同じだ。誰か住んでいるに違いない」と言うでしょう。それに胸がときめくんです。

星はたくさんあるけれども、私たちが住んでいる地球も星の1つかと言うと、「そうだ。向こうの星から見れば地球は光って見えるに違いない」と言うんです。「何か人間に似たものが住んどるぞ。山もあれば川もある。海もあるに違いない」と父は言うんですね。

地球のことを「ジダ」と言っていました。ジダというのは土地のことです。「ジダは大事にせにゃあかん。何でも産んでくれる。人間も、生き物も、木も、ジダから生えているんだ。地球は息をしているんだ」と。

鎌田 ジダが息をしている。

石牟礼 はい。それはよく分かりました。「野菜ば植えれば生えてくるぞ。種ひとつまけば」と。私も小さいときから親のまねをして一応、百姓のつもりでやりましたから。それで、肥やしをやったり、水をやったりすると、成長して、実りの時期が来ます。

「地球」という言葉は使わなかったですけど、自分たちが生まれて、立って、歩いて、道をつくったり、家を建てたり、船をつくったり、海があったり、貝を取ったり、いろいろ生産活動ができるでしょう。「生産活動」という言葉は知りませんでしたけど、実り豊かな大地だと思っていました。

だけど夜になると、あの光る星に行き着くことができれば、そこには何か住んでいる。豊かな生活があるに違いない。行ってみたいなと思っていました。

鎌田 子どものころから、星を見ながらそんなふうに想像していたんですか。星が1つの島で、向こうには別の島があるような感覚ですか。

石牟礼 そうですね。そしてその星自体が生きている、呼吸をしている。そして遠い、光のように見える向こうの世界と呼吸をし合っているんだと思っていました。そう思うと、ところが豊かになるんですよ。

鎌田 そうですね。そこにはどういう生き物がいるとか、いろいろ想像されたんですか。

石牟礼 いろいろ想像していました。タコのようなものがあるかもしれないとか。

鎌田 昔、そんな姿の火星人がありましたね。

石牟礼 はい。だけど、私はそういう本はあまり読んでいないんです。想像でタコのような人間がいるんじゃないかって。足が何本あるだろうか。手も指もあるだろうか。目はいくつあるだろう、といろいろ想像するんですよ。家を建てて住んでるんだろうとか。

鎌田 言葉が通じるだろうかとか。

石牟礼 お芝居なんかもするだろうか。

鎌田 歌も歌うだろうかとか。

歌う人たち

石牟礼 うちでは焼酎が入ると歌が始まります。若い人たちもよく歌を歌っていました。

父の亀太郎はものすごく音痴でしてね。世界の音痴大会に出たらグランプリをもらおうというぐらい、とんでもない声を出すんですよ。当時、『ストン節』⁶⁾というのがはやっていました。「♪ストン、ストンと通わせて」という。それをどんな名作曲家も考えつかないような節で、しかもすっとんきょうな声で歌う。

祖父の松太郎は声がよくて、『江差追分』をよく歌っていました。実にいい声で一条の乱れもなく。それで「真打」と言われていました。「松太郎さま、歌い申せなつて」と若い者たちが言う。当時のやり歌をみんなが歌って、真打に入る前に亀太郎に歌わせるんですよ。そうすると、いままで「人は一代、名は末代」とか堅苦しい話をしていたのに、相好を崩して歌い始めるんです。それがもうとんでもない。まねができない



鎌田東二教授

(笑)。

鎌田 調子外れが。それは何曲か歌うんですか。

石牟礼 『ストン節』1曲だけ。でも、いつも違う。同じ節では歌わない。あれ、わざと歌っていたのかなと思いますけど。

鎌田 毎回違うというのはわざとでは歌えないですよ。だいたい似たようになっちゃいます。

石牟礼 若い者たちがお腹をかきむしって転げまわって笑う。それでごちそうのお膳などがお座敷いっぱい散らかるんですよ。それでも、おばさんたちは手をたたいて喜んで。

鎌田 そういうときは石牟礼さんも歌ったりはしないんですか。

石牟礼 まだ子どもですから歌わない。

鎌田 『花の億土へ』の中に、お母さんと麦踏みに行ってお母さんが麦にいろいろな言葉をかけたり、歌うように祈ったりしながら、という話がありました。お母さんもよく歌われたんですか。

石牟礼 母も歌っていました。母は当時はやっていた娘義太夫になりたかったそうです。

鎌田 へえ。お母さんはとても美しい方ですね。娘義太夫で全国を行脚したかったのですか。石牟礼さんの中にも、そういうところがありますよね。

石牟礼 ありますね。当時はやっていた琵琶歌があって、「月に叢雲、花に風」という歌い出しですが、母は歌い出しのところだけを歌っていました。それから先は歌わないんです。

鎌田 ご詠歌ですか、それは。

石牟礼 『石童丸』という、もとは説経節から来た唄です。石童丸のお父さんが高野山に入るというので、お



水俣病患者の発生地域 (1972年、当時の地図・データによる)

石牟礼道子『新装版 苦海浄土 わが水俣病』(講談社文庫、2004年)より

母さんは止めたいけど、家族を捨てて、お父さんだけ高野山に入ってしまった。それで高野山の入り口まで親子でお見送りして、その別れるときの歌です。

御詠歌のお師匠さま

鎌田 『苦海浄土』の第2部「神々の村」の最後の章が「笑る子」で、水俣病患者巡礼団の人たちが高野山に行きつてご詠歌を歌う。おばあちが、「はかなき夢」というところをいつも「はかなき恋」と間違ってしまうところがユーモラスに、切なく描かれていましたね。

石牟礼 「♪……人のこの世は永くして 変わらぬ春と思えども はかなき夢となりけり」。ご詠歌は私も高野山に行くときに稽古に行きました。

鎌田 お師匠さんは、石牟礼さんはすごくご詠歌が上手だと言われていたんでしょう。そのおばあさんたちは、なぜ「はかなき恋」になっちゃうんですかね。

石牟礼 うちの母もそうでしたけど、小学校に行く年齢になっても行かない人たちが多かったんですよ。それで、童謡とか学校の歌も稽古したことがない。だけど、やはり歌は歌っていました。

鎌田 はやり歌の中に恋が出てくる。

石牟礼 はい。皆さん、恋の歌が好きでした。

鎌田 あれは『苦海浄土』の中に繰り返す象徴的に出てきますね。株主総会で歌ったときとか。高野山で歌

う場面はあの中では描かれていませんでしたけど、高野山に登ったとき、どこであのご詠歌を歌われたんですか。金剛峯寺というお寺の本堂ですか。

石牟礼 金剛峯寺のようなご大層なところには入れてもらえなかったの、外側で歌いましたね。

鎌田 高野山には根本大塔という、マンダラを掛けている赤い塔の建物と、お堂の金剛峯寺の2つがありますが、そのお寺の庭でご詠歌を皆さんで歌われたということですね。

石牟礼 はい。株主総会のときと高野山に入らせていただいたとき、患者さんたちは白装束を着ておられました。私も患者さんとごいっしょの服装をしていました。途中は平服でしたけど。

実子というのは、お師匠さんが「いまの世の中は、逆さの世の中でござすばい。それで、子どもに実子と付けました」とおっしゃいました。だから、なかなかの人物です。

鎌田 あの「神々の村」のラストシーンは非常に印象的でした。お師匠さんの世界観と、おばあちの、非常に世俗的でありながら、聖なる世界と交わる、この聖と俗が両方ともうまく合って豊かな世界ですね。

石牟礼 あそこは書かなきゃと思って書きました。

鎌田 お師匠さんの言葉もたいへんところに染みてきます。子どもにその名前を付けた祈りというのか、ここが。

石牟礼 はい。たいへんな人でしたよ。

鎌田 もう、そのお師匠さんは亡くられていますね。

石牟礼 亡くられました。一家全員が水俣病にかかっておられました。

鎌田 いちばん重いのが実子さんですか。

石牟礼 実子さんの前に生まれた静子ちゃんは胎児性で生まれて亡くなりました。私は、ほかの家にはそれほど行きませんでしたけど、ご詠歌の稽古のこともありましたので、お師匠様の家にはしげしげとお見舞いに行きました。

入り口に船小屋があるんです。坪谷^{つばたに}というところでしたけど、そこは縁側から魚が釣れるんですよ。津波でも上がるとすぐ流されるようなところに家を建てておられました。

奥さまはたいへん学校の成績がよくて。水俣病患者にカンパが届くでしょう。そのお礼の手紙は奥さんが書いていました。感心するくらい礼儀正しい、内容の豊かな、そして、いまの時勢を詳しく書いて、お返事係をしてくださっていました。

鎌田 教養豊かな方だったんですね。

石牟礼 はい。母屋に誰もいらっしやらないときは、船小屋をのぞいてみると、体が曲がったおじいさんが伏せておられました。明らかに水俣病でした。

一家全部水俣病だけど、名乗り出てきたのは家族のうちの3分の1。3分の2は黙って伏せておられました。あそこはどうして食べておられたんでしょうかね。

鎌田 お師匠さんの仕事は漁師ですか。

石牟礼 漁師でした。

鎌田 お師匠さんにご詠歌をどこで学んだんですか。

石牟礼 どこかで修行したっておっしゃってましたね。どこで修行しておられたのか聞けばよかったです。

鎌田 お師匠さんは、ご詠歌以外には経文とか、祭文とか、いろいろな唱えごととか、加持祈禱のようなこともされるんですか。

石牟礼 しておられました。

鎌田 では、そういう能力もあられたんですね。お坊さんの資格を持っていたんですね、きっと。加持祈禱ができるような真言宗のお坊さんでもあった。

石牟礼 在俗の坊さんだったと思いますね。

鎌田 そういう方が岬の突端のところに住んでいて、ご詠歌を教えていた。

石牟礼 そうですね。

綴り方の時間

鎌田 石牟礼さんの表現は、最初は短歌、それから俳句、詩と、散文に移る前に、そういう文学をされていますけど、石牟礼さんにとって短歌とか歌というのは、どういうものでしょうか。

石牟礼 母が畑で独り言を言ったり、草木に話しかけるときは、まるで詩みたいでしたからね。私もその中に入っていたんだと思います。

鎌田 お母さんが麦踏みをしながらか、麦や草や木に語り掛けているようなものが、そのまま音数律を伴って、五七五とか、そういう歌になっていった。それが石牟礼さんの歌うということの始まりですか。

石牟礼 はい。

鎌田 それは非常に古くからの女性たちの古歌というのか、古謡の伝統、島唄とか、そういう祈りの言葉の伝統の中に歌があるということでしょうか。

お母さんも巫女的な感じもしますね。お母さんは写真を見ただけでも、靈感というのか、祈禱とか、靈感とか、そういうことができるような方ですね。だから草木に語りかけたり、草木の音が聞こえたり、お話しできるという感覚があったのでしょうか。

石牟礼 はい。話していましたね。

鎌田 それは、『古事記』ができていく以前の古代的な感覚が、現代も日常生活の中で生きていたということですね。石牟礼さんが最初に何か書かれたのは、15、16歳の実務学校に行かれていますところですか。

石牟礼 もっと前かもしれません。小学生のころ、綴



石牟礼道子さんと母親のハルノさん(1970年ごろ、自宅前にて)

り方⁷⁾の時間が大好きでした。栄町にいた時代に、小学校1年生になって、綴り方の時間がありまして、最初に栄町のことを書いたと思うんです。

まだ馬車の時代でした。荷馬車が、大きなスギやヒノキの長い樹木を束ねて、馬車に引かせて、こずえの方が道にはみ出しますでしょう。そうすると、こずえがゆらゆら動くので、危なくてかなわん。それで地面に下ろして、根元を荷台にくくりつけて、とことこ引いていくんです。すると、馬のひづめの音と、葉っぱを付けたこずえが地面を擦っていく音がするので、スギの木を運んでいるなと思ってそばに行きましたら、こずえがぱちっと私をなぎ倒したんです。とても痛かった。ぶっ倒れて、すりむいてけがをしました。泣いて帰りましたけど。

鎌田 それを小学校1年ぐらいのとき綴り方に書かれたんですか。

石牟礼 はい。そうしましたら、倒れたときに痛かったのはもちろんですけど、びっくりしたのが、書いてみたら、実際よりもなお強く痛みを感じたんです。それで、ものを書くというのは、こういうことだなと思って、書くことにたいへん興味を覚えました。

鎌田 すごいですね。小学生のときの書き方と、大人になって、『苦海浄土』を含めて、石牟礼さんが文学を書くのは、まったく同じですね。私はいまのお話を伺って、石牟礼さんの小説の世界そのものだと思います。もう生まれつき作家だったということですね。

石牟礼 あはは。作家として生まれてきたんでしょうかね。

俳句について

鎌田 私は「磐根樹根立」、岩や草の片葉が言葉をしやべるといふ感性が、文学にとっても宗教にとっても、これからの人間生活にとっても、とても重要だと思っております。石牟礼さんはそこのところをずっと小さいころから一貫して感じられたり表現されたりしていた。

草木のおしゃべりというのか、いろいろなものの声、語りというものを聞き取って、俳句や短歌や詩としてご自身の言葉にされています。

石牟礼 言葉になっているかどうか、怪しいものがございますが。

鎌田 短歌と俳句と詩の区別というのは、石牟礼さんの中ではあるんですか。

石牟礼 あまりないですね。

鎌田 では、自然に五七五になったり、七七がくついたり、詩になったり、自在に変わっていくのですか。

石牟礼 はい。

鎌田 能の言葉も同じですか。

石牟礼 そうですね。

鎌田 では、散文も同じですか。

石牟礼 散文は、やや違うかもしれません。私の詩や俳句は難解だと言われて、俳句というよりも思想詩だという人もいます。そうかなとも思いますけど。ただ、私は、どうでも言えると思う。

鎌田 もちろん思想も入っておられますが、俳句の場合、いちばん短い言葉で世界を切り取り、つなげたり切り貼りしたりする。それは非常にダイナミックな、いちばん短い言葉でいちばん大きな世界を表現することができるものですから、俳句の言葉遣いは、また独自のものがあると思います。

石牟礼 難しゅうございますね、俳句は。

鎌田 そうですね、短いだけに。だけど、うまくいくと、ものすごく広がりのある宇宙を表現できますよね。

石牟礼 最近も「花ふぶき生死のはては知らざりき」。

鎌田 「花ふぶき生死のはては知らざりき」。いい俳句ですね。ご詠歌の世界みたいです。この俳句は、いつごろつくられたんですか。

石牟礼 そんなに昔ではないです。

鎌田 その花ふぶきは桜ですか。

石牟礼 いちおう桜です。ここの玄関にコケの花が咲いているんですけど、ご覧になりましたか。

鎌田 はい、きのうお聞きしたので、帰りがけに。

石牟礼 きれいですね。それで、地震を結びつけて、コケの花が震えて地震が来たというような俳句にしようかと思っています。コケの花が、あんなにきれいに咲いているのを初めて見ました。

鎌田 俳句はそんなに考えてつくられるんですか。

石牟礼 すぐに、ぱっと出る場合もあります。

九重高原の奥に「泣きなが原」⁸⁾という地名があります。これを俳句にしたいのですが、難しいです。

鎌田 地名そのものが物語性を持っていますね。何か古い伝承があるんでしょうね。

石牟礼 あると思います。

鎌田 『古事記』の中に、イザナミノミコトが亡くな

ったとき、夫のイザナギノミコトが泣いて、泣いて、そしてナキサワメ⁹⁾という泣く神さまが出てくるんです。葬式のときに、たぶん熊本もそうだと思うんですが、お茶わんをばんと割ったりして泣く女性がありますね。そういうものの原形的な存在がナキサワメなんです。泣きなが原というの、そういう神話の伝説と結びついているような気がしますね。

泣きなが原と朝日長者伝説

鎌田 [翌日]きのう最後に、泣きなが原の俳句をつくりたいとおっしゃっていました。ホテルに帰ってから、大分県の湯布院から友人が来たので聞いてみたんです。すると、泣きなが原という言葉は知らなかったけれど、長者原というところがあると。それで調べてみたら、朝日長者伝説という物語がありました(コラム参照)。

石牟礼 初めて伺いました。

鎌田 それを読んでいて、水俣病の問題にも、日本国中に残っている長者伝説にも、いろいろな意味で通じるものがあると思いました。

昔から言い伝えられてきた物語で、栄えて没落していくということがどういう問題を含んでいるか。また一族の中から犠牲者を生んで、その悲しみを救うために、観音さまとか野仏とか、そういうものを人々がつくって大事にした。本当に『苦海浄土』と通ずるお話だなと思って、今日はそれをお伝えしたかったんです。

石牟礼 初めて由来が分かりました。

鎌田 石牟礼さんは泣きなが原というところがあるということは何で知られたんですか。

石牟礼 俳句の先生が大分県と阿蘇との境目あたりの村におられて、その先生や皆さんは泣きなが原が好きで、よく泣きなが原に行つて句会をなさいます。

鎌田 それで石牟礼さんも何度か行かれたんですか。

石牟礼 1度だけ、皆さんに連れられて。

鎌田 九重山の麓になりますか。

石牟礼 中腹あたりです。秋になってお月さまが出るとススキの穂が月光に波打っているんです。ただ行くだけで幸せ。でも、いまのお話を知っている人は誰もいらっしやいませんでした。

穴井^{あないふとし}太さんが主宰されている「天籟^{てんらい}句会」に時々招かれて行きまして、たぶん水俣病の話をしたんだろうと思います。ついでに私も俳句をつくって出しました。

鎌田 「籟」は響きとか声という意味ですね。いい名前の句会ですね。「サークル村」¹⁰⁾時代からの友人の方ですか。

石牟礼 友人というか、あちらが先輩ですけど、よくしてくださつて。「サークル村」にも行きましたし、天

籟句会にも招かれて行きました。

穴井さんが『天籟通信』という雑誌を出しておられまして、それに時々、私も出していました。また、新聞に原稿を書いたりするときに題名を俳句で書いたりしていましたが、いつの間にか、私がいたずらごころであちこちへ出した俳句を集めてくださって、ある日突然、「石牟礼さん、ご覚悟召されよ」と言われて、「句集をつくりましたよ。もう引っ込みはつきません。嫌だとおっしゃっても、もうできました」とおっしゃって持ってこられました。鎌田 その句集のタイトルは何だったんですか。

石牟礼 『天』という題名です。そして皆さんが、お祝いとして泣きなが原へご招待してくださいました。

鎌田 そのときの印象が強く残っているんですね。

石牟礼 はい。もう30年ぐらい前の話です。

鎌田 30年前の記憶も含めて、いま泣きなが原という地名を使った俳句をつくりたいということですね。

きのう最後にナキサワメという女神の話をしました。私の中では、泣きなが原と『古事記』の物語のナキサワメがつながって、泣く女性たちや、葬儀、死と結びついて泣く象徴的な出来事が、いろいろな意味で日本人のこころの中に、あるいは世界中のさまざまな伝説の中にあるんじゃないかなと思って、とても印象に残りました。

石牟礼 私も感動しっぱなしです。

鎌田 石牟礼さんが最初、歌人から出発して、その後俳句もしばしばつくられていて、映画の『花の億士へ』



泣きなが原(提供:松尾俱子)

でも「祈るべき天と思えど天の病む」など、俳句が非常に印象的に使われていますね。

石牟礼 私は俳人ではなかったのです。いまも俳人ではないですけど。

鎌田 でも、素晴らしい俳句をつくれるじゃないですか。

石牟礼 いやあ。天籟句会で酒盛りになったとき、「いまから石牟礼さんのことを俳人と呼びます」と皆さんから冷やかされて。私はうれしいやら、感動するやら。歌人のグループとはちょっと趣が違う。

鎌田 俳人と歌人の違いを石牟礼さんはどう感じていますか。

石牟礼 短歌の人たちは情緒的です。俳人は何かすきっとして。

鎌田 私なんかは、松尾芭蕉もそうですけど、俳句のほうに非常に宇宙的な感覚、それこそ天の感覚という

コラム

九重村に朝日長者と呼ばれる大金持ちがいた。ある年、日照りが続き、長者が雨乞いのお祈りをしたところ雨が降り始めた。村人たちは喜んだが、実は朝日長者は龍神様に、雨を降らせてくれたら3人娘のうち1人を差し出すと約束していた。3姉妹はそれぞれ自分が犠牲になると言ったが、結局、末娘の千鳥姫が懐に観音像を抱いて男池に行った。龍神さまに祈りお経を読むと大蛇が現れ、千鳥姫を飲み込もうとしたとき、観音像が大蛇の口に飛び込んだ。すると大蛇は、「私は朝日長者の下で姥をしていたが罪を犯したため大蛇の姿になった。観音さまのお慈悲とあなたの孝行心によって救われた。あなたはこれから白水川に沿って山を下りれば幸せになる」と言って姿を消した。千鳥姫は言われるとおり山を下り、和久見長者の息子に見初められて結婚する。

一方、朝日長者はますます栄えておごり高ぶるようになった。長女の豊野姫に婿を迎えてお祝いをしたとき、鏡餅を的にして矢を射ると言い出した。まわりの者は神罰を恐

れて止めようとしたが、長者はそれを聞かず、矢を放ってしまう。矢が餅の真ん中に当たったと思うと、餅は白鳥になって飛び去った。一同は、白鳥は長者の氏神、白鳥神社のお使いに違いないと思う。これをきっかけに、長者の家運は傾き始める。

朝日長者は、財産を山に隠そうと思い、人夫を呼んで穴を掘らせて埋めた。そして、穴を掘った人夫たちを口封じのために毒殺した。それ以来、長者の家にはたたりが起り、長者屋敷はさびれ、長者も病に倒れ、7日間苦しんで死んでしまった。

豊野姫と次女の秋野姫は、妹を頼って泣きながら歩き続けた。そこでそのあたりを「泣きなが原」という。二人は峠にたどり着いたが、そこで息絶えてしまった。いま、その近くに粗末な二体の石の墓がある。土地の人はこれを豊野姫と秋野姫の墓だといって大事にしている。(橋本邦雄「大分の伝説」を要約)

のを感じるんです。短歌には、大地とか人間のころろを感じます。

石牟礼 ああ、うまいことをおっしゃる。

鎌田 短歌は七七でころろが出る。だから大地的というか、人間的なものが短歌で、どっちかという、天の声に近いものが俳句だなという感じがします。

石牟礼 そういう感じがしますね。両方とも魅力がありますけど。

狐の話

鎌田 狐がたいへん好きですね。狐がいる「しゅり神山」が登場したり、狐になりたいとか。どうして狐が好きなんですか。

石牟礼 うちには年寄りたちがよく遊びに来て、ご飯を食べて、「ここがいちばん極楽じゃ」と言って、ごろりと横になって昼寝をして帰っておられた。そのお年寄りたちが集まられると、必ず化け物のお話をなさる。その化け物の正体はどうも狐らしい。いちばんおもしろかったのは、お隣のおじさんが「わしが見れば、どこの狐か分かる」と。

鎌田 狐の正体を見分けることのできるおじさんがいたんですか。

石牟礼 正体だけじゃなくて、人間でもアメリカ人と日本人の顔が違うのと同じで、狐たちも、どこの狐か、わしが見れば分かると。そして鳴き方も声も違う。

鎌田 鳴き方に方言がある。すごいですね。

石牟礼 海に面している大廻りの塘^{うまわ}という川口の土手がありました。その大廻りの塘に行く、と、狐たちが遊びに来ている。それを見れば、どこから遊びに来た狐か分かる。それで、狐がお互いに「今日はどこ行きな」ぐらいのあいさつはすると。

鎌田 へえ。狐のお話がわかる。私は『苦海浄土』を妻に読んで聞かせてもらったんですね。そのときに妻は『苦海浄土』を読みながら15回泣いたんですよ。私は左目の網膜剥離の手術をしているので泣いてはいけなくて我慢していたけど、5回泣いたんです。2人がいっしょに泣いたのが、狐が出てきて対岸の天草の方に渡っていくときに、お金がない。お金がないけど渡っていいかというふうに、漁師さんとやり取りする場面です。そのときの狐に対する情愛がよく描かれていて、その狐も優しい、律儀な狐で、そのお話は染み込んできました。

実は妻は狐が大好きで、家にも狐の像を置いてあるんですよ。2人ともあの狐の場面に感動して、本当にいい小説だなと話し合いました。あれは実際にそういうお話を聞いたんですか。

石牟礼 聞いていましたね。漁師さんたちは、雨の日

とか嵐の日とかは海に出られませんよね。そういうときはよくうちに集まってきて、焼酎を出しました。そうすると、面々に物語をつくってこられるんです。

鎌田 ストーリーテラーですね。語り部。

石牟礼 語り部。「今日の話は華^{はな}じゃったな」とおっしゃる。語りの名人たちがいますから即興的につくって話せる。あるいは体験したのかもかもしれません。それを子どもの私は聞いているんです。語る人はもう話の中に入ってしまっておられた。だから迫真的ですよ。

鎌田 それは寄席や吉本新喜劇とかよりももっともとおもしろい、最高の機会ですね。月に何回ぐらいそういうことがあったんですか。

石牟礼 月に1回以上。母もいそいそもてなして。

鎌田 何人ぐらい集まってくるんですか。

石牟礼 2、3人だったり、4、5人だったり。話上手な人が来るときは、「今日はあの人^{あの人}が来なさるからおもしろかぞ」と言って母はもてなすんです。

鎌田 それが記憶に非常に鮮やかに残っていて、その中のひとつのお話が『苦海浄土』の中の狐の話になっているわけですか。

石牟礼 はい。狐の穴が発破で壊されて、それで天草に戻ろうかということになって、大崎^{うきざき}ヶ鼻のあたりから漁師さんが舟を出すときに、狐たちがやってきて、「すみません。舟賃がございませぬが、戻れば働いて返しますけん、連れていってくださいませぬでしょうか」と頼むのです。

鎌田 因幡^{いなば}の白兔の神話がありますね。因幡の白兔はサメをだまして、上をとんとんと跳んで向こうへ渡っていくんだけど、このお話は、狐さんが人間の漁師さんに、「ちゃんと後で返しますから」という。

石牟礼 「必ず働いて返しますけん。いまはお金、持ちませぬ」と言って頼んだら、「銭はいらんぞ」と言って乗せて行った。中には、木の葉でなくて本当のお金をどげんかして持ってきた狐もおったと言っていました。

鎌田 おもしろいですね。私は石牟礼さんの文学や思想に非常に共感するんですけど、いちばん根底的なものは、人類が持っているエゴイズムとか、いろいろな業み^{わざ}たいなものも描くと同時に、本当の祈りというのは生類全体に向けられている、ここが肝心なところだと思っただけです。

小説の中にも、さまざまな物語の中にも、狐や狸、いろいろな小さい動物たちが人間と同じように、あるいは人間以上に、切なく、生き生きと語られている。その生類に対する思いというものが、小さいときから、いまのお話のように、生きていたんですよ。

石牟礼 はい。本当に狐になりたかったんですよ。なりたいたいと思えばなれるかと思って、お尻をなでてみる

けど、しっぽがなかなか生えてこない（笑）。

鎌田 それは5歳ぐらいのときですか。

石牟礼 5、6歳から7、8歳ぐらいまで。とんとん村に最初に住み着いたクロダさんというおじいさんは、若いときに狐に化かされたことがある。祝言に招かれて行って、したたか飲まされて、お土産を重箱に詰めて持たされて、丑三つ時ごろ、大廻りの塘を一人で帰りよったら、美人の女の人に化けた狐が話しかけてきた。いろいろ相手をしているうちに眠り込んでしまった。朝方、寒いので目が覚めて、俺はどこにいるかなと思ったら、大廻りの塘だった。そこらあたりに食べられた重箱が散らかっていたそうです。うちの者たちは、帰ってこないのを心配で迎えに行ったら、ぼう然として探しものをしておられた。その話は村中が知っていました。

未来の希望

鎌田 最後に、石牟礼さんは未来に対してどういう思いを持たれていますか。

石牟礼 差別を受けた人、深く傷ついた人たちがたくさんいますよね。未来は、そういう人たちの中に、むしろ希望があると思うんです。

鎌田 水俣病など、いろいろな差別を受けてきた人たちの中にこそ未来の新しい何かを切り開いていく力と希望がある。

石牟礼 それが生まれるだろうと思います。日本列島はコンクリート詰めになっていますから、表面は息も絶え絶えですが、この前の地震で、底の方が割れ、深い地殻の底が動くだろうと思いますね。

鎌田 江戸時代の人には地震に「地が震える」という字を当てないで、「地が新たになる」「地新」という字を当てて、世直りの1つの兆しだと考えたそうです。

私も、その江戸時代の庶民の捉え方にすごく共感できるんです。地震というのは、人間世界に災害をもたらすだけではなくて、土地の中から新たによみがえらせたり、生み出したりする力があるんだと。

石牟礼 最近、しきりに地震が起きているようですね。

鎌田 地震も増えました。竜巻も、台風も、集中豪雨も、増えました。気象が異常ですね。天の声も、地の声も、植物たち、動物たちの声も、みんな物狂いの状態に入ってきていると思う。狂いながらも、先ほど言われたように、希望のあるところへ、その先へ、つなげていかなきゃいけないと思うんですよね。

石牟礼 そうですね。

鎌田 最後に感謝の気持ちで、石笛とほら貝を吹いて風の又三郎のように帰りたいと思います。

（石笛とほら貝吹奏）



鎌田 ありがとうございます。

石牟礼 ありがとうございます。

* 撮影・取材協力：金大偉

（2014年9月18-20日、熊本市にて）

編集部注

1) **チツ** 新日本窒素肥料株式会社（1965年チツ株式会社に改称）水俣工場がメチル水銀を含んだ廃液を未処理のまま大量に不知火海（八代海）に廃棄したため水俣病が引き起こされた。

2) **とんとん村** この土地に最初に住んだ兄弟の1人は動物の皮をはいで太鼓を作っていた。太鼓の皮を叩くととんとんと音がするのでとんとん村と言われるようになったという。

3) **しゅうりりえんえん** 「しゅうりりえんえん／しゅうりりえんえん／わたいはおぎん きつねのおぎん／しゅり神山のおつかい おぎん」で始まる作品。『不知火——石牟礼道子のコスモロジー』に「しゅうりりえんえん、という言葉は、もちろん辞典にはありません。辛い世界から出てくるための呪文というか、祈りを長い間やっていたら、こういう言葉が出て来ました。……本当に苦悩の深いものほど、しゃべらないのだから、空の奥に赤い花のように咲いているだけだとわたしは思うのです」とある。

4) **しゅり神山** チツの工場の裏の明神の手前の山。位の高い狐のおしゅらさまをはじめ狐や狸、妖怪が棲む。

5) **湯出** 水俣市街地から国道117号線を約8km山間部へ入った温泉郷。湯の鶴とも書く。

6) **ストン節** 大正13年（1924年）につくられたこっけいな俗謡で、昭和のはじめまで流行した。

7) **綴り方** 作文のこと。

8) **泣きなが原** 大分県玖珠郡九重町の涌蓋山の麓にある草原。

9) **ナキサワメ** 妻のイザナミを亡くして泣くイザナギの涙から化生した女神。『古事記』では泣沢女神と表記される。

10) **サークル村** 1958年、谷川雁、森崎和江、上野英信らが、労働者を表現によってつなぐことを目指して筑豊・中間で立ち上げた自立共同体。石牟礼道子さんも結成に参加し本格的な文学活動を開始した。

11) **大廻りの塘** 不知火海に面して大きくまわっている堤で、両側を深いススキが囲っていた。石牟礼道子さんは子どものころここで遊ぶのが大好きで、ススキの草むらに入って狐になりたいくて「コン、コン」と鳴いたりしていた。



図2 シバ材となるコバノミツバツジ

れた東寺以北の京都盆地の4分の1ほどであって、それ以外は洛中の暮らしを支える農耕の場、薪炭供給の場としての洛外の集落が盆地の縁辺部を取り巻き、洛中一都市と洛外一農村が一体的なシステムとなって、千年の変わらぬ歳月を送ることのできる暮らしの形があったことを物語る(図1)。

この洛外の集落は大きなまとまりのあるところを取り上げるだけで悠に10を超えるが、これらは機能別に分類できる。つまり、①稲作型集落、②畑作・シバ材生産型集落、③林産物(薪炭材・木材またはシバ材)生産型集落である。

この3つの農村集落を概括する前に、新しい用語=シバ材を説明しておかねばならない。

上方のシバ材利用

山といえば、どこでも人が望む樹種を生産できるわけではない。ナラ類であるコナラや、以前は盛んに植林されたスギやヒノキは、わが国においても奇跡的に広い範囲で植栽が可能な樹種であるが、これらといえども放置しておけば、本来天然で分布する場所ではか夭寿を全うできない。短い期間で商業ルートに乗せようという人間側の算段とうまくマッチングしていたからこそ、至るところでこの3樹種をみるに至った。

つのみであって、残る場をツツジ科の低木が占めていることがかつては多かった。

このツツジ科の低木は株立ちとなったうちの2mほどの枝を地際で採取する。すると、7、8年で元の姿に戻る。しかも、燃料として用いると火付きが早く、火力も強い。これをシバと呼ぶ。

大原女、白川女と呼ばれる女性たちが頭にシバ材の束を乗せて、市内を売りに来たことは今では記録上ではか思い出せなくなっているが、洛中での火付け材、炊飯用材としては人気のあった燃料材である。

京都の春は、このツツジ科の一種、コバノミツバツジの一斉に咲き揃った花の景色で始まった(図2)。

ナラ材(ブナ科樹種材)ばかりを用いる江戸の文化に対して、京都では古くからこのシバ材とナラ類の薪炭材とを組み合わせた燃料

それでもこの3種でさえうまく育たない場所がある。土が浅く、石ころや粘土質で、乾燥しやすい凸型の地形に多い。ここでは、木材にでもできる大きな木といえば所々にアカマツが育

を用いてきた。付け加えると、もうひとつ、材質が緻密なりョウブ、ヤブツバキの2樹種は炭に焼くと火持ちがよく、お茶席などの特別な場で重宝され、現在でも地形を選んで点々とリョウブ林、ツバキ林が残るが、いずれも鹿の食害によって衰退が激しい。これらはシバ材とは呼ばれず、薪炭材に含む。話は飛ぶが、紀州や九州などで生産されてきた備長炭となるウバメガシは京都よりもはるばる遠い江戸に運ばれ、高級炭としてもはやされた。

稲作、畑作の洛外集落

さて、元に戻る。稲作型集落は、賀茂、太秦、桂、深草といった低湿地地形を基盤とする弥生期以来の集落がこれに相当し、古くは秦氏、賀茂氏などを祖先とする人々がいまなお多くここには暮らす。この稲作民は独自の森の文化を育むことなく、山は自家消費の燃料材とともに、木肥、草肥と呼ばれる田畑に鋤込む採肥の場として経営されることがあった。明治期の帝国陸軍陸地測量部作成の土地利用図を基に、薪炭材に乏

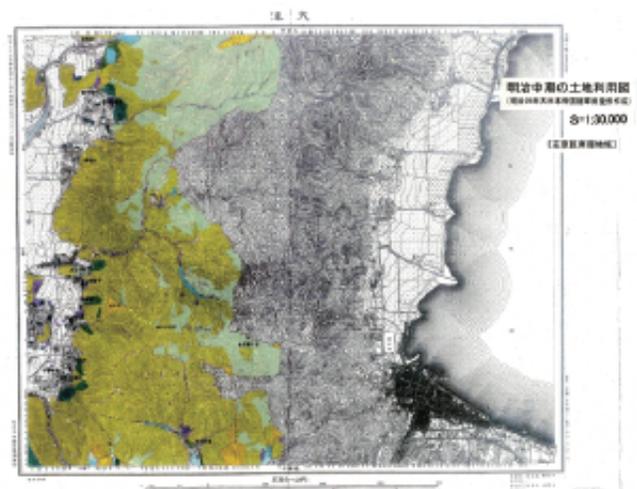


図3 東山(大文字山周辺)の土地利用(帝国陸軍陸地測量部、明治22年作成)

図に示されている色は、黄色:裸地(中央やや左下の小さな三角が大文字で、その面積は限られている)

薄い緑色:「松林小」とされているシバ山(シバ材採取林)

黄土色:「松林大」とされているシバ山(ただし、ここには粗放的な薪炭林(コナラ林)を含んでいたと考えられる)

濃い緑色:スギまたはヒノキの植林地



図4 鞍馬の火祭(提供:京都市)

しい現状の植生を検討するとこのことが推察される(図3)。ただし、洛外の農村集落で用いる肥料の主力はあくまでも都から大量に排出される人糞を回収し、糞肥として用いられる仕組みがあって、これらは1960年代のはじめまで続いてきたことには留意しておきたい。

畑作・シバ材生産型集落とは、大原、静原、上高野、白川、一乗寺、浄土寺、大原野などの旧集落を指す。これらの集落の多くは緩やかな傾斜をもつ扇状地であって、縄文期の遺跡がしばしば発見される。北白川や大原などの集落後背の山々は、地質的には硬い岩盤質のチャートや貧栄養で知られる花崗岩を基盤に持ち、山腹上部ではシバ材となるツツジ科低木の好む立地がある。それぞれの集落は山から流れ出る花崗岩やチャートからなる扇状地に展開していることもひとつの特徴である。扇状地は水で運ばれた土壌から成っており、水はけのよい礫質あるいは砂質の土壌が多く含まれることから、水田工作に適さない。そこではいきおい生産性の低い畑作に依存しなければならず、畑作を行いつつ、山腹下部には薪炭材の商業的生産を行い、山腹上部では、シバ材の商業的生産に向かう農林兼業型集落を形成してきた

歴史がある。いずれにせよ、この畑作・シバ材生産型集落——農林兼業型集落の所在地が縄文時代の遺跡群と重なることが多いことは、逆に弥生期稲作民の最初の居住地であったとされる賀茂、太秦などの稲作型農村とは重なることがないことを示しており興味深い¹⁾。

山棲みの集落

林産物生産型集落とは自家用の農作物の生産はさておき、商業的な生産の大部分を材や薪炭材などの林産物に委ねる生活様式をとってきた集落であるといえる。このような集落は洛外といえども京都盆地にはなく、主に京都盆地の山懐にあたる北山山中をいくらか入り込んだところにある小盆地や渓谷の河岸段丘面に集落を形成する。つまり、山棲みの集落である。

これに該当する集落のうちの代表的なものに鞍馬がある。鞍馬は由岐神社の大祭である火祭で有名である。この夜に行われる祭りは、観光客の多い夜の9時過ぎ頃までではなく、これを過ぎてからでないと本番ではないと地元の人々という。確かに午後10時近くになると、京都の市街地方向である南のはずれから巨大

な鉾を立てながら人々の集団が由岐神社門前、鞍馬の町並みへと大きな塊となって進んでくる。これに対して、鞍馬の町並み方向では同じく鉾を立てた集団が待ち構える。この大集団どうしがしばらくの間、門前での激しく、しかし、静かなせめぎ合いをつづけ、その結果、両者ともに立てた鉾を収めるという寓話化された歴史の記憶を伝承する(図4)。

これとよく似た実際の構図が鞍馬よりも少し下がった山あいの集落、二ノ瀬に伝わる。二ノ瀬には千年前から2つの主だった家系が存在し、一方は在来の千年以上前からそこで暮らしてきた家系、もう1つは^{これたか}惟喬親王の側近が土着したという由来をもつ家系。惟喬親王は千百年前、紀氏の母をもったことによる悲運の皇子で、藤原良房をはじめとする勢力に圧迫されたまま近畿をさまよいついには大原の地で亡くなったという。山棲みの集団にろくろによる木椀製作を伝えたことから木地師の祖ともいわれるこの親王の一統と、これをさらに上回る歴史をつなぐ在来の一族が共存しているというわけである。

この2つの集落以外にも、^{たかがみね}鷹峯や花背、中川などの集落には現在も山仕事を生業とする人々がおり、スギ、ヒノキ造林の近代林業の担い手ともなった。

稲作型集落である西賀茂の後背の山々はこの人工林化が徹底的に進んだが、この担い手の大部分が鷹峯から来た林産物生産型集落の人々であった。人工林の価値が失われた現在、新たな森林に関わる技術を求め、そこに生業の基礎を置こうとする人材が、都市近郊にあっても鷹峯や花背、二ノ瀬などにあることは驚くべきことでもある。この伝統は林産物生産型集落にだけあって、同じく山を後背にもつ稲作型、畑作・シバ材生産型集落が所有してきた山林におけるスギやヒノキの人工林は経営意欲が失われ、手入れされることなく放置

されて荒廃しているところも多い。山への思い入れの伝統の違いをそこにみる。

都の持続性 —もうひとつの役割

かつて京都という都市にはその存続を長期にわたって許す持続的構造があったことは間違いない。都市の長期にわたる存続にとっては、衣食住を賄う必要な資源があると同時に排泄される負荷を消化できる仕組みがそこになければならない。

負荷という言葉を出すことも憚られるのが、死者の扱いです。死者とは単なる死体という意味だけではなく、死者は崇る。死者を葬り、崇りを鎮めるためには社寺の存在が欠かせない。千二百年の間、京都という都市を維持するためには、これを囲む山々は薪炭材や木材の供給ばかりではなく、葬り、鎮めるための山々が欠かせなかったことは、この山々の山裾にいくつもの社寺が立ち並んでいることからよく分かる。

死者の葬送については、京都では「三野」という言葉を聞く。化野、蓮台野、鳥辺野を指す。これらは葬送の地として名高いが、近傍で稲作が行われてきた化野以外は、必ずしも農耕に適しているとはいえない地でもある。蓮台野には風化したチャートの岩脈が広がり、鳥辺野は鴨川の氾濫を受ける。

真偽は不明であるが、鳥葬が行われたのではないかともいう鳥辺野は鴨川の河原に近いが、死者をそのまま河原に捨て置いたというよりも、公家階級を中心とした人々が火葬を行ってきたことは明らかである。また、何よりも中世から近世にかけて、京都で市中死者の葬送権をもつ犬神人、河原者（坂下者）という、後には穢多と呼ばれた被差別部落民が、死者の少なくとも一部を、社寺の背後にあって、山裾に農村集落をもたない東山の山並みに埋葬したであろうことは、今現在もお山中から

出土する石仏の多さをみても頷ける（図5）。

つまり、山は火葬に供する燃料材を生み出すと同時に、死者そのものを葬る埋め墓であったし、山裾の寺々は、詣り墓としての役割を果たした可能性も高い。

鳥辺野で推論されるこのようなことは化野、蓮台野でも同様であったと考えられる。

ただし、山のどこにでも死者を葬ったかといえ、決してそうではなく、農村集落が入会林として所有する商業的薪炭林やシバ材採取を行うシバ山では行われなかったし、社寺が領地・境内地として有する山においても、厳密に仏の領域と神の領域が区別され、神の領域には埋葬しない大原則が守られてきたことは、近世以前の天台寺門宗園城寺境内山林の土地利用史をみても分かる。

森林利用の多様性

このように平安京成立以降から燃料革命以前にかけての京都を取り巻く山々の植生としての用いられ方を全体として整理すると、以下のように類別できるのではないかと考えられる。

- (1) 商業的薪炭林（良材が育つ立地にはとくに商品価値の高いクヌギがみられる）
- (2) 商業的シバ採取林（シバ山：多くの場合、シバ材の上層にはアカマツが高木層を優占するため、見た目にはアカマツ林とされる。ただし、すべてのアカマツ林がシバ採取林ではない）
- (3) 農用林（茅場を含む）
- (4) スギ、ヒノキ植栽林
- (5) 未利用林（一部の限られた神社林＝社叢）



図5 埋め墓から出土した石仏群；清水寺

(6) 粗放的薪炭林²⁾

われわれ森林、樹木の専門家は、植生の過去の姿やその変遷を推定するとき、その森林を構成する樹種、それぞれの個体の年齢の推定および高さや樹木の形状、密度、分布のあり方などを比較しながら判定する。

たとえば、商業的利用がなされてきたナラ類の薪炭林やツツジ科低木のシバ採取林では、最大限の密度まで利用樹種の個体が粗密のないように一様に分布しており、幹の年齢も一致する。また、根際には繰り返された伐採の幹跡が残っている（図6）。

伐採履歴の有無、頻度などの観点から、林地を上記に挙げた組成や構造などから判定すると、土地利用の(1)～(6)の類別をさらに説明補完できるかもしれない。

① 一度も伐採を経験せず、そこで育つ樹木の寿命（多くの場合、数百年以上）を超える長期間を経た場合→原生林、または原生的環境と呼ばれる。京都のように地形、地質が複雑で森林の成立する気候帯では、構成種は多様で、異齡的な齡集団となる。きわめて限られた神社林、人の立ち入れない急な崖にしか存在しない。

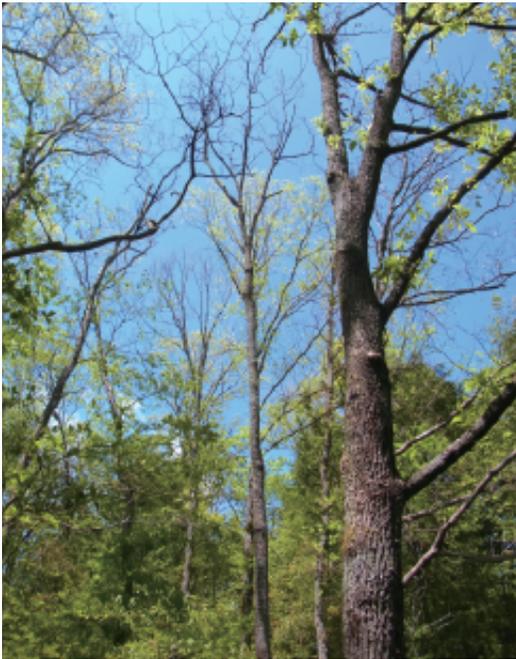


図6 ナラ枯れによって被害を受けているクヌギ林



図7 多様で異齡の集団の奥山の森(上)と、同齡的な薪炭樹種だけの里山の森(下)

② 選択的、局所的に特定サイズ・特定樹種の伐採を不定期に、多くは繰り返し、受けている場合→人の生活圏と離れた森(奥山)のうち、木地師が入っていた森。原生林に近い多様性と異齡的な構造をもつ。

③ ①または②が一度だけ皆伐(森を構成する樹種のうち、価値のある木とその採取の支障となる木のすべて伐採)を受けた後に成立した場合→近代以降の伐採手法であって、多くはチェーンソー(電動ノコギリ)を用いて行われた。構成樹種の多様性は①、②に次いで高いが、伐採後一斉に森林が回復したため、やや同齡的な齡集団となっていることが多い。なお、同齡の森では、樹冠の高さが揃いやすく、林床への光が極端に制限されるため、一般に草本類の出現種数は乏しくなる(図7)。

④ 定期的に伐採を受けている場合

→利用効率を挙げるために、回復速度の早い萌芽性(ひこばえが出やすい)の樹種であるコナラやミズナラなどが用いられる。シバ山では萌芽性のつよいツツジ科の低木類と種子からの発芽力が高く生長にすぐれたアカマツがこれに相当する。集約的に商業利用しているところでは、利用樹種だけを残し、自然に侵入した他の不利用樹種個体を徹底的に排除している。かつて、チェーンソーを用いなかった時代には、伐開の範囲は広大な規模

にはならなかったため、光が差し込む強さの異なる林地が小さなモザイクとなってパッチワークのように変動していた。このため、草本類の多様性はきわめて高かったと考えられる。

⑤ 不定期であるが頻繁に伐採を受けている場合→監視の目の行き届かない道沿いや社寺林などで主として所有者以外によって頻繁に盗採されてきた森や、所有者による採肥として枝葉を得ている低木林などを指す。粗放的薪炭林である。

⑥ ⑤が伐採前の状況に回復するまでに再び、あるいは過剰に伐採を受けて森とは呼べなくなった場合→風化花崗岩を基盤土壌にもっている場所に多くみられるハゲ地、ハゲ山を指す。最近では、増え過ぎた鹿によって、草地群落となり、ついには崩壊を起しハゲ山となったところが増える傾向がある。この場合、風化花崗岩地に限らない。

まとめに代えて

こういった整理の上で、京都の周りを織り成す三山のありようをみると、日常生活の上で頻繁に必要なとされる薪、炭、シバ材の供給を果たして

きた場、採肥の場があつて、これを支配する集落があり、また一方で死者を葬る場とこれを弔う寺院群と支える集落があり、さらには地主として崇められ、あるいは祟りを鎮める役割を担う神社がある。これらは、それぞれの山の持つ地勢や地形、地質に沿って多様にかつ持続的に経営されてきたであろうことが推察される。これらの点からも、京都にはハゲ山という過剰利用された山がほとんど存在しなかったことは断言できる(図3参照)。

近年、自然エネルギーへの回帰や里山の生物多様性保全を目指すために里山の再利用を図ろうとする意見も目立つ。これにあたっては、地域の地勢、地形・地質・土壌、対象となる生物種の特性の把握などとともに、地域が歩んできた歴史や伝統の中に残されてきた人々の思いの痕跡を見出すこともまた重要であろう。

注

1) シバ材は嵩高いまま用いるため、重量単価は高いが、容積単価は安くなり、長距離の運搬には適さないが、洛外の集落ゆへの市中への近さというアドバンテージによって、盛んにシバ材が用いられるようになったともいえる。

2) 粗放的薪炭林とは、自家用に多くは不定期に薪炭材を採取されてきた場合と、監視の目が行き届かない道筋や社寺林などで頻繁に薪炭材が盗採されてきた場合の薪炭林を指す。

参考文献

四手井綱英『森林はモリやハヤシではない——私の森林論』、ナカニシヤ出版、2006年。

内山節『「里」という思想』、新潮社、2005年。

川嶋将生『洛中洛外の社会史』、思文閣出版、1999年。

田中和博編(高田研一共著)『古都の森を守り活かす』、京都大学出版会、2008年。

京都市風致保全課『京都市三山森林景観保全再生ガイドライン』2012年。

論考●特集・里山

里山とたたら製鉄

海老澤 衷 (早稲田大学文学学術院教授)

Tadasbi EBISAWA



1948年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、大学院文学研究科修士課程、博士後期課程進学。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員、早稲田大学文学部専任講師、助教授を経て、95年同教授、現在に至る。2012年～2014年早稲田大学文学学術院副学術院長、大学院文学研究科長、総合人文科学研究センター所長。2014年から早稲田大学研究院副院長、文化審議会専門委員(文化財分科会)を務める。日本の荘園史研究から出発し、東アジア水田開発史、村落景観論に関心がある。著書に『荘園公領制と中世村落』(校倉書房)などのほか、最近の共編著に『中世の荘園空間と現代——備中国新見荘の水利・地名・たたら』(勉誠出版)がある。



図1 新見荘の領域と大成山遺跡(国土地理院「地理院地図(電子国土web)」をもとに作成)

「もののけ姫」と歴史学者網野善彦氏

もう20年近く前のことになるが、宮崎駿監督のアニメーション映画に『もののけ姫』という作品があった。劇場公開とともに大変な評判となり、多くの人が映画館に足を運んだ。またテレビでも繰り返し放映されたの

で、最近の大学生でもほぼ全員がそのストーリーを知っている。歴史的眞実ではないにしても、日本中世(それも戦国時代)を背景にしていて、大人が見ても引き込まれるリアリティーがあり、専門の研究者の間でもさまざまな論評が行われた。それもそのはずで、20世紀後半の歴史学界に大きな影響を与えた網野善彦氏の歴史観をストレートに反映しており、多くの研究者(歴史分野のみならず他分野も含めて)が議論の場に参加した。劇場公開の際に頒布された「もののけ姫」のパフレットには網野善彦氏が語ったページがあ

り、それには『「自然」と「人間」、二つの聖地が衝突する悲劇』というタイトルが付されている。『もののけ姫』はストーリーの展開が早く、そのあらすじを追うことは容易ではないが、このタイトルにより誰でも物語の仕組みを把握できることになる。網野氏の歴史観とそれを具現化した宮崎氏の才能には今もって驚嘆せざるを得ない。「自然の聖地」はサンという山犬に育てられた少女によって象徴され、「人間の聖地」はエボシゴゼンという白拍子風の女性によって率いられている。両者は一騎打ちをも辞さない闘志を有していて、

それぞれに率いられた動物と人間が入り乱れての決戦を挑む。自然と人為との戦いなのである。その背景として天長様のいる京都があり、天長様と現地を結ぶ曰くありげな山伏やアサノ公方という大名も登場する多彩なキャストである。場の設定が明快であり、パンフレットによれば山陰地方にそのモデルがあるという。さらに東北の白神山付近から呪いの謎を解こうとしてやってきたアシタカという好青年が、生死をかけたラブストーリーを展開させつつ、問題解決に向かって努力するのである。そこには現代社会が直面している人類のサスティナビリティが投映されていた。

このような壮大な物語の中心にタタラ場がある。エボシゴゼンに率いられた集団は、上質の鉄を生産し、牛を輸送手段としてシシガミの森という深い自然林を越えて市場まで運び、そこで米などの生活物資に交換して日々の集団生活を維持している。鉄生産の拡大にともなって自然林は破壊され、人為と自然の深刻な対立となるのである。

中世荘園における鉄年貢の貢納

中国地方には実際に鉄を年貢として供出する中世荘園があった。砂鉄を産することで知られている伯耆国ほうぎのくにや出雲国に近接する備中国びつちゅうのくにに存在した新見荘である(図1)。この地は、現在の岡山県新見市にあたる。瀬戸内海に注ぐ高梁川たかはしがわの上流域であり、砂鉄包含層が広く分布し、たたら製鉄が盛んに行われた地域であった。人文地理学の研究成果によれば、鉄穴流かんな流しという技法により大規模な砂鉄採取が行われたため、前近代において大きく地形が変化していることが明らかにされている。備中国新見荘は、本家が最勝光院、領家を小槻家として平安時代末期に成立した。最勝光院は建春門院滋子の御願により法住寺殿という後白河法皇の壮大な

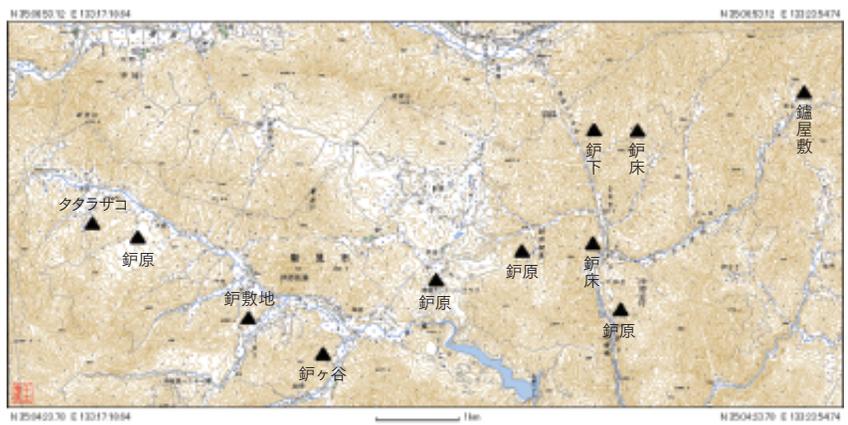


図2 高瀬・釜のたたら製鉄にかかわる地名(電子国土webをもとに作成)

宮殿の中に建立された寺院である。滋子は短い生涯ではあったが、後白河法皇に愛され、高倉天皇を生み、平氏の全盛期を現出したことでも知られている。このように最勝光院は華麗な建春門院の生涯を彩る寺院であるが、鎌倉時代になると堂宇も寺領も維持が困難となり、空海創建の東寺に預けられた。東寺では最勝光院方という部局を置いて管理することとなった。もともと新見荘は在地の開発領主大中臣氏によって、実務官僚的な貴族である小槻氏に寄進されたもので、それがさらに最勝光院に寄進されたものである。大中臣氏は公文となって現地を支配したが、最近の研究で製鉄に関わっていることが解明されている。領主の小槻氏は鎌倉時代前期に「修理東大寺大仏長官」に任命されていたことが知られ、この氏族はもともと鉱物資源にも関心があったらしい。

新見荘では文永8年(1271)に領家による大規模な検注が行われた。このとき作成された「新見荘惣検作田目録」によれば、98町9段ほどの現作水田が計上されている。したがって、当時この荘園全体で100ヘクタールを越す水田で作付けが行われていたことがわかる。さらに年貢徴収をみると、その筆頭には

吉野村田五町四段三十代 分鉄二百七十三両 段別五両とあり、水田1段に5両(約200グラム：詳細な数値は算定不能だが、古

代中世の一般的な算定状況から1両約40グラムで換算)の鉄が年貢として賦課されていることがわかる。この吉野村は現在の高瀬と呼ばれる地区であり、高梁川の支流である西川の上流域にあたる場所である。この検注の担い手は公文の大中臣重孝であり、他に預所代と田所代も判をしており、さらに領家からの御使いもこれに加わっていた。地頭の判は得られず、今後の問題を残したものの、領家は壬生流と大宮流に分かれて係争中ではあったが、荘園経営には積極的な姿勢を見せていた。

この地で、「タタラ場」はどのように存在していたのであろうか。その手掛かりの1つが図2である。これは現在の高瀬と東隣の釜地区に存在する「たたら」という地名を拾ったものである。「釜」、「鉦」などのつく地名が10箇所ほど確認できる。たたら製鉄の痕跡を濃厚に示しているといえよう。

公開実験によるたたら製鉄

鎌倉時代末期には、後醍醐天皇がこの新見荘を東寺に寄進し、南北朝期以降戦国時代まで東寺の荘園として存続した。中世の新見荘が所在した岡山県新見市は、荘園の伝統を大事にしており、JR伯備線の新見駅前には15世紀における東寺の代官と荘官の一族であった女性の銅像が立てられている(図3)。さらに、たたら



図3 新見荘に生きた女性たまがきの銅像

ら製鉄の実験施設を作って公開実験を行っており、この火入れ式には東寺長者が立ち会い、多くのボランティアが手動の送風装置を徹夜で動かして銚^{すく}あるいは鋤^{ひら}と呼ばれる原料鉄を作っている。この公開実験のリーダーである藤井勲氏は、新見庄中世たたら伝承会を率いて、木炭と砂鉄の調達から実験の成否に重要な影響をもたらす炉床作りなど、実験全体の差配を行っている。日本美術刀剣保存協会が島根県安来市で国庫補助事業によりたたら製鉄を行っているが、日本刀の素材となる良質な原料鉄を作るため、製造過程は非公開となっている。ここには村下^{むらげ}と呼ばれるたたら製鉄の指導者がいて、伝統的な技法を現在に伝えている。新見庄中世たたら伝承会はこの村下から伝統的な技法を伝授され、毎年実験を繰り返しているのである。また岡山県古代吉備文化財センターに勤務する上楯武氏が実験をデータ化して報告書の作成などを行っている。このような復原実験によってたたら製鉄の実態が解明されてきた。1回の実験で約600kg程度の鋤と呼ばれる原料鉄が生まれる。このような実験によれば、たたら製鉄は基本的に村下と呼ばれる1人の専門家の指揮の下で、多くの労働力と物資を集約することによってできるものであることが確かめられる。

弘安7年(1284)12月に作成された新見荘官物等徴符案という史料によれば、国貞名の名主は所当鉄13両

2分と分鉄9両3分の貢納が義務づけられていた。前項で検討した史料によれば水田1段について5両の貢納が義務づけられており、所当鉄はおそらく名田に賦課されたものであり、分鉄は国貞名の場合、「正作分田」にかかるものと推定されるので、領主直営の水田のなかで国貞名主に割り当てられた鉄であったと考えられる。1人の名主が合わせて22両5分の鉄の貢納を請け負っていたことがわかる。最終的にどのような製品を目指す鉄が求められていたのかは不明であるが、880グラム前後のものであったと推測される。おそらくこれは当時の名主たちにとって法外な負担ではなく、多少無理はあっても日常生活の中で負担できるものであったのであろう。

「タタラ場」の実態を示す大成山遺跡と名主たちのたたら製鉄

前述のように新見荘内吉野村で鉄年貢が貢納されていた。吉野村はやがて高瀬と呼ばれるようになり、現代に至っているが、先に指摘したように「たたら」という地名はこの地で多く残存している。また、砂鉄包含層の露頭をこの高瀬の地で視認することができ、地域内においてたたら

ら製鉄が行われていたことは確実であるが、現在のところ明確な遺跡は確認されていない。しかし、隣接する神代郷(この地の人々と新見荘の荘官や農民が頻繁に行き来していたことは東寺文書によって確かめられる)の油野^{あぶら}には鎌倉時代から江戸時代に至るたたら施設が存在したことが知られる。現在、その遺跡の多くは湖底に沈んだが、良好な遺構がダムサイトに移されて保存されている(図4)。全体が大成山遺跡と呼ばれているが、広域に及ぶ複合遺跡で、鎌倉時代から近世末期まで確認できる非常に息の長い遺跡である。谷あいには存在するが周辺では水田耕作も行われていたところであり、周囲の村落から隔絶した立地では決してなかった。ダムの減水期には周囲の山肌が露わになるが、それらは砂鉄包含層で成り立っており、砂鉄採取の適地であったことをうかがわせる。特に近世には高殿と呼ばれるような大規模な遺跡が確認され、周囲は雑木林の山並みとなっており、炭焼きの適地でもあることがわかる。したがって、まったく人跡未踏の地ではなく、里山という表現が当てはまる場所に存在するのである。

前項の実験結果と大成山遺跡の立



図4 大成山遺跡(湖底から山稜に広がる)

地を考慮すると、13世紀の後半、名主とその配下の農民は次のようにして鉄年貢に関わる生産と貢納に従事していたのであろう。

(1) 秋の収穫後における砂鉄の採取。小谷の沢の側面にある砂鉄包含層の露頭の掘り崩し、用水溝に溜まった砂鉄を掬い上げる。小規模な水田開発によって生じた廃土からの砂鉄採取も行う。

(2) いったん名主のもとに集められた砂鉄は牛馬によってたたら工房予定地へと運ばれる。各工房には木炭が集積され、たたらが設置されて火入れが行われ、操業が開始される。

(3) 古老的立場にあるエキスパートが金屋子神(図5)に祈りつつ、たたら内の状況を判断して木炭と砂鉄の投入を指示し、鉄製品の仕上がりを予測する。

(4) 純度が一様ではない1次製品が解体され、近くの鍛冶工房に運ばれて用途別に仕分けられ、再度加熱して純度を高めた後、名主に渡され、貢納品や市場売却に分けられる。

たたら製鉄の特性

たたら製鉄は、鍛冶や鋳物師の歴史とは違った道を歩んできたと考えべきである。小規模な生産は古代から行われていたが、中世においては、中国地方において豊富な砂鉄を背景として荘園制の生産システムに取り入れられ、貢納される状況が生まれた。ここでは荘園年貢を請け負った名主が水田農耕と並行してたたら製鉄を行っていたのである。このように日常生活の中で長くたたら製鉄が営まれ、中世の後期には鉄を扱う商人が高梁川上流までやってきて鉄を買い付け、他国の鋳物師や鍛冶に供給する状況が生まれていた。このようなくろがね商人は市場のみならず生産現場にも現れて為替取引を行って現物を運び出すこともあったと考えられる。日本ではこのように比較的安定した生産と流通が存在したた

め、鍛冶工房でも職人の練度が上がり、武器や武具なども質の向上が見られたのであろう。中世において武器や武具が大量に輸出された背景はこのようなところにある。ただし、中世において「たたら師」(仮称)は職人集団になり得なかった。

たたら製鉄は環境を大きく破壊することなく、日本の農耕社会に寄り添って行われてきたものであり、中世から長期間にわたって良質な鉄製品を供給し続けてきたが、明治から大正期にかけて絶滅状況となった。これはたたら製鉄と密接に関連する鍛冶職人が従来の伝統を受け継いで、近代社会でも長く命脈を保ったこととは対照的な位置にあるものであった。もともと鍛冶職人は、集団で行動し、技術を伝承することに存在意義があったといえよう。また、鍛冶職人同様に鉄製品(金属一般)を扱う職人として鋳物師があった。その系譜は古代以来、変貌を遂げながらも現在に至っている。それゆえ、中世から近世にかけて鍛冶や鋳物師は、時に、政治的な発言を行いうる場も確保できたといえよう。

近代の日本人はたたら製鉄のサスティナビリティを理解できなかった

『もののけ姫』に示されたタタラ場は長期的な展望を持ち得ず、一過的な、不安定な存在であったように印象づけられている。これは、たたら製鉄の実像を示したものとは言いがたい。しかし、われわれの意識の中には、このような「タタラ場」を受



図5 高瀬にある金屋子神社

け入れるバックグラウンドが広範に存在していたように思われる。それは、網野氏が提唱した非農業民的史観よりもさらに根深く存在するものであり、おそらく柳田國男が唱えた常民の外側にたたら製鉄を位置づけようとする潜在意識がわれわれの中に働いているからではなかろうか。なぜそのようになったのか。

近世末期、黒船の来航に象徴されるように、日本人は西洋文明の圧倒的な力を眼前にして、その移入こそ焦眉の急であることを思い知らされた。中心的な課題の1つに「鉄」の存在があったのである。当時、西欧に普及していた「反射炉」の移入に全力を上げ、大砲の製造に力を注いだ。「反射炉」は脱亜入欧の象徴的存在であったといえよう。その際、もはや捨て去るべきものと考えられたのがたたら製鉄であったのである。しかし、実際には、生産力の面で反射炉はたたら製鉄を凌駕するものではなかったものであり、明治20年代に入って高炉および転炉の普及によりようやく鋼鉄を作る近代的技術が確立したのであった。この間に、たたら製鉄は里山を背景とする主力の産業として存在したにもかかわらず、近代化を急ぐ日本人の意識の外に置かれ、日常性からは切り離されて考えられるようになったのであろう。

論考●特集・里山

里山の天敵を使った害虫管理

高林純示 (京都大学生態学研究センター教授)

Junji TAKABAYASHI



1956年、兵庫県生まれ。1986年、京都大学大学院農学研究科博士課程修了。1987年、京都大学助手(農学部附属農薬研究施設)、1995年、京都大学助教授(農学研究科)などを経て、2001年、京都大学教授(生態学研究センター)、現在に至る。2000年、日本応用動物昆虫学会学会賞受賞。主な著書に『虫と草木のネットワーク』、共著に『共進化の謎に迫る——化学の目で見える生態系』『寄生バチをめぐる「三角関係」』など。

高齢化、兼業化等によって労働力が減少すれば、そのような取り組みが思うように進まないこともある。一方、里山の農生態系において特徴的なのは、豊かな自然を背景に多種多様な害虫が圃場^{ほじょう}で発生するという点と、それらの天敵も涵養されているという点である。そこでこのような特徴を生かして、里山に土着する天敵を利用し、人にも環境にも優しく里山に適し省力化した害虫管理の可能性を、産官学(京都大学、農研機構、曾田香料、四国総研)で検討してきた。本稿ではその取り組みを紹介したい。

美山という里山

われわれは、里山で土着天敵を利用するケーススタディーを京都府南丹市美山町で行った。日本の原風景のような美山町は、豊かな自然に囲まれた総農家戸数約800戸の里山である(図1)。少量多品目生産が主であり、また京都の伝統野菜の1つであるミズナのハウス生産が盛んである。そこではさまざまな害虫が発生するが、減農薬、無農薬栽培に取り組んでおり、美山認証という制度を定めている。現在の美山町のホームページを見ると次のようにある。

美山農産物認証制度は、農産物の販売拡大、ひいては農家の所得向上につなげることを目的として、平成16年4月に制定され、野菜に関して認証を行っています。栽培基準は、金ランクと銀ランクの2区分となっています。認証実績をみると、約7割が金ランク、約3割が銀ランクで栽培されています。高齢

者や女性を中心とした認証農家によって栽培された認証野菜は、美山町内の各地区の農産物直売所で販売されている他、学校給食に供給されています。また、第3セクターの美山ふるさと(株)を主に経由して町外に出荷されており、消費者宅配産直や、定期的な野菜市、飲食店、自然食品店等で販売しています¹⁾。

金ランクとは、化学肥料及び農薬を不使用か、有機JAS認定資材のみに使用を限定、銀ランクは、化学肥料、農薬(普通物に限定)を必要最小限に厳しく限定とあり、なかなか厳しい条件で、現在金ランクが約7割というのはすごい。われわれが研究を実施していた時期は認証制度が発足したばかりのころであった。

里山環境では多様な害虫が発生すると述べたが、コナガ(図2)もそのひとつである。この害虫は当時、美



図2 コナガとその幼虫(提供:安部順一朗)

はじめに

日本の農地の約4割は里山にあるそうだ。里山農業の多くは少量多品目の生産だが、減農薬・無農薬農業に積極的に取り組んでいる。しかし



図1 美山町の風景写真(提供:安部順一朗)

山町の雨よけハウス（以下ハウス）でのミズナの生産で最も問題となっていた。近畿中国四国農業研究センターの安部順一朗博士、長坂幸吉博士（長坂さんは現在中央農業総合研究センター）らが、コナガが発生したミズナ生産ハウスを調査したところ、ハウス内のコナガ数の増加の後を追うように、コナガ幼虫の天敵コナガサムライコマユバチ（以下コマユバチと略、図3）もハウス内で観察されるようになった。コマユバチ



図3 1ミリ目合いのメッシュの上を歩行するコナガサムライコマユバチ(本文ではコマユバチと略)(提供:小原祥嗣)

は、アブラナ科植物がコナガの被害を受けたときに特別に生産する揮発性物質に誘引されることが明らかになっている（後述）。里山環境でひっそりと土着しているコマユバチが、コナガが食害したミズナの匂いに誘引されてハウスに侵入した可能性が高い。われわれは、土着のこのコマユバチを有効利用してコナガを防除しようと考えた。

ミズナの経済的許容水準とコマユバチの必要誘引数を探る

現在ペコIPMパイロット社というベンチャー企業を営んでいる浦野知博士（当時九州沖縄農業研究センター研究員）は、美山町のミズナ農家に泊まり込んで、ハウス内での手作業のミズナ収穫を手伝いながら、どの程度のコナガ被害があれば何らかの対策をとるのか（要防除水準：Control Threshold；CT）について聞き取りを行った。美山認証発足当時、平成16年ごろの話である。その

結果、おおむね以下のようなことがわかった。聞き取り農家では、（1）葉あたり5個以上のコナガ等の幼虫の食い跡があれば、その葉を取り除く。（2）そのような葉が株あたり2割以上あれば株は出荷しない。（3）そのような株が畝あたり2割以上ならば農薬等の対策をとる。（4）また20株のうちコナガ幼虫が1匹以上いたら農薬等の対策をとるというものだ。（4）から株あたり0.05匹のコナガの要防除水準と言える。成虫に関しては、左記の安部さんらの情報では、ハウスあたりコナガのメス成虫を1匹でも見つけたら、何らかの対策が必要とされるということであった。美山町のミズナ生産における要防除水準はかなり厳しいようだ。美山町のハウスの標準サイズでは、1棟あたり播種期のそろったミズナが9,000株栽培されている。株あたり0.05匹がリミットだとすると、ハウス内のコナガ幼虫を常時450匹以下に維持しているかぎり、コナガを防除す

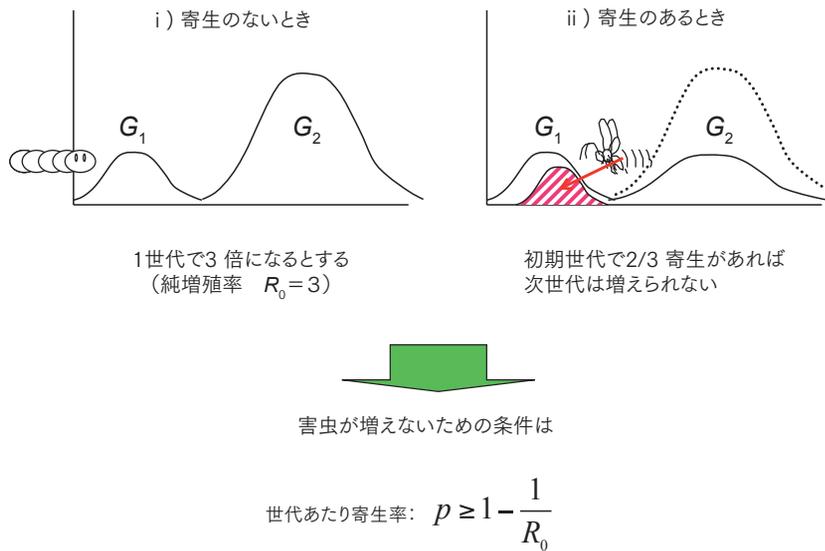


図4 寄生バチの寄生によって害虫が増えないための必要寄生率の考え方

る必要がないということになる。では、コマユバチによってこの条件をクリアするにはどうしたらよいのだろう。

浦野さんは、簡単な数式で必要寄生数をもとめる考え方を考案した²⁾。それは1から害虫の増殖率の逆数を引いた値が必要寄生数という数理モデルである(図4)。たとえば、害虫が3倍に増えるなら、1から3分の1を引いた3分の2が必要寄生数となる。なぜなら、残った3分の1が次世代で3倍になっても、最初と同じ1であり、世代間で個体数の増加はない。言われてみれば簡単でただちに納得なのだが、自分で思いつくかと言われれば、まず無理だろう。この考え方でハウス内の450匹の幼虫の次世代もやはり450匹であり続けるには、コナガの増殖率を7倍と見積もると、1世代あたり387匹がコマユバチに寄生されなければならないことになる。はたして可能なのか？

コマユバチの能力と分布

可能かどうかを知るためには、コマユバチがどのくらい優秀な天敵なのかを確認しなければならない。この研究は、中央農業研究センターの下田武志博士と光永貴之博士が実施

した。繰り返し実験が要求される大変な検証だったが、結論としては餌(糖)がある条件では、この寄生バチの日当たり寄生可能なコナガ数はおおむね24匹、餌なしではおおむね10匹とわかった³⁾。387匹に寄生するコマユバチ数は、餌(糖質)がハウス内であればコナガ1世代あたりのべ16匹でよいことになる。実際にはハチは寿命が2週間程度である。そこで誘引されたハチが、低く見積もって3日間働くとしたときの必要定着ハチ数は、5.4匹。1日当たり1.8匹誘引しておけば、美山町のCTをクリアで

きる。小スケールの試験用ハウス内にコナガを0.05匹/株の密度で接種し、コマユバチを上記の条件を満たす数で最初に1回だけ放飼すると、温室内のコナガ個体群はCT以下に長期間制御された(安部ら,2007)⁴⁾。うまくいきそうだ。

1日あたり約2匹を誘引するとして、では美山町にこの優秀な寄生バチが広く分布しているのかを確認しなければならない。そのために、コナガを接種したコマツナ株を入れた大型のプランターを作り、それを1ミリ目合いのメッシュで包んだモニターを美山町の各地に設置した。図3からわかるように、コマユバチはこの目合いを楽に通過できるが、接種したコナガは通過できない。ハチはプランター内の食害コナガ株のかおりに誘引されメッシュを通過して寄生に至る(後述)。うまくできている。ただ、コナガは逃げ出さないといっても、コナガがついた植物を農家圃場に置くというのは、置く側にも置かれる側にも心理的抵抗があった。この調査は安部さんと長坂さんが行ったが、農家との信頼関係がなせる業であろう。調査の結果、コマユバチは広く美山町に分布していることが分かった(図5)。美山町には、豊かな奥山環境(芦生原生林)



コナガコマユバチは美山町で最も多く見られるコナガの捕食寄生者であり、美山町に広く分布している

図5 コナガサムライコマユバチの美山町における分布

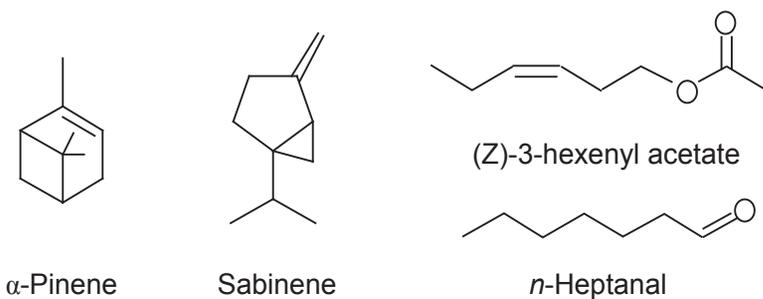


図6 コナガ食害キャベツから放出されるコナガサムライコマユバチ(本文ではコマユバチと略)誘引成分4成分が混合されて初めて誘引性を示す

を背景にアブラナ科の雑草(イヌガラシ等)、害虫であるコナガ、そしてその天敵であるコマユバチが涵養されていたのだ。

コナガ食害株が放出するコマユバチ誘引物質を決める

1983年ごろより、害虫の食害を受けた植物は、その特異的な捕食性天敵を呼び寄せるかおりを放出し始める、という現象が明らかになってきた。「ボディーガードを雇う植物」の発見である。現在では、50種以上の植物と70種以上の植食性昆虫の組み合わせで植物がボディーガードを呼ぶという現象が報告されている。

アブラナ科植物-コナガ幼虫-コマユバチ三者系でも同様に被害株が出すかおりにコマユバチは誘引された⁵⁾。そのなかでもキャベツ株やミズナ株がコナガに食害された場合、コマユバチをよく誘引した。食害株の化学分析と誘引性の検定を重ねた末、コナガ食害キャベツ株から健全キャベツ株よりも多く放出される4つの成分の混合物((Z)-3-hexenyl acetate, myrcene, sabinene, n-heptanal)に対してコマユバチが誘引されることを京都大学白眉センター(現在、龍谷大学農学部講師)塩尻かおり博士、農業環境技術研究所の釘宮聡一博士(両名とも当時生態学研究センター研究員)、生態学研究センターの小澤理香博士らが解明した(図6)⁵⁾。興味深いことに、各成分単独では誘引されず、4成分を混合して初めてコマユバチは誘引される。

野外で誘引の確認

コマユバチが優秀であることはわかった。コナガの発生のいかにかわからず、餌のある環境では毎日2匹ほど誘引しパトロールしてもらえばよいことも予測できた(コナガがいなければコマユバチには無駄足になってしまい申し訳ないが、そこは目をつぶる)。誘引成分も候補が出た。しかし、まだ農家圃場で試す前に確認することがあった。4成分の誘引性は、30センチ四方の小さな空間で確かめたに過ぎない。変動する野外環境下で長距離から誘引できるのだろうか。本研究とは別のテーマで共同研究している山口大学の植物生理学者の松井健二教授が面白いことを言った。

「体長2ミリのコマユバチが50メートル先の寄主を見つけるための移動は、比率的には身長165センチのマラソン選手が42.195キロ走るとほぼ同じですよ」

なるほど。そう言われてみると寄生蜂がいかに困難なことをしているのかがわかる。われわれは美山町でハウスの四方にひっそりと生息しているコマユバチを毎日少数ずつ誘引しなければならない。はたして可能なのか。さまざまな空間スケールで調べたが、決定打は名城大学の上船雅義博士(当時生態学研究センター研究員)、前出の釘宮さんらが生態学研究センターの実験圃場で行った結果で、4成分のブレンドが50-70メー

トル離れたところのコマユバチを誘引することを示した⁶⁾。次に、共同研究者である曾田香料の佐野孝太博士らによって剤型も検討された。最初はトイレの芳香剤型であったが、最終的には天敵誘引成分をマットに含浸させフィルムに封入する剤型を開発した。これにより天敵誘引剤の扱いや設置が簡単になり、また長期間徐放性が維持できた。

ダモクレスの剣

「餌(糖質)のある環境では毎日2匹ほど誘引しパトロールしてもらえばよい」と先に述べたが、美山町のみならずこのミズナ里山ハウスでも、その内部で雑草の花が咲いているということはまずない。コマユバチの餌はハウス内には何もないのだ。豊かな自然に囲まれている美山町では、花はむしろハウス外にある。せっかく誘引したコマユバチが空腹になり、餌を求めてハウス外に出てしまつては元も子もない。ではどうするか。ハチミツを入れたボトルをハウスに設置すればよいということになった。前出の下田さん、光永さんらが中心となって給餌のための黄色ボトルの設置方法と形状をデザインし、その給餌効率を確認した⁷⁾。ボトルを黄色にするのは、空腹のコマユバチを呼び寄せる効果があるためである⁸⁾。これは共同研究者である四国総研の研究員(当時)小原祥嗣博士の大学院時代の偶然の発見(コナガ幼虫に寄生する別種の寄生蜂が黄色に誘引される)からヒントを得た。ただこの給餌ボトルは、侵入したコナガのメス成虫によっても利用されることが容易に予想され、その場合はコナガのメス成虫の産卵数を増やす。いわば両刃の剣である。コマユバチをハウス内に留め、多くのコナガ幼虫に寄生するコナガ抑制効果が勝って防除に成功するか、コナガのメス成虫の産卵数の増加が勝つてコナガの発生の手助けになるか、

これについては慎重に検討を重ねたが、最終的にはやってみなければわからない。実証試験では、ハウスに誘引剤とハチミツ給餌ボトルを同時設置したが、その期間中はこのボトルはいわばダモクレスの剣（心配な状況を作り出すもの）であった。

いざ実証

複数年を実証試験を行ったが、本稿執筆時点では成果論文作成中でもあるので、2006年度にうまくいったときの結果の概略を紹介する（2006年度生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業研究成果集より）。

基本的な考え方としては、

- 1) コナガのハウスへの侵入は、4月頃から10月末までいつでも起こりうる。侵入は偶然と考える。
- 2) そこで4月からコナガ発生期間中継続して、誘引剤とハチミツ入りボトルを一定数ハウス内に設置する。
- 3) それによって、コナガの発生のいかにかわらずハウス内にコマユバチを低密度で呼び寄せ、パトロールさせる。
- 4) これで、偶然侵入したコナガのメス成虫が産卵したとしても、そこから孵化したコナガ幼虫の食害レベルが低いときに、前もって呼んでおいたコマユバチが先手をとって寄生し、コナガ発生をCTレベル以下に保つことができる（はずである）。

さて、調査であるが、これは安部さんと上船さんが中心となって行った。複数の農家の協力を得て、22ハウスで調査することができた。11ハウスで誘引剤とハチミツ入りボトルを設置し、11ハウスはなにも設置せず、あとは各農家の栽培管理に任せた。コナガ幼虫の密度が0.05匹/株であるかどうかを2週間毎に22ハウスで調査するのは労力的に無理がある。そこで、ハウス内に黄色の小さな粘着板（15cm×30cm）を作業の邪魔にならないように1つだけ設置させてもらい、そこに捕獲されたコナ

ガ成虫数で評価した。ヒヤヒヤしながら待つこと6カ月、結果を見るとコナガ成虫捕獲数は全期間を通した平均値で見ると、無設置（対照区）ハウスに比べて誘引剤、ハチミツ入りボトル設置ハウスで約3分の1に減少した。マイルドな効果ではあるが防除効果を確認できた。調査日毎の発生率でも、常に設置ハウスが非設置ハウスの発生率を上回ったので、期間を通してコマユバチはハウスに（少数）誘引されたと考えてよい。

この2006年の結果から言えることの1つは、誘引剤とハチミツ入りボトルのハウス内設置によるコナガ防除技術は、効果がマイルドであり、それだけで独立して使用して効果がある技術ではないということだ。もしさらに強力な誘引剤成分を開発できたとして、それによって里山周辺環境に生息するコマユバチ個体群（供給源）から多くのコマユバチをハウスに集中させれば防除効果はさらに上がるかもしれないが、今度は里山の供給源となる個体群が枯渇するかもしれない。われわれはこの技術を、里山がコナガの天敵コマユバチを涵養しているという生態学の用語で言うところの「生態系サービス」（自然がわれわれに与えてくれる有形無形の恩恵）をすこしだけ余分にいただくという技術であると位置づけたい。他のさまざまな技術（物理的防除技術、微生物農薬、フェロモン剤等）と組み合わせることによって、環境に優しい総合防除技術へと展開できるものと考えている。ただ残念なことに現在の法律では、この天敵誘引剤も農薬の一種とされる。したがって農薬登録が必要になるが、それに関してはハードルが高くこれからの段階である。

謝辞

本研究は生研センター生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業の支援を得て行ったものである。

引用文献

- 1) 美山町のホームページ
<http://www.miyama-nakagurashi.jp/ninsyouyasai/ninsyou.html>
- 2) Urano S, Uefune M, Abe J and Takabayashi J (2011) Analytical model to predict the number of parasitoids that should be released to control diamondback moth larvae in greenhouses. *J Plant Inter* 6: 151-154
- 3) Mitsunaga T, Shimoda T, Yano E (2004) Influence of food supply on longevity and parasitization ability of a larval endoparasitoid, *Cotesia plutellae* (Hymenoptera: Braconidae). *Appl Entomol Zool* 39: 691-697
- 4) 安部順一郎、浦野知、長坂幸吉、高林純示 (2007) 「ハウス栽培のコマツナを低密度で加害するコナガに対するコナガサムライコマユバチの必要放飼率」『近畿中国四国農業研究センター研究報告』6: 125-132
- 5) Shiojiri K, Ozawa R, Kugimiya S, Uefune M, van Wijk M, Sabelis M W, Takabayashi J (2010) Herbivore-specific, density-dependent induction of plant volatiles: Honest or “Cry Wolf” Signals? *PLoS One* e12161
- 6) Uefune M, Kugimiya S, Sano K and Takabayashi J (2012) Herbivore-induced plant volatiles enhance the ability of parasitic wasps to find hosts on a plant. *J Appl Entomol* 136: 133-138
- 7) Shimoda T, Mitsunaga T, Uefune M, Abe J, Kugimiya S, Nagasaka K, Sano K, Urano S, Suzuki Y, Yano, E and Takabayashi J (2014) A food-supply device for maintaining *Cotesia vestalis*, a larval parasitoid of the diamondback moth *Plutella xylostella*, in greenhouses. *BioControl* 59:681-688
- 8) Uefune M, Kugimiya S, Ozawa R and Takabayashi J (2013) Parasitic wasp females are attracted to blends of host-induced plant volatiles: do qualitative and quantitative differences in the blend matter? *F1000Research* 2:57 (doi: 10.3410/f1000research.2-57v1)

アフリカ熱帯雨林のさとやま

四方 箒 (日本学術振興会特別研究員)
Kagari SHIKATA



1976年大阪府生まれ。京都大学農学部卒業、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程研究指導認定退学。京都大学博士(地域研究)。日本学術振興会特別研究員(PD, RPD)、東京大学大学院農学生命科学研究科特任研究員を経て、2015年より2度目の日本学術振興会特別研究員(RPD)。三児の母。専門は熱帯農業生態学、アフリカ地域研究。アフリカ熱帯雨林における焼畑の調査をとおり、森と人の共存のありかたを探究している。著書に『焼畑の潜在力——アフリカ熱帯雨林の農業生態誌』(昭和堂)。

はじめに

「熱帯の里山」というと、違和感を覚える人が多いかもしれない。「里山」という言葉は日本の原風景を語るさいのキーワードもしくは代名詞であって、熱帯地域の景観を表現する言葉としてはふさわしくないと感じる人もいるだろう。しかしながら、稲作とそれを支える森林がセットになった里山景観は、日本のみならず熱帯アジアの農村地域においても広



写真1 カメルーン東南部の焼畑の景観。バナナ、キャッサバ、ヤウテア、収穫されたトウモロコシの稈(茎)が見える

くみられることが報告されてきた。そうした報告や論文では「ここは日本か、と思うほどの里山景観」(神崎, 2014) というふうに、日本の農村地域との類似性が強調されることが多い。水田とそれを取り囲む山々あるいは人々の努力の結晶たる棚田の美しい風景などは、いかにも「里山」の名にふさわしく、日本の農村を彷彿とさせるものである。わたし自身、昨年から今年にかけてインドネシアとミャンマーの農村地域を訪れる機会があり、日本との共通点を感じるものがしばしばあった。なにより主食はコメだし、ダイズの発酵食品や野菜をふんだんに使った料理など、日本人になじみのある食文化とそれを支える田畑や山の風景、そして農作業に励む人びとのたたずまいには、まさに「ここは日本か」と言いたくなるような里山のエッセンスが満ち溢れていた。

翻って、ここで紹介するのは日本で

も熱帯アジアでもなく、アフリカ熱帯雨林の事例である。筆者はこれまでカメルーンの東南部に暮らす焼畑農耕民バンガンドゥを対象としてフィールドワークをおこなってきた。かれらの焼畑ではイネは栽培されていないし、水田もない。主食はバナナやキャッサバ等のイモ類で、野菜はオクラとトウガラシ以外にほとんど栽培されていない。また、かれらの焼畑は日本の棚田のような整然とした景観とは対照的に、雑草や倒木が入り乱れて作物がどこにあるのかもわからず、カオスの様相を呈している(写真1)。日本人が抱く「里山」のイメージからはかけ離れているとっていいだろう。

しかしながら、近年「里山」ないし「SATOYAMA」という言葉は、水田と山に囲まれた日本の原風景というイメージを越え、「人間の営みによって維持されてきた二次的自然」という広い概念として、国際的な議

論の場においても用いられるようになってきている。鷲谷 (2011) は、集落・田畑・ため池・水路・樹林・草原などの空間的な要素が組み合わせられた、複合的な生態系をひらがなの「さとやま」であらわし、それを「自然の営みと人間活動との合作ともいえるダイナミックなシステム」と表現している。そして、さとやまを構成するさまざまな土地利用がつくりだすパターンを「生態系模様」と呼び、複雑な生態系模様をもつさとやまは、多様な動植物が暮らすことが可能な空間であることを指摘している。このような概念を援用すれば、アフリカ熱帯雨林の焼畑景観は「アフリカ版さとやま」として捉えることができる。

多様な植生と生業複合

はじめてわたしがカメルーンの森を訪れたのは今から10年以上前のことになる。そもそも、わたしはアフリカ熱帯雨林の農耕に興味をもってカメルーンを訪れたのだが、調査を始めた当初、目を奪われたのは、人びとが生活の多くを森に依存しているという事実であった。肉・魚・果実といった食物だけでなく、建材や薬、生活用品にいたるまで、かれらの生活は森の資源なくして成立するものではない。

調査をおこなったカメルーン東南部では、森のなかを南北に走る1本の幹線道路に沿って集落が点在しており、道路からの距離に応じて植生が変化していく。道路から約2 kmの範囲には主として焼畑とその休閑地が広がっており、さらに奥にすすむと、焼畑と休閑地にくわえて、人びとの現金収入源となるカカオの畑、そして原生林とがモザイク状に分布するようになる(ここでいう原生林とは、これまでに農地として利用されたことがない、あるいは利用されたことが記憶されていない森のことを指している)。道路から5 km以上

離れると、農地はほとんど見られなくなり原生林が延々とつづく。森のなかには大小さまざまな川が流れ、川沿いにはラフィアヤシなどからなる川辺林が発達し、ところどころに湿潤草原も分布している。バンガンドゥは、焼畑から作物を得る一方で、特徴の異なる植生域を横断的に利用し、採集・狩猟・漁撈といった多彩な生業活動とおして森からも多くの糧を得て暮らしているのである。

バナナと暮らす

アフリカ熱帯雨林の農耕は焼畑移動耕作、混作、根栽作物の3つに特徴づけられる(小松, 2010)。バンガンドゥの農耕もその例外ではないが、とくに、かれらの生活や農耕を語るうえで欠くことのできないのが、バナナである。

バンガンドゥが食べるバナナには大きく分けて2種類ある。ひとつは、手で皮をむいてそのままぱくりと食べるバナナ。日本でもおなじみの甘くて黄色いあのバナナだ。もうひとつは、プランテンと総称される主食用のバナナ。こちらは皮をむいた後、必ず調理してから食べる(写真2・3)。これこそが、バンガンドゥの毎日の食生活を支えるうえで重要なバナナで、その消費量はざっと計算したところ年間1人当たり380 kgにも達する。これは日本人が消費す



写真2 バナナを調理する女性



写真3 村での食事。蒸したバナナを杵と臼で搗いて餅状にしたもの(右下)を、肉や魚を煮込んだシチューと食べる

る生食用バナナのおよそ50倍の量に相当する。

かれらの畑には、バナナのほかにトウモロコシやキャッサバ、ヤウテア(サトイモの仲間)、ヤムイモなど主食となる作物はいろいろ植えられているが、食卓にのぼる頻度ではバナナがダントツに多い。日本人の主食はコメだと知った居候先のお父さんから「カガリは日本で我慢しているのか? バナナが食べられないなんて、つらいだろう。わたしだったら耐えられないよ」と言われたことがある。日頃、日本製の中古車やバイクを眺めては「テクノロジーの国・日本!」と称え、「いつか日本に行ってみよう」と語る彼だが、バナナの前にあってはコメもテクノロジーも太刀打ちできない。

また、バナナは伝統的な割礼儀礼の場面にも登場する(写真4)。割礼を受けた青年たちは、傷が癒えるまでの1か月のあいだ、毎日3食、20本近くものバナナを完食しなければな



写真4 割礼を受けた青年。身体には樹皮からとれる赤い染料を塗りつけ、ラフィアヤシを裂いてつくった腰囊をつけて1か月過ごす。その間、毎食、大量のバナナを食べなければならない

らない。バナナは日々の生活を支えるだけでなく、人生の節目において特別な役割を果たしているのである。

これが畑？

バナナの次に印象的なのが、かれらの焼畑の景観である。バンガンドゥの焼畑では、複数の作物を同じ畑に同時に植える混作が一般的であり、いろんな作物が畝も列もなくごちゃまぜに植えられている。畑のなかには伐開時に伐り残された立木が残り、火入れの後に燃え残った倒木が横たわったまま放置されている。また、雑草が繁茂していることが多く、畑はまるで藪のようになっている。

調査を始めた当初、焼畑の面積や作物の栽植密度を測定しようとしたわたしは、そんな畑を目の前にして途方にくれたものだった。アフリカショウガなどの大型草本が繁茂しているだけでなく、大小さまざまな樹木が立ち並び、縦横無尽に伸びた蔓がからまりあって、どこになにがあるのかもわからない。しかし、バンガンドゥの人びとは、当たり前のようにそこからバナナやキャッサバを収穫してくる。

かれらと同じように畑や森を眺め、感じられるようになりたいと考えたわたしは、かたっぱしから畑を巡って人びとに話を聞き、バンガンドゥの

視線に寄り添う努力を続けた。しかし、こちらが期待するような明快な答えはなかなか返ってこない。除草をする人とならない人、だらだら続く作物の植えつけと収穫、焼畑をいつ放棄したのかわからず、休閑期間も不明瞭……。かれらの曖昧な返事に、バンガンドゥの焼畑システムの全体像を描くことが果たしてできるのだろうか？と不安を募

らせ、悶々とした気分をひきずりながら調査をつづけた。当時のフィールドノートには「ぐちゃぐちゃだ、どうする」という走り書きが残されている。

しかし、かれらの主食であるバナナに注目し、その生産と消費の実態について長期的なデータを収集するうちに、一見するとルーズな栽培管理は、かれらがバナナを安定して収穫するうえで都合がいいやり方なのではないかと思うようになった。

焼畑におけるバナナの周年収穫

バンガンドゥの焼畑は森林を循環的に利用することによって成立する森林休閑型の焼畑である。森（多く

の場合は二次林）を伐開し、トウモロコシ、キャッサバ、ヤウテア、バナナを中心にさまざまな作物を植えつけ、それらを栽培・収穫したあと放棄し、10年以上の休閑を経て再び利用する。ただし、日射を必要とするトウモロコシとキャッサバが成長すると除草されなくなるので、あきらかな休閑に入る前に二次植生が繁茂することになる。作物がまだ生育をつづけているにもかかわらず畑が森へもどるままにしておくのは、それが熱帯雨林という環境におけるバナナ栽培に適したやり方だからである。

バナナは収穫後の保存が効かない。したがって、毎日主食として食べるためには、畑に植えるバナナの熟期を分散させておく必要がある。人びとは年に2回の乾季に新しい焼畑を開くこと、そして1筆の畑のなかでもバナナを植える時期をずらしたり、成長の速い品種と遅い品種を混植したりすることで、バナナが同時に熟さないように工夫している。また、バナナはいったん植えると株元から生えてくる子株によって世代を更新し、成長と結実を繰り返す。しかも、バナナは耐陰性が高いので、藪のようになった畑（写真5）からでも数年にわたって収穫をつづけることができる。かれらが除草に積極



写真5 伐開から3年経った畑のなかで育つバナナ

的でないのは、こうしたバナナの特性と関係している。つまり、膨大な労力を投入してひとつの畑を無理に維持するよりも、適度に手をぬきながら新しい畑をつぎつぎと伐開していくほうが、幅広い生育段階のバナナを確保するためには都合がよいのだ。

このように焼畑は長期間にわたってバナナ生産を継続するため、各世帯は伐開後の年数が異なる複数の畑を同時に管理することになる。ある世帯では、7筆の異なる畑を利用してバナナを収穫していた。いちばん古い畑は伐開から7年が過ぎており、一見したところ、どこにバナナがあるのかもわからなかったが、それでも調査期間中、全収穫量の1割以上のバナナを供給していた。逆にその7筆の中でいちばん新しい畑は、伐開から1年ほどの畑で、将来的にはカカオ畑になる予定ということだった。近年、商品作物カカオの重要性が増しているが、従来の焼畑システムをカカオ栽培にも適用することで、人びとはカカオ畑の拡大とバナナ生産の両立を図っている。すなわち、新たな畑を開くさいにカカオを主食作物と混植し、畑がカカオ林へと成熟していく過程でバナナを収穫しているのである。

焼畑が創り出す生態系模様

バンガンドゥの焼畑の特徴は、作物の栽培期間と二次植生が回復する休閑期間とが明瞭に線引きできない点にある。このような焼畑の環境利用は、攪乱と植生遷移という熱帯雨林が元来もっている生態系のダイナミクスに、樹木の伐採や作物の植えつけをとおして人びとが介入することによって、攪乱地が森へともどる過程のなかで食料生産を実現しているものとして理解できる。

個々の世帯が実践するこうした焼畑の営みは、地域全体としてみると、絶え間なく新しい畑がつくられ、そ

れぞれが森へもどりつづけることをとおして、地域の生態景観のなかに遷移段階の異なるモザイク、すなわち動的な生態系模様を創出する要因となっている。そして、それぞれのパッチに特有のさまざまな資源が、バンガンドゥの生活を豊かなものとしている。

火入れのあと燃え残った木々は薪として利用できるし、作物を食べにくる小動物は罾で捕獲されタンパク源となる。旺盛に回復してくる草本類の多くは薬用に利用され、キャッサバやヤウテアの若葉は野菜として採集される。作物の収穫がひと通り終わり、パイオニア種の樹木が林冠を覆うようになるころ、林床に繁茂するクズウコン科の植物は生活のさまざまな場面で利用できる（写真6）。たとえば、その大きな葉は料理や保存のための包装材となり、長い葉柄は籠や莫産を編むのに使われる。遷移の進んだ二次林内では、伐開時に伐り倒され、すでに朽ちた倒木にキノコが生え、その一部は食用になる。老齢の二次林では畑の伐開後に成長した樹木がさまざまなフルーツを実らせる。そこにはアブラヤシも残っており、ヤシ酒や食用油を採取できる。そのほか薬用として利用できる樹種も多い。

原生林や川辺林といった原植生の多様性にくわえて、焼畑の実践によって創出されるダイナミックな生態系模様が、バンガンドゥの生業複合の基盤となっているのである。

おわりに

経済のグローバル化の影響のもと、画一的なモノカルチャーの農地が拡大をつづけるなかで、さとやま特有のきめこまかい生態系模様は、粗い



写真6 二次林内でクズウコン科の植物の葉を採集する女性

模様への変化の圧力にさらされている（鷺谷, 2011）。バンガンドゥの焼畑が織りなすカメルーン東南部の生態系模様は今後どのように変化していくのだろうか。カカオのモノカルチャー柄が席卷していくのか、あるいは頭痛がするほどわたしを悩ませた複雑なパッチワークが更新されつづけるのか……。

調査を終えて村を去る日になると、居候先のお父さんはきまって「カガリ、バナナが食べられなくなるけど我慢できるかい？」と尋ねてくる。「我慢できるかな？」と不安になってくるから不思議なものだ。バンガンドゥにとってバナナは日常に埋め込まれた存在であり、かれらの生き方でもある。生態系模様の将来は、グローバル化の影響力もさることながら、バンガンドゥのバナナにたいするこだわりにかかっているのかもしれない。

文献

神崎護 2014「森林とその改変」落合雪乃・白川千尋編『ものづくりの植物誌——東南アジア大陸部から』臨川書店 pp.40-55.

小松かおり 2010「中部アフリカ熱帯雨林の農耕文化史」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌——アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅰ』京都大学学術出版会 pp.41-58.

鷺谷いづみ 2011『さとやま——生物多様性と生態系模様 岩波ジュニア新書686〈知の航海〉シリーズ』岩波書店

里山と現代アート——人と自然のかかわりってなんなのか

文:伊勢武史 (京都大学フィールド科学教育研究センター准教授)
Takeshi ISE

監修:三井麻央 (岡山大学大学院社会文化科学研究科)
Mao MITSUI



1972年徳島県生まれ。高校卒業後、社会人経験を経て、米国ワイオミング大学からハーバード大学大学院に進む。専門は生態学。京都大学フィールド科学教育研究センター准教授。地球温暖化で重要な役割を果たす生態系のシミュレーションと将来予測に取り組むかわら、進化生物学の視点から人と自然のかかわりについて幅広く探究している。著書に『学んでみると生態学はおもしろい』『地球システムを科学する』(ともにペレ出版)がある。

小道の途中で足をとめる。名前も知らない小さな花が咲いている。見たことがあるような、ないような景色。こうやってのどかな里山をながめながら歩いているとき、僕はとつぜん悟りを開いたような感覚におそわれた。人は自然のなかで、「こうやって生きていけばいいんだ」と思った。自然とのかかわり方の、「ちょうどよいバランス」が直感的に分かった気がしたのだ。少しだけさだけど、自分の生き方に関する重大な疑

問の答えが、この場所・この時間に転がっていたことが不思議だ。そしてこの、里山をのんびり歩くという体験は、そこにアートを観に行くというきっかけがなければ得られなかったことかもしれない。

里山ってなに？

僕は生態学の研究をしている。生態学は生物学の一分野で、生物が環境のなかでどのように生きているかを考える学問だ。生物はそれぞれ、生きる場所の環境から影響を受けつつくらししている。それと同時に、生物は自分からまわりの環境を変えることもある。与えられた環境に合わせて生物は進化し、その反対に、生物によって環境は変化していく。こういう相互作用がどのように生じているかに興味を持っている。

生態学の視点からながめると、里山はとてもおもしろい。人と自然が相互作用しながらできた生態系だからだ。人間が自然環境を、ある程度の強度で利用するとき里山ができる。この、「ある程度の強度」というのが重要で、まったく人の手が入らなければ(強度が0ならば)そこは原生林である。逆に、人が集約的な利用を目的としてその場の生物に対して細かい管理を実行すれば(強度がMAX

ならば)、そこは「田畑」、あるいは「庭」となる。こう考えると、人間が自然を、ある程度管理し、ある程度放任するとき里山ができることになる。

人は里山の環境を変化させる一方で、里山も人のくらしを変容させる。たとえば、里山にトチノキが生えていたら栃餅を、ホオノキが生えていたら朴葉寿司をつくる、というように、伝統的な食生活や文化も里山に由来していたりする。このように、里山は人と自然のかかわりを考えるときに象徴的な場所であると思う。

里山をキーワードで表すとすれば、「共存」や「調和」といった言葉がうかぶ。ビルが林立する都会でもない、かといって畏怖するような奥山の原生林でもない。そこは人と自然が折り合いをつけながら、ある程度は人が管理し、残りは自然の自律性に任せるような場所である。もうひとつキーワードを書くならば、「持続性」ではないだろうか。自然の息の根を止めない程度に、自然が自発的に再生できる余力を残した状態で利用することが里山をかたちづくって



写真1 田んぼとため池と雑木林。典型的な里山の風景だ(撮影:筆者)

いるのである。

ちなみに「共存」とは、表現を変えると「せめぎあい」となる。人が持続的ではない利用をすると、その自然は生を失い、人工的につくられた荒地となる。逆に、人が利用の手をゆるめると自然はしたたかに失地回復をはじめ、年を経るにしたがってそこは人の立ち入りを拒む深いヤブとなるのである。このように、ある意味あやういバランスの上に成り立っているのが里山だともいえる。

なぜ自然はうつくしいのか？ ——里山の場合

里山と現代アート。実はこの、一見異質な組み合わせが注目されている。里山の環境にアート作品を置いてみたり、里山をテーマにアートを制作してみたり。そしてそれを目当てに、ふだんはのどか過ぎる里山に、どっと観光客が押し寄せたり。もっとも有名なものでは、新潟県十日町市周辺の「越後妻有大地の芸術祭」がある。このような試みについて、アートの専門家が語ることは多いが、生物学や生態学の専門家が語っているのは聞いたことがない。それならば、こんな僕にも何か言うべきことがあるのかもしれない。というわけで、私的な考察に少々おつきあい願いたい。

人が文明生活を営むうえで最も効率が良いのは都市である。なにをするにも便利、インフラを整備するのも便利。でも僕らはなぜか、都市のなかに公園をつくり、街路樹を植える。オフィスの窓辺には観葉植物を置く。こうやって文明に森の要素を取り込もうとするのはなぜだろう。人間のこの心理についてはいろんな説明があるんだけど、生物学者である僕にとっては、生物進化で説明するのがしっくりくる。極端に単純化してみると、むかし（人が「原始人」と呼ばれるほどのむかし）、森や樹木を好きだと感じた人は、森を豊かなエサ場・安全なねぐらとして活用



写真2 のどかな里山から、竹でできた巨大な構造物が姿を現した。鑑賞者はこの作品の中に入れるようになっており、竹という素材の可能性と周囲の環境との関係性を意識することとなる。ワン・ウェンチー「小豆島の光」(撮影:筆者)

し、生きのびた。一方、森を嫌いだっただ人は死に絶えた。こうして、森を愛する感情は自然淘汰で有利にはたらし、それは現代のわれわれにまで続いているのではないだろうか。このように、人の心理的傾向の根源を生物進化に求める学問が進化心理学である。

本質的に森のこと・自然のことが好きな一方で、人は他人のことが気になって仕方がない。「人は社会的な動物」といわれるように、人はだれかと一緒にいたいと思うことも、また本質的な欲求である。進化心理学でいうと、人と一緒にいたいという遺伝子を持ったグループは繁榮し、その一方で人間嫌いの遺伝子は淘汰されていったのである。人は森が好き、そして人が好き。こうやって考えると、自然のなかに人がいたり、人の活動が感じられたりする里山は、まさに人の根源的な欲求を満たす場所なんじゃないだろうか。里山は、ひと昔前の日本のありふれた景色でもあり、郷愁を誘う存在だ。その郷愁は、「日本昔ばなし」で見た記憶を超えて、僕らが「原始人」だったころのことを投影しているのかもしれない。

なぜ里山の現代アートがすてきなのか？——私的な感想

里山と現代アートのコントラスト。現代的なものと伝統的なものの対比。意図のないものと作為のあるものの対比、複雑に入り混じった色と原色の対比。いろんな対比があるから里山のアートはおもしろい。これを心地よい違和感とでも呼ぼう。最もとがってて文明の最先端をいくような現代アートが、日本全国どこにでもあってかわり映えのしない里山にあることで、あえてうまれる現象。これはなかなかくせになる。

人工的に厳密にコントロールできるものと、できないもの。この対比を際立たせ、双方のうつくしさを知るとというのが、里山と現代アートそれぞれの楽しさの奇妙な共通点だと思っている。里山の樹木だって人の影響を受けて育つけど、生き物である樹木に、厳密に葉っぱの数や枝の角度を指示することはできない。だけど、樹木が自律的につくったその造形が、実は人間に真似できないうつくしさを持っている。現代アートでも、偶然性や自律性を積極的に活用し、ハプニングを予期した作品が多い。大雑把にコントロールできる



写真3 めめめとした曲線を描く豊島美術館。自然を鑑賞する装置として究極のかたちなんじゃないかと思う(写真:鈴木研一)

けど、厳密なコントロールはできない。それを積極的に美としてとらえるのが、里山の自然でもあり、現代アートでもある。完璧に空調と照明がコントロールされた美術館に展示される古典的なアートは、庭園みたいなもの。いっぽう現代アートは、里山みたいなものである。

僕にとって、里山とアートの聖地は豊島美術館だ。ちなみに豊島というのは瀬戸内海に浮かぶ島である。だからイメージ的には「海とアートでしょ」なんて思われがちなのだが、豊島はけっこう大きな島であり、実際は海というより、里山の要素が強烈に主張している現代アートの聖地である。豊島美術館。人工的な空間であるこの作品の最重要な展示物は、ここでは周囲の自然そのものである。美術館といっても、なかにあるのは、建築と一体化し、環境の変化にゆらぎ動くひそやかな作品(内藤礼「母型」)だけ。そこはがらんとした白っぽい空間で、ぽっかりと開いた開口部から日差しが差し込み、そよ風が吹き、たまに雨が床をぬらす。そしてそこから見えるのは里山の風景。里山だから、木々は春に芽吹いたり夏に成長したり秋に紅葉した

りする。これらの自然の活動を、芸術家は予期するだけで、精密にコントロールはできない。目線と意識が流れる先は、雲が流れる空と里山の木々。吹き抜ける風。豊島美術館の人工的なコンクリートの空間にいると、開口部の先の自然のことが気になってしかたがない。美術館は額縁の効果を発揮し、里山の風景の一部を切り取って鑑賞者に提示する。ここで僕らは、あらたまったかたちで里山の自然と対峙し、たたずむ。こうやって、普段は身近すぎて意識しない里山の心地よさを実感できるのだ。自然と人間のことを考えるとき、豊島美術館が示すことが、ひとつの究極の答えなんじゃないかと直感的に思ってしまうのである。

僕ら自然科学の研究者は、里山の価値についていろいろ計測したり計算したりして、数字でまとめることで人に伝える。これがわれわれの使命だ。ところが、何を伝えるかということになると、アーティストの直感のほうが、より人々のところにぐっさりとささることも多々ある。「自然にふれあいたい」「自然を大事にしたい」と人の背中を押すのは、理屈じゃなくて感動だったりすることも

多い。こうやって、人のところに直接訴えかけるもの、「原始人」の時代から持っている人の本性に響くもの。それが里山の自然と交流するアートなんじゃないかと思う。

行ってみよう、里山と現代アート

豊島美術館のような現代アート作品は、その場所でしか鑑賞できない。古典的な名画のように、額縁のなかに収めて世界各地を興行してまわれない。こういうのをサイトスペシフィック性という。観たいなら、行くしかないのである。その作者はその場所で作品を制作し、その場所に合うよう展示している。いわばオーダーメイドだ。だから僕らはその場所まで旅行し、それを鑑賞する。その手間をかける価値はある。いやむしろ、遠くにあるからこそ意味が深くなる気もする。たとえば瀬戸内海に浮かぶ豊島に行くには、船に乗らなくちゃならない。ふだん乗りなれない船に乗ること。この体験からすでに、異世界への旅ははじまり、僕らの感覚はひらかれ、素直になってゆくのである。

里山は不便である。僕らは田舎の坂道をゆっくりと上りながらアート作品へと向かう。けっこうな距離を歩く。あるいは、たまにやってくるバスに乗るにしても、道ばたのベンチでコスモスの花なんかをぼんやり見つめながら待つことになる。でもこういうプロセスは、なぜか苦痛じゃない。そしてこの文章の冒頭のように、なんでもないものを見て、なにかじんわりと、こころにしみる発見をするのである。体験すること。旅をする特別感。日本の田舎には里山があって、そこに人と自然のかかわりがあるってことを、素直に見ることが大事なんだと思う。そしてアートを観に行くことは、いやおうなく里山を延々と歩ききかけになる。里山では、風も吹くし雨も降るし虫も出る。夕方は暗くなる。都会

では意識しづらい、こういう当たり前の自然の変化のおかげで、アート作品は表情を変え、鑑賞者のテンションを上下させる。雨が降ったときのがっかり感。雨上がりのうつくしさと高揚感。こういう正と負の両面の経験を通して自然を知ること重要だと思う。それは、美術館やテレビではわからないこと、そして科学者が示す数字でも伝わらないことであり、この大事な部分を現代アートに託したいと僕は勝手に思っている。

小豆島の三都半島でのこと。アート作品のまわりに地元のおばちゃんがテントを立て、無料でお茶やお菓子を供していた。麦茶をもらって蒸しパンを食べた。ありがとう、から会話が始まる。田舎の、親戚でもないおばちゃんと口を利くって経験、よく考えると貴重だ。お接待してくれるおばちゃん、ボランティアで作品の解説をしてくれるおばちゃん、みんな誇りとやさしさに満ちている。アートとは、田舎のおばちゃんにとっては地元の誇りである。そしてやってくる都会の若者にとっては、自分さがしなのである。そう、ひとりで旅に出て、つかれたら道端にこしかけ、草花や旅人やおばちゃんと語り合う。たまじめにセンチメンタルしていいのだ。

そりゃ問題だってある。ひこにゃんやくまモンがブレイクしてからというもの、いまや日本中の、ジリ貧の地方公共団体がゆるキャラをつかって地域おこしをがんばってるのはみんな知ってのとおり。雨後のタケノコの如しで、正直言うと僕は食傷気味である。そして今、ゆるキャラと同じような図式で、「田舎に現代アートを置いてみよう」という安易な芸術祭が日本に蔓延しはじめている。瀬戸内や越後妻有での成功例に目をつけた、役場のおじさんや商店街のおばさんたちが地域おこしのために企画する芸術祭は玉石混交だ。そして十年後には、「芸術祭」って言葉が出ただけで、「ああ、むかしそう

いうのあったね」と失笑を買う事態に陥っているかもしれない。

とりあえず僕らは、いろんなものを観る準備をしておこう。すばらしいアート作品を観たら素直に感動すればいい。が

っかりする作品にも出会うけど、それはそれで受け止めよう。ある意味、おかしなものは掘り出し物だ。見知らぬ町のゆるキャラが絶望的すぎて逆におもしろいように、アート作品をネタとして楽しむ姿勢もいいと思う。それを観るために自分が使った労力と時間が大きいほど、ネタとしてもまた、おもしろいのである。

そもそも、イケてるアートとそうでないものは紙一重だ。そこで問われるのは審美眼だ。かといって小難しく考える必要はなく、芸術祭が乱立しはじめた今こそ僕らは、ほんとにいいと思ったものを、いいと言えればいいのだ。生物学の視点で考えると、僕ら人間は、進化の過程で芸術を理解する能力を培ってきている。僕らの先祖が下した美的判断によって、彼らの生存と繁殖の成功が左右されることもあっただろう。僕らは彼らの遺伝子を受け継いで今日に至っているわけだから、自分の直感を信じてしまっただけかまわないと思っている。「ハズレだな」と感じたら、素直にそう受け止めればいい。よく、ハズレな芸術を観たときに「芸術は高尚でむずかしいから自分には分からない」などと自分のせいにした体で逃げる人がいるが、それは謙虚すぎるところか、その姿勢が芸術ばなれを招く気がする。芸術に詳しくなくても、好きな芸術・きれいな芸術があつてよいのである。



写真4 竹ヤブの前に立つ鉄製の造形物。鉄なのに柔らかく感じられるのはなぜだろう。でも、さわってみたらやっぱり硬かった。青木野枝「空の粒子／唐櫃」(撮影:筆者)

あとひとつ言わせていただきたい。そもそも現代アートは、安易かつ支配的な世間の思考回路に鮮烈な一撃を加えるための手段でもある。しかし巷の芸術祭ではそのパンク性は飼いならされ、「企画者と来場者を喜ばせる」という趣旨に従順な芸術家が選ばれている。芸術祭に現れてこない現代美術には、観る者を混乱させ怒らせ惑わせることで考えさせる作品も多いので、僕たち鑑賞者は(そしてもちろん企画者も)、芸術祭の作品は氷山の一角であること、光のあたらない暗黒の濁流の中に存在する生々しいアートがあることも意識したいと思う。

結語

里山の小道。陽だまりに咲いている小さな花。もしかするとその花は、人が外国から持ち込んだ外来種なのかもしれない。その陽だまりは、誰かが木を切ってきた空間なのかもしれない。いいかわるいは別として、自然と人間は、こうやってお互いに影響を与え合う(「なぜそこに咲いているか」は別として、僕はその花から感動をもらったのだ)。里山とはこういうものだ。そしてアートは、僕らと自然との接触を誘発し考える機会を与える、優れた触媒なのだと思う。

個人のころと社会のころ

福島慎太郎 (青山学院大学総合文化政策学部助教)
Shintaro FUKUSHIMA

最近、引っ越しをした。京都から神奈川県にだ。

これまで7年間、三方を山に囲まれた盆地である京都で研究生活をしてきた。暖気や冷気、さらに溜まりこむ湿気とともに醸成される密度の濃い文化に抱かれて、あらためて充実した時間を過ごさせてもらったと感じる。そこでは、四季折々に変化する身の周りの自然と調和し合うように人々の生活が織りなされ、時間はどこかゆっくりと流れていく。それに伴い、自分もふと立ち止まって自らを省みたり、ゆっくりと思索をするゆとりを十分に持つことができた。

そのような中で、この4月に神奈川県川崎市に引っ越しをした。多摩丘陵上に位置するその場所は、平地という平地が見当たらず、あちらもこちら起伏に富んだ地形が形成されている。自転車を使おうものならもの見事に5分間で自転車を降りることとなり、あたりを見渡せばいたるところに坂が目映る。

初めて自分がこの神奈川県の景観を見たのは幼いころ。あたり一面に住宅地と田んぼが広がった埼玉県の平野に生まれ育った自分が、新幹線の窓から神奈川県の丘に形作られた立体的な風景を見たとき、ここでは人々はどのような感覚で生活を送っているのだろう……。と自分の知らない世界に対する不思議な感覚を抱いたことを強く覚えている。思春期のころに観たジブリの映画『耳をすませば』では、主人公が階段や坂を駆け下りる中で展開される臨場感あふれる風景と心の変遷が、とても新鮮に感じられた。丘陵地域で生活してきた人にとっては当たり前のこ



左は神奈川県のとある路地、右は埼玉県の田園風景

となのかかもしれないが、日々穏やかに稲穂が見守る一面の平野の中で、空の上をゆっくりと歩行する太陽と足並みを揃えて生活してきた自分にとっては、自らの行動に伴い上下左右に次々と表情を変える街並みから得られる体感はとても新鮮なものなのだ。幼少期から自らを取り巻く環境とともに形成されてきた平坦で境界が低い心に、その起伏に伴う凹凸の深い陰影を映し出す場面を数多く提供してくれるのではないか、という高揚感を体内に感じながら、新生活が始まった。

これまで大学院から研究員時代にかけて、人々を抱く地域という場所の魅力に惹かれながら、社会学と心理学の中間領域で研究をしてきた。ここでは、個々人の心が持つ個性とともに、その心に纏われた地域の環境を捉えようとする。いわば、個人を通して自然や社会、さらには個人と環境の総体としての風土や文化に触れる、というのが研究手法となっている。私は私であって、埼玉人であって、日本人であって……。という多層的な心（同時に場）との対話を

試行するのである。そしてその際、それぞれの場に身を置き生活をしている人たちの心と対話するのは、何を隠そう研究者本人の心となる。その対話を繰り返しながら、現代社会で育まれた心たちを固有の切り口から描き出していくのであるが、対話相手である研究者の心は、これまた何を隠そうそれまでの本人の身の置き方・生き方に依っている。

これまで京都で素晴らしい仲間・温かい心に見守られてきた。このことが、現代社会の心たちとの対話相手としての、そして社会に対話成果を還元する表現主体としての自分の心にとっての何よりの財産。今後、どのような風土や文化に身を置くことになるかわからないが、これまでに出会ってきたかけがえのない仲間との経験をいっぱい含みこんだ心ひとつで、身をもって新たに出会う人たちと対話をしていきたい。そして、社会科学における対話相手としてと同時に、実践的に自らの心・場を体現する主体として、日々誠実に生きていきたい。

エッセイ

頭蓋骨に刻まれたもの——チベットで出会うところ・からだ・人生

小西賢吾 (金沢星稜大学総合研究所・教養教育部講師)
Kengo KONISHI

ヒマラヤとチベット高原に抱かれた地域を訪れると、そこかしこに人びとの真剣な祈りの姿をみることができる。筆者が2005年以来通いつけてきたシャルコク地方（中国四川省アバ州）でも、朝目を覚ますと一杯の茶を飲んで僧院に出かけ、その周囲を巡拝するのが日課であった。経典が封じられた筒を回しながら、仏教徒は時計回り、ボン教徒（仏教伝来以前からの流れをくむとされる宗教）は反時計回りにめぐるのが作法である。フィールドワークの初期、まだ言葉も習慣もわからなかった筆者にとって、朝の時間は僧院をめぐりながら村の人びとの「井戸端会議」に参加する貴重なひとときであった。日本から来たのか、今日は何周回ったんだ、といった他愛ない会話を続けていると、少しずつ現地に溶け込んでいくような感覚をおぼえた。また、皆でぞろぞろ歩きながら周回を重ねるごとに、なぜこんなことをしているのだろう、なぜこまでするのだろう、という疑問が自然とわき上がってきたのである。

アジアの仏教圏では、善行をなして功德を積むことで、よい結果が得られる、いわゆる因果の考え方が広く共有されている。それは、現世利益にとどまらず、死後の行き先にも密接に関係している。あるチベットの高僧は、生きているうちに十分に死の準備をしておかなければならない、と説く。厳しい自然環境ともあいまって、チベット高原では死がより身近にあると感じた。滞在中に知人が不慮の死を遂げたという知らせを受け取ったことも少なくない。普段から因果や輪廻に親しんでいる人びとは、死を前にして一見淡々と対処

する。49日が過ぎればまた次の生が始まるのだから、と。とはいえ、身近な人を失うかなしみと、死への恐怖は、生につきまとう根源的な課題として重くのしかかる。だからこそ、人びとは日々の祈りの中で、

現世と来世の幸福を切実に願っているともいえる。

筆者は当初、人びとのいわゆる「篤い信仰心」をこうした因果モデルから理解しようとしてきた。よいこと、具体的には祈りや儀礼、利他的な行為などがよい結果をもたらすという説明は、一見クリアであるが、どこか「きれいすぎる」印象もあった。フィールドでの経験を重ねるにつれ、地域社会の複雑な人間関係や、現地と自分をつなぐさまざまな「縁」を実感することになったが、それははたして善行だけで説明できるのか。そうした疑問を抱えながら聞き取りを重ねる中で知ったのが、「トパリモ」（「頭蓋骨の絵」という表現であった。トパとは頭蓋骨、この場合、とくに額を指す。人生で起こることは、すべて額に刻まれている。よいことも、悪いことも。誰と出会うか、どのような仕事につくか。思いどおりにならず苦しいときは、「がまんしろ、トパリモだから」と慰める。その絵は、「ナム・ゴンポ」（「青



僧院を巡拝する人びと

空] すなわち天が描いているという。ある僧侶は、これはボン教的な考え方だと説明する。

これは、単純な運命の決定論ではない。どんな絵が描いてあるのかは、特殊な占い（「モ」）の技術を持った者のみ知ることができるという。そして日常の行動や儀礼によって描きかえられる可能性があることも示唆される。しかしいつ描きかえられるか、儀礼に本当に効果があるのかは誰にもわからない。よいことをしても報いがないかもしれないが、その時は額の絵のせいだと考え、それが少しでもよく描きかえられることを期待して日々を生きる。それは、ボン教と仏教が複雑に混ざり合い、こことからだへの精緻なまなごしを伝えてきたチベット文化の側面を端的に示すとともに、ヒトが未知の未来に自己を投じていくスリリングな現場でもある。

スピリチュアルケアの裏庭

ティモシー・ベネディクト (プリンストン大学宗教学科博士課程後期)

Timothy O. Benedict

*ティモシー・ベネディクト氏は、日本育ちで、日本の病院勤務を経てスピリチュアルケアの研究を開始した。2014年8月～2015年9月までフルブライト奨学金でこころの未来研究センターにて共同研究に従事している。

スピリチュアルケアの現状

ここ10年間で日本におけるホスピスの数は倍以上に増加した¹⁾。そして緩和ケアの拡大とともに、ターミナル患者に提供するスピリチュアルケア（霊的ケア）に対する意識も高くなってきた。

スピリチュアルケアとは、患者が死に近づく際に心の中で感じる深い悩みや、人生の意味等と向き合うことに対する援助を目的とするケアとされている。つまり、ホスピスでは身体的苦痛の緩和に加えて心や精神的な苦痛を和らげるケアを重視し、患者の全人的ケアに挑んでいる。

たとえば、スピリチュアルケアに関しては欧米のホスピスでは多種の宗教者（チャプレン）が医療スタッフと協力して、死と向き合う患者の相談に乗れるようにホスピスに常駐していることが一般的である。日本ではこのような認識はまだ薄いと言えるが、2013年には日本のホスピスの約15%に宗教家が携わるようになった。

しかし、スピリチュアルケアを提供する上で困難なのは、日本人の複雑な宗教的背景である。欧米では個人の宗教観がはっきりしているのに対して、多くの日本人は七五三には神社へ参り、結婚式はキリスト教系のチャペルで行う。日常的には自分は無宗教と言いつつ、最後には仏教でお葬式を挙げる。それでは、このような宗教観を持つ日本人は人生の最期を迎えるとき、宗教家からどんなケアを求めているのだろうか？

この問いを探るために、私は京都大学こころの未来研究センターを拠点にしなが、日本のホスピスにおけるスピリチュアルケアの現状の調査に取り組んでいる。

研究方法

曖昧な立場にあるスピリチュアルケアの実態を研究するにあたって、まず大切なのは研究方法である。スピリチュアルケアは医療の現場にありながら、数字では表しにくい側面と向き合っている。たとえば、チャプレンは患者のために何かを「する」というより、患者とともに「いる」ことによっていちばんいいケアができると考えられている。傾聴をしたり、静かに手を握ったり、雑談の中で孤独な患者と関係性を築いたり、必要な患者には宗教的なケア（お祈り、お経を読む等）を提供するのが主な働きである。

このようなケアを調べる際、研究者はホスピスに身を置いて長期間にわたり、じっくりと観察することが必要であると考えられる。よって、私は文献調査とインタビュー調査に加えて、参与観察に基づくフィールドワークを日本各地のホスピスで実施している。具体的には、ホスピスでチャプレンや他の医療スタッフをシャドウウィングしたり、スタッフのカンファレンスや病棟イベントに参加したり、患者さんやご家族といっしょにお茶を飲んだりして、ホスピスという「場」におけるスピリチュアルケアの現状をしっかりと描き出そうとしている。

スピリチュアルケアの現場

このように、ホスピスにおけるスピリチュアルケアを現場の視線から見ると、文献やインタビューだけでは見えない発見が多く出てくる。たとえば、私はある仏教系のホスピスで2週間ほど研修をさせていただいた。そこでは、チャプレンを「ビハーラ僧」と呼び、ポロシャツを着た僧侶が患者のスピリチュアルケアに取り組んでいる。しかし、不思議に思ったのは、日々の働きの中では「スピリチュアル」という言葉をほとんど耳にしないことである。もちろん、ビハーラ僧は患者の心の悩みを傾聴して、生きる意味を失った患者の実存的な問いに日々対応をしている。しかし、それだけではない。それより強く印象に残るのは、ビハーラ僧が患者といっしょに普通に「生活している」姿である。天気のよい日は患者の車椅子を押しながら外で散歩をし、患者とご家族とダイルームでいっしょに昼ご飯を食べながら、自然な形で患者と接することである。また患者訪問の合間には、軍手をはめ長靴を履いて、ホスピスの裏庭で、病棟から患者が眺められる小さな日本庭園を作り、患者が利用できる畑の草取りをしている（写真1、2）。

ある日、患者は窓からビハーラ僧が鯉のいる池を掃除しているところを楽しそうにじっと眺めていた。部屋に戻る際には、「鯉を池に放すときは教えてね！」とビハーラ僧に声をかけた。また、ある患者が畑で育てたネギも病室のベランダに干してあ

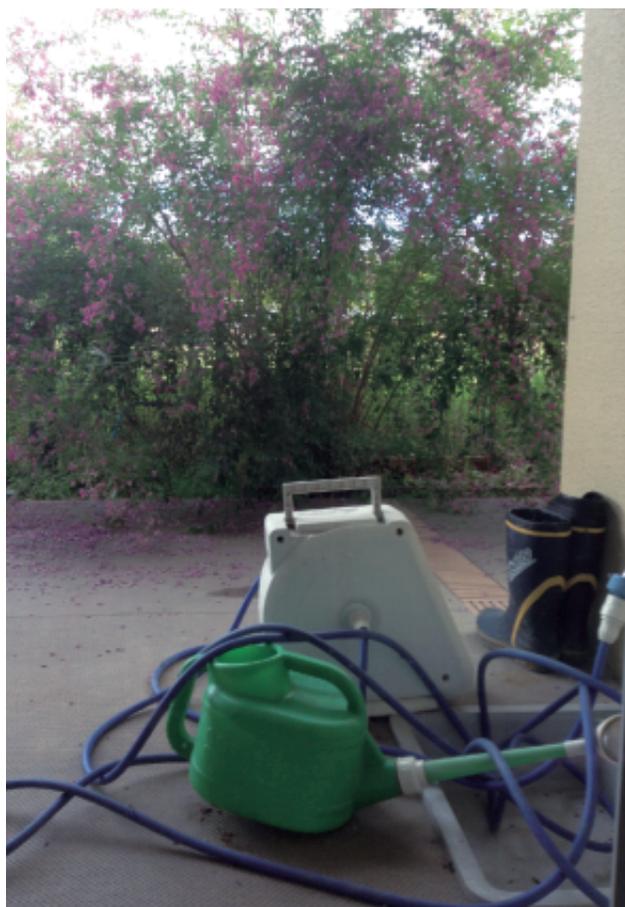


写真1 病棟の窓からの裏庭の風景



写真2 訪問の合間に庭仕事をするビハラー僧

る。このようにビハラー僧は日常的な生活や風景を病棟にもたらし、病院とは思えないアットホームな雰囲気を作り出している。1人ひとりの患者さんに寄り添いながら、あたかも患者が家で普通に暮らしているかのような環境を生み出している。

このようなビハラー僧の働きについて、ある僧侶は笑いながら私に次のように説明した。「うちでは、もしかしたらスピリチュアルペインの予防をしているのかもしれない」。

またこのようにも説明している。

「自転車が走るためには3cmの幅の道しか必要ない。この絶対必要な3cmは医師や看護師が提供する身体的なケアである。しかし、幅3cmしかない道を自転車で走れと言われても、だれも怖くて走れない。横に必要なでない1mの幅の道があるからこそ安心して自転車は走れる。私たちの仕事はその残りの幅の部分だ」

考察

日本のすべてのホスピスで同じようなスピリチュアルケアが実施されていなくても、以上のように患者さんの心の悩みや宗教的なことに直接触れるケアだけではなく、日常生活のあらゆる面で患者と関係性を持ちながらスピリチュアルケアをしているところは少なくないだろう。また、これは複雑な宗教観をもつ日本人に対する適切なスピリチュアルケアであると言えるかもしれない。この点については、日本の学術的な論文で述べられているスピリチュアルケアと現場で行われているケアの実態に相違が見られるところが興味深い。これからもフィールドワークを通して、スピリチュアルケアの裏庭の姿を探り続けたい。

最後に

最後に私の研究を支援してくださっているカール・ベッカー教授をはじめ、こころの未来研究センターの皆様にご感謝を申し上げます。私の研究については、先生方やゼミの同僚から自分の専攻分野を超えた有益なアドバイスをいただき、それを通して、私だけでは知り得なかった新しい気づきを多くいただいている。このような恵まれた環境のもとで研究をさせていただいていることに改めて感謝を申し上げるとともに、今後のこころの未来研究センターのますますの発展を祈念する。

注

1) 日本全国の緩和ケア病棟・病床数は2003-2013年の間に、132棟2497床から278棟5583床まで増加した(『日本緩和ケア白書』2014年)。

日本のインフォームド・コンセントと患者・家族のための支援

ローラ・スペッカー・サリバン(ワシントン大学医療倫理系助教)

Laura Specker Sullivan

*ローラ・スペッカー・サリバン氏は、2013年8月～2015年3月まで皇太子奨学金を受給し、こころの未来研究センターで共同研究を行った。2015年6月にハワイ大学で博士号を取得し、2015年6月からワシントン大学の医療倫理系の助教を務めている。

インフォームド・コンセントとは何か?

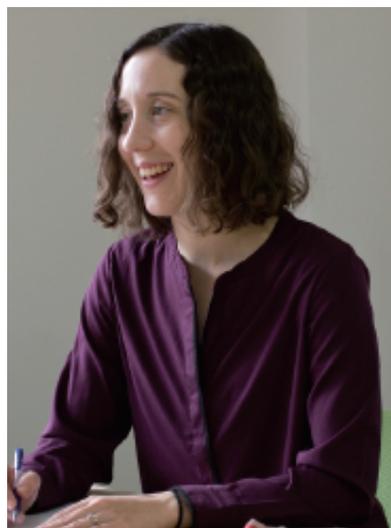
現在、日本を含め多くの国々において「インフォームド・コンセント」という概念がしばしば用いられている。しかしながら、この概念はどの国においても同じ意味で用いられているわけではない。患者が持つニーズと医師が受けてきた教育によってインフォームド・コンセントの実践は異なるのである。たとえば、私が研究していたハワイの場合、患者や医師は多様な文化的・社会的背景を持っている。ゆえに、ハワイのインフォームド・コンセントを理解するためには、そうした多様性を考慮することが重要となる。私がハワイでインフォームド・コンセントについて参与観察を行った際、幸運にも中国、日本、ベトナム、ハワイなどの文化的差異に触れる機会があった。病院の倫理委員会に参加していたとき、白人の患者・家族は積極的に情報を求め、自分で治療過程を選択するのに対し、アジア人は情報を求めず、決定を医療従事者に一任する傾向があることに気がついた。

日本のインフォームド・コンセントを理解するためにも、日本の文化的・社会的背景を考慮する必要があるだろう。しかし、現在までのところ、日本のインフォームド・コンセントとそうした文化的・社会的な背景の関係性については十分に議論されていないように思われる。この点に関心を抱いた私は、以下で述べるように、京都大学こころの未来研究センターを基点に研究を開始した。

調査の結果——支援の必要性

1年半にわたる日本での文献調査と質的インタビューを通して、私は多くの情報を得た。従来、日本のインフォームド・コンセントは3つの概念によって構成されてきたように思われる。それは、「患者の自己決定」、「医師の裁量権」、そして「医師の説明義務」である。日本では、患者の自己決定権や医師の裁量権の程度が情報開示する義務の範囲を決定する。患者が積極的に自己決定を行わない場合、医師がインフォームド・コンセントのプロセスを主導する傾向がある。それでは、なぜ日本ではこのようなインフォームド・コンセントが行われているのであろうか。上述した文献研究やインタビュー調査を基に、この問いに答えることにしたい。

1年半の在日滞在期間中に、医師、看護師、福祉士、また臨床心理士にインタビュー調査を実施した。インタビュー対象者にも恵まれ、医療従事者が先に述べたインフォームド・コンセントの基準をいかに実践しているのかを理解することができた。インフォームド・コンセント・プロセスに関して、アメリカ人である私を最も驚かせたのは、患者や家族に対する支援制度であった。日本のインフォームド・コンセントにおいて、医療従事者は患者の家族に同席を求める。親族の誰かがインフォームド・コンセントの場に同席することによって、診断告知を受けたばかりの患者を支えるのである。



面接中の筆者

これはアメリカのインフォームド・コンセントと大いに異なる点と言えるだろう。アメリカのインフォームド・コンセントにおいては、患者は1人で医師の診断告知を聞くのが普通である。医師が家族に同席を求めることはない。アメリカのインフォームド・コンセント理論では、インフォームド・コンセントは患者の自己決定のためにあるので、家族が同席してしまうと患者の自律を妨げる可能性が生じてしまうのである。一方で、日本の医療従事者によれば、インフォームド・コンセントの場に家族が同席することは、よくない診断を受けた患者の判断能力をサポートするためにあるのだという。

私はインタビュー対象者に支援の必要性に気づいたきっかけについて尋ねたところ、過半数の人が「がんの告知」と回答した。したがって、私は日本のがん告知についても洞察を深めることにした。

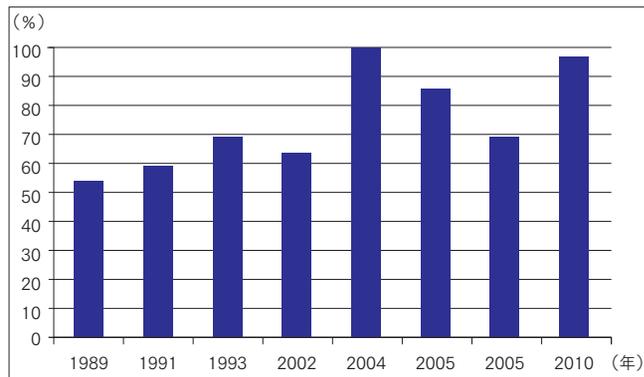


図1 がん告知を希望する日本人の比率

(図1、図2とも、1つの調査による経年変化を表したのではなく、複数の調査結果を年代順に並べたものである。)

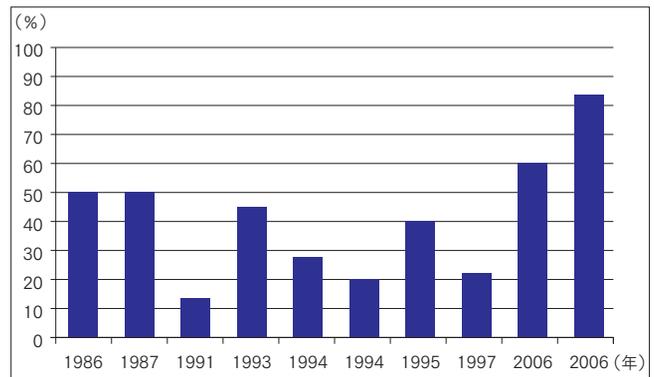


図2 日本における医師によるがんの告知率

がん告知の意義

現在、がんは日本人の死因のトップであり、2人に1人ががんに罹患すると言われている¹⁾。このことから分かるように、日本においてがんは怖い病気であると見なされている。ある調査では、日本人の35%ががんによって死を連想し、がん対策が十分だと考えている日本人は29%に過ぎない。つまり、多くの患者や家族(55-62%)は支援が不十分だと考えている²⁾。また、がんで予後1年以内と診断された患者の自殺率は、健康な人に比べて20倍高いという³⁾。医師が診断告知を行うことは許容されるであろうが、告知後の自殺率を踏まえれば、告知しないほうがよいと言えるかもしれない。

しかしながら、矛盾するようにも見えるが、日本人の97%ががん告知を希望し、94%の人が予後と寿命の情報開示を希望している⁴⁾。それでは、なぜ日本においてがん告知が行われないのだろうか。

私のインタビュー調査では、医師は原則として患者本人に告知するべきであると考えていることが分かった。ところが一方で、がんやとくに深刻な診断の場合、医師自身に十分なコミュニケーションの技術がなく、告知後の支援制度も十分ではない状況においては、診断告知が患者に打撃を与えるのではないかというアン

ビバレントな感情を抱えていることも明らかになった。もし支援体制が不十分ならば、患者に診断告知を行うことが安全であるとは必ずしも言えなくなる。患者が診断告知をされてショックを受けるのではないかと懸念する医師は、ひとまず家族に診断告知を行い、本人に伝えるべきかどうかについて相談する傾向がある。

以上を踏まえれば、こうした診断告知のプロセスは、日本という個別の社会状況に根ざしたインフォームド・コンセントであると言えよう(図1、2)。

日本の調査から学んだこと

本研究をとおして、従来、アメリカにおいて顧みられてこなかったインフォームド・コンセントの一面を捉えることができた。上述したように、インフォームド・コンセントのプロセスにおいて、患者に情報を提供し、同意書を得るだけでは不十分であり、患者を支えることが重要となる。今後、インフォームド・コンセントが実践されているアメリカなど他の国々においても、患者への支援体制が整えられる必要があるであろう。

本報告書で述べた日本のインフォームド・コンセントの特徴が端的に示しているように、インフォームド・コンセントとその実践は個別の社会的・文化的背景に依存している。し

たがって私は、今後も各国のインフォームド・コンセントに関する考察を通して、文化的・社会的背景に関する洞察を深めていく必要があると考えている。

謝辞

日本での調査研究を可能にしてくださった方々に心よりお礼を申し上げます。また、私を受け入れてくださったカール・ベッカー教授をはじめ、京都大学こころの未来研究センターの皆様にも深く感謝を申し上げます。

注

1) Japan National Cancer Institute, Fumihiko Wakao, ed. 2013. Cancer Statistics in Japan -2013. Japan Foundation for the Promotion of Cancer Research. Available at: http://ganjoho.jp/pro/statistics/en/backnumber/2013_en.html

2) GfK Roper Public Affairs and Corporate Communications and GfK Healthcare. 2013. (PACE: A Lilly Oncology Initiative.) A Six-Nation Survey of Cancer Knowledge and Attitudes Among the General Population, Patients, and Caregivers. Available at: https://pacenetwork.com/pace_index.php

3) Yamauchi et al. 2014. Death by Suicide and Other Externally Caused Injuries Following a Cancer Diagnosis: The Japan Public Health Center-based Prospective Study. *Psychooncology* (Epub ahead of print).

4) AFLAC. 癌に関する意識調査: http://www.aflac.co.jp/news_pdf/2010082300.pdf

研究プロジェクト一覧（平成25年度）

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
負の感情	快感情の神経基盤	船橋新太郎
	甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	河合俊雄
	ストレス予防研究とストレス緩和プログラム開発	カール・ベッカー
	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善	清家 理
こころ観	こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか？）	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究	鎌田東二
	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
	精神と科学との対話を通じたこころ観の再構築	熊谷誠慈
	ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
きずな形成	他者理解に関わる感情・認知機能	吉川左紀子
	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
	コミュニケーションの言語・文化的基盤	内田由紀子
	治療者・社会・病に関する意識調査：慢性疾患に関わる社会・倫理的問題	カール・ベッカー
	終末期に対する早期支援	清家 理
自然とからだ	癒し空間の比較研究 生態智の拠点としての聖地文化 —— こころ・場所・癒しの研究	鎌田東二
発達障害	子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
教育	こころ学創生：教育プロジェクト	吉川左紀子
震災	東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～	鎌田東二
幸福感総合	地域の幸福プロジェクト	内田由紀子
	国民総幸福（GNH）を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
心理療法場面にみられる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	前川美行（東洋英和女学院大学准教授）
子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀（追手門学院大学経営学部准教授）
高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	積山 薫（熊本大学文学部教授）
身体と象徴：自然・社会・人体のリズムの総合的研究	木村はるみ（山梨大学大学院教育学研究科准教授）
被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究Ⅱ	大西宏志（京都造形芸術大学教授）

研究プロジェクト

こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究 (人類はこころをどのようにとらえてきたか?)

鎌田東二(こころの未来研究センター教授)

■「こころの荒廃」の突破口としての「身心変容技法」

本プロジェクトの目的は、今日の日本社会が抱え込んでいる「こころの荒廃」の問題から抜け出す道を探り出すために宗教的リソース(技術と知恵)に着目し、その学術的・社会的な可能性を開くことにある。これまで鎌田研究室では、多様な思想的バックグラウンドにおける「こころ」の捉え方を整理し、「こころ観」の俯瞰的な地図の作成に取り組んできた。それと並行して、それぞれの宗教的伝統が培ってきた修行・修養・変容の技法を「身心変容技法」として捉え直し、神秘思想における瞑想、仏教における止観や禅や密教の瞑想、修験道の奥駆けや峰入り、滝行、合気道や気功や太極拳などの各種武道・芸道等々、さまざまな実践の諸相(特色)と構造(文法)を明らかにしてきた。2013年度は、これまで重ねてきた思想研究とフィールド調査に加え、神経科学的手法を導入し、「身心変容技法」の神経科学的機構の解明に着手した。それらをふまえて、各々の宗教的伝統における根源的な「こころの変容」を解明し、現代を生きる個人が活力を掘り起こしながら生き抜いていくことに資する研究成果を社会に発信することを目指す。

■研究会の概要

宗教的实践における「こころ」、および言語学における「こころ」の諸相を明らかにすることを目標として、内部研究会を開いた。

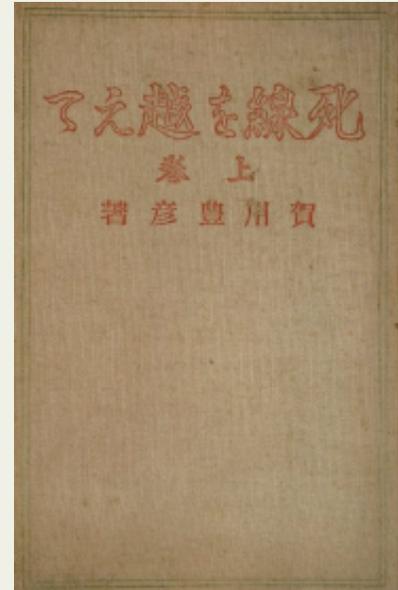
トマス・ヘイスティングス(Thomas John Hastings)日本国際基督教大学財団主任研究員を招いた研究会では、「賀川豊彦の思想と実践」の演題のもと、昭和初期の実践家賀川豊彦のキリスト者としての活動に着目し、その思想と今日的意義について議論した。伝道者

である賀川豊彦は、キリストの十字架の贖罪愛を基軸にしつつ、しかもそれを単に個人の魂における内的な救いにせず、社会の中で活動することによって信仰を貫いた。賀川は、贖罪愛の恵みに伴う「生命宗教」、「生命芸術」や「連帯責任の意識」といった概念を軸とした実践倫理を練り上げて、今日の「生協」の前身となる組織「神戸コープ」を設立するなど、日本のプロテスタントの教会史の中でユニークな活動を重ねた。それは、彼自身の「こころの変容」を探るのみならず、今日の社会活動を見直す意味でも重要な参照点となるであろう。

青木三郎筑波大学大学院教授を招いた研究会では、日本語の「こころ」という語を世界の言葉に翻訳するとどうなるかという素朴な疑問に答えるために、多様な言語の専門家と協同し、「こころ」に関する表現をまとめて分析することを試みた。「こころ」という語彙自体がもつ意味は多義的であり、かつ対応する他(多)言語における語彙も多義的である。「こころ」は、人間に関しては、思慮・分別、情趣、予期、感情、思いやり、意志、望みなどの知情意、物事に関しては、本質、内情、内容、風情などを意味するようになる。こうした「こころ」の壮大な意味の網の目を明らかにするためには、内臓・人間(知情意)・事物(内容)の関係を軸として、語彙および用例を綿密に収集・整理することが必要となる。

■シンポジウム

プロジェクトの成果報告として、シンポジウム「ワザとこころパートIII～天神信仰と天神の祭り」を行った。地元京都・大阪の文化の深層を再発掘するシリーズの第三弾である。京都を代表する祭り「祇園祭」に込められた「ワザとこころ」を探る。上田正昭氏(京



賀川豊彦『死線を越えて 上巻』

都大学名誉教授)、寺井種伯氏(大阪天満宮宮司)、加藤迪夫氏(北野天満宮権宮司)、竹居明男氏(同志社大学文学部教授)とともに、研究者、表現者、祭りの担い手が、それぞれの持ち場と観点からテーマに即して問題提起や報告をし、ディスカッションを行った。

天神信仰と祭りのルーツとなった菅原道真の人物像や、道真公を天神へと至らしめた歴史的背景と経緯、北野天満宮創建の経緯、神社祭祀の三要素、祀りの地、祀りを司った歴史的人物の解説、あるいは、何度も火災焼失などに襲われながら復興を繰り返した大阪天満宮の歴史、人々に愛され支えられた天神祭の歴史、現在も続くさまざまな祭事に関する詳細な記録や年表などが紹介され、天神信仰の生き生きとした諸相に触れるシンポジウムとなった。

参考文献

- トマス・ヘイスティングス「賀川豊彦—科学的な神秘主義者」『モノ学・感覚価値研究』第8号、2014年3月。
『身心変容技法研究』第3号、2014年3月。
『ワザとこころパートIII 天神信仰と天神の祭り シンポジウム』報告書、2014年2月。

こころとモノをつなぐワザの研究

——伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■ワザ学

「ワザ（技・業・術）」とは、物の世界に形を与え、人間世界に広がり深みをもたらすことを可能にする、こころとモノとの媒介通路を意味する。人間はこれまでに、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かなワザを創造、継承、改変してきた。このようなワザに着目し、人間のこころと、物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味することによって、「物は豊かだがこころは貧しい」と言われる今日において、こころと物とのつながりを取り戻し、生の豊かさを切り拓く道を模索する。平成25年度は、世阿弥研究会、フィールド調査、一般公開シンポジウムを行った。

■世阿弥研究会

観世流能楽師河村博重氏を交え、毎月2回、世阿弥の書き残した「伝書」を読解することによって、言葉によってワザを記した世阿弥の思想および文体を読み解くことを目標としている。世阿弥後期の思想は、台頭する能の諸

座に遅れをとりつつあり、舞台の一戦からは退いた立場において紡ぎ出されたかのような、観念的な思索、あるいは愁いを帯びつつも達観した思索であると特徴づけることができる。だがそうした世阿弥の文体こそ、一座主として、一舞い手としての生きた思索の現れでもある。世阿弥が筆に託したその思索は、能という1つの活動の枠を越えて、今日におけるワザの活動全般に、またワザに関わる思想の追求にとって参照点と捉えられる。

■フィールド調査

具体的なワザの働きを分析することを目的として、淡路島の人形浄瑠璃の一座に対する調査を行った。具体的には、人形遣いの「わざ」の稽古場面、および興行場面の観察・分析を行うことで、「身体による学び」の可能性を探ることを目指している。

淡路島での調査の一環として、2013

年6月と2013年10月、全国の学校に出向いて行う「次代を担う子どもの芸術体験事業」（出張公演）に同行し、学校の中での教育的活動を行う淡路人形座の座員たちの様子を調査した。学校教育と伝統芸能は、必ずしも相性のよいものではないと考えられるが、あえて座員たちは、学校教育という枠組みの中で身体を用いた豊かなやり取りを仕掛け、子どもたちの人形体験を生き生きしたものに導いている。その際、座員たち



張明亮老師による一般向け実習

は公演を「現代の巡業」として、今日の重要な取り組みの1つと位置づけており、「体験授業」を期待する学校側の思惑とは異なる次元で動いている。それは、江戸時代に全国を行脚した旅芸人の末裔として、自分たちもまた全国の学校に出向き、舞台を見せるという活動である。座員たちは、教育的活動を越えて舞台を展開するという、一演者として、等身大のままに子どもたちに対峙する姿が見受けられた。共同体の時間を背負ったワザの継承のありようのなかに、身体において学ぶことのままならなさや豊かさが見てとれよう。

■一般公開シンポジウム

平成25年度は、中国における気功（峨眉派）の第一人者である張明亮老師を迎え、一般公開の国際シンポジウムを開催するとともに、気功の実践の場を市民に向けて提供するために一般公開の実習を行った。当日は定員を大幅に越える100名近い市民の参加を得て、好評を博した。

参考文献

奥井遼『わざの臨床教育学——淡路人形座における人形遣いの稽古および興行に関する現象学的記述』学位請求論文（博士〔教育学〕）2013年12月。

開催	テキスト	キーワード
4月	九位	妙花風、寵深花、風閑花風、正花風、広精風、浅文風、強細風、強鹿風、鹿鉛風
5月	六義	妙花風、寵深花、風閑花風、正花風、広精風、強細風
	五音曲	祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲
6月	夢跡一紙	（該当なし）
7月	却来花	却来
	金鳥書	（該当なし）
8月	五音	祝言、幽曲、恋慕、哀傷
9月	書簡	得法以後の参学
10月-3月	風姿花伝	誠の花、時分の花、老木に花、黄鐘・盤渉、貴人（見所）

世阿弥研究会の活動

研究プロジェクト

ヒマラヤ宗教精神の研究

熊谷誠慈（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■研究の背景・目的

2008年の北京オリンピック開催直前、「世界の屋根」と称されるチベットの首都ラサで大規模な騒乱が勃発し、チベット民族と漢民族の間にくすぶり続けるいわゆる「チベット問題」が国際社会において、にわかに脚光を浴びた。わが国のメディアも連日、異例とも言える扱いで、これを大きく取り上げた。また、東日本大震災がわが国を襲った2011年にはヒマラヤの小国ブータンから国王夫妻が来日し、GNH（国民総幸福）政策を標榜する「幸福立国」からの来訪者として、その言動が広く大衆の関心を集めたことは記憶に新しい。このように、昨今わが国にとって、チベットやブータンに代表されるヒマラヤ地域は以前と比べて格段に身近なものとなり、その動向に関して、諸種のメディアを通じてたくさんの情報が流入してくるようになった。しかし、それらの大部分は、ヒマラヤ地域が現代の国際社会においてどのような政治性を持っているか、という点にのみ焦点を当てたものに限られており、長い歴史の中ではぐくまれ、人々の暮らしや生き方の中に深く根を下ろした同地域の文化的特性、とりわけその精神性についての理解はまだまだ十分とはいえないのが現状である。

以上のような背景から、われわれは本プロジェクトにおいて、ヒマラヤ地域の文化、精神を象徴する位置を占める「チベット仏教」と「ボン教」という2大宗教を中心として、同地域の宗教・伝統的精神の包括的な解明に乗り出すことを決めた。なお、「チベット仏教」は7世紀以後、ブータン、ネパール、シッキム、ラダック、北東インド、中国西部、さらにはモンゴルにまで広汎に伝播し、それぞれの地域で土着化が進んで、地域色豊かな独自の展開を遂げている。一方、「ボン教」について

はいまだ謎に包まれている部分が多く、詳しくは今後の調査を待たねばならないが、これらの地域の大半で、仏教ほどの浸透度はないものの、ほぼ同様の広がりを見せているのではないかと予想される。したがって、本研究は、これら2大宗教が広大な土地を跨いでどのように伝播したか、そして、どのように地域化していったかという問題にも取り組むことによって、広くヒマラヤ文化圏全般における宗教的精神の普遍性・共通性と、地域性・個別性の双方を理解することを目指す。

■研究の方法・内容

本プロジェクトでは、「ヒマラヤ宗教研究会」を定期開催し、「仏教」と「ボン教」というヒマラヤ文化圏の2大宗教を中心として、同地域における宗教的精神のありようを、宗教哲学、歴史学、文化人類学などの視点を通して、多角的・包括的に検証していく。

「仏教」については、1.「チベット仏教」、2.「モンゴル仏教」、3.「ブータン仏教」、4.「その他ヒマラヤ地域の仏教」と区分し、「ボン教」については、1.「チベットのボン教」、2.「ブータンのボン教」、3.「その他ヒマラヤ地域のボン教」と区分する。

このうち、「ブータン仏教」と「ブータンのボン教」の研究については、別途推進している「ブータン仏教研究プロジェクト」と連動させる。

また、これらの領域すべてを横断するヒマラヤ宗教全般に関する研究についても、別途推進中の「思想と科学との対話を通じたこころ観の再構築」プロジェクトと連携する。

■研究会・ワークショップ

[イベント名] 第1回京都大学ヒマラヤ宗教研究会

[日時] 2013年9月13日（金）17:00～

18:30

[場所] 京都大学こころの未来研究センター225会議室

[司会者] 熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

[概要]

ヒマラヤ地域には、チベット仏教やヒンドゥー教、ボン教、さらには地域ごとの土着信仰など、さまざまな形の宗教が存在しているが、その文化的影響はインドから中国、遠くモンゴルにまで及ぶ。しかしながら、通常、これらの研究は地域ごと、分野ごとに細かく棲み分けて行われるため、同じヒマラヤ地域の宗教文化を対象とする研究者でありながら、相互に情報を交換したり、共有したりするのは難しいのが現状である。

そこで、このたび、こころの未来研究センターは、ヒマラヤ地域の宗教およびその文化に関する研究に取り組む若手研究者が集うことによって、互いの研究情報を交換し、若手間の交流を活性化することによって、日ごろ研究者の間を隔てている垣根を取り払い、ヒマラヤ圏の宗教文化研究を1つの全体として底上げすることを目指して、「京都大学ヒマラヤ宗教研究会」を立ち上げた。

第1回の研究会では、国内の若手研究者が集まって当研究会の方針を確定するとともに、今後のヒマラヤ宗教研究のありかたや方向性について議論を交わした。今後、定期的に研究会を開催するとともに、メーリングリストやSNSなどを用いて、参加者各自の研究の内容やその進捗具合について、適宜情報交換を行い、参加者間の連携を密接なものにしていく予定である。

他者理解に関わる認知・感情機能：直接対面 vs. 映像対面での表情表出

吉川左紀子(こころの未来研究センター教授) + 上田祥行(同センター特定助教)

■研究目的

メディア技術の進歩によって、人間のコミュニケーションのあり方は多様化している。インターネット電話サービスでは、モニタ映像を介して間接対面によるオンラインのやりとりが可能となり、遠方にいる他者とのコミュニケーションを促進するツールとして活用されている。通信速度の高速化で映像や音声のタイムラグもほとんど気にならなくなり、映像を介した対面コミュニケーション(映像対面)と直接対面の差異はほとんどなくなっているかのようである。しかし、Ponkanenら(2008)は、対面で直接他者を見た場合とマネキンを見た場合の情動経験の差異が、モニタ画像で他者を見たときとマネキンを見たときの比較ではみられないことを報告しており、直接対面と映像対面でのコミュニケーションの特性についてはさらに詳細な比較検討が必要である。

本研究では、「他者が発する、ポジティブ、ネガティブ、中性のいずれかの情動価をもつ発話を聞く」という課題場面を設定し、直接対面と映像対面において聞き手の情動経験と表情表出にどのような差異がみられるかを検討した。

■研究方法

発話者は2名の女子大学生、実験参加者は57名の学生・院生であった。実験は2つの実験室で行われ、直接対面条件(図1a)では実験室Aに発話者と実験参加者が入室し、映像対面条件(図1b)では実験室Aに実験参加者、実験室Bに発話者が入室して実施された。実験室AとBの見取り図を図1cに示した。発話者は、ポジティブ、ネガティブ、中性の意味内容を含む短いメッセージ(楽しいです、イライラする、眠いです、など)およびエピソード(発

話時間:約40秒)を実験参加者に向かって語り、そのときの実験参加者の表情を机上の小型カメラで撮影した。実験参加者は、発話ごとに情動経験(不快と覚醒度(覚醒—不覚醒)の2次元で評価した。発話とそれに対する評価が終了したのち、発話者に対する印象評価と実験状況に対する質問を行った。

■研究結果と考察

紙面の都合で主要な結果の要点のみを記載する。発話を聞いたときの情動経験、発話者の印象評価、実験状況に対する評価については、いずれも直接対面条件と映像対面条件間に差はみられなかった。発話を聞いているときの実験協力者の表情については、各試行ごとの映像クリップを作成して、2名の評価者が実験協力者の表情の情動価(とてもネガティブ—とてもポジティブの5段階)を評価した。短いメッセージを聞いているときの表情については、直接対面条件と映像対面条件間に有意な差異はみられなかった。一方、エピソードを聞いているときの実験参加者の表情については、エピソードの情動の種類と対面条件の交互作用が有意となり、ポジティブなエピソードを聞いているときに、映像対面条件に比べ、直接対面条件でよりポジティブな表情表出がみられることが分かった。

情動的な内容の発話

を聞くという状況において、主観的な情動経験や発話者に対する印象評価、状況の評価といった意識的な判断では直接対面と映像対面に違いはみられなかった。違いが見られたのは、ポジティブな内容のエピソードを聞いているときの表情表出であった。楽しい話題の話の聞いているときに、直接対面のほうがよりポジティブな表情になるのである。楽しいエピソードを語る語り手の情動が直接対面ではよりストレートに伝わり、より強い共感が生じて、聞き手の表情表出に影響したのかもしれない。共感のプロセスが対面条件によってどのように異なるのかをより詳細に検討することが今後の課題である。(本研究は、石田彩夏、布井雅人との共同研究である)。

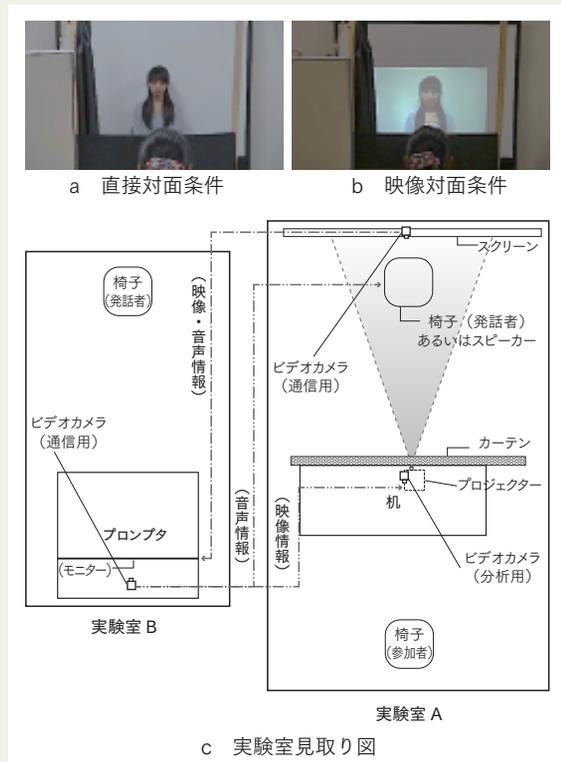


図1 実験状況
直接対面条件では実験室Aで実験参加者と発話者が対面した。映像対面条件では、実験室Aと実験室Bが用いられ、実験参加者は実験室Aに、発話者は実験室Bにいる状態でスクリーン越しに対面した。

研究プロジェクト

コミュニケーションの言語・文化的基盤

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

科学研究費補助金基盤研究B（研究代表者：名古屋大学唐沢稜教授）の分担研究として実施した本研究は、コミュニケーションにおける言語の持つ影響ならびに文化的習慣や価値観がもたらす影響の双方を検証し、文化心理学と言語学の共同的知見の確立を狙うことを目的にしていた。特に本研究では日本における援助にまつわる言語表現との関連を検討した。

■研究の背景

これまでの文化心理学的知見により、援助場面においては、北米では互いの行動に際しての相手の意図の確認が重視されるのに対し、日本では状況要因に着目し、相手の意図を自発的に読み取って行動することが必要とされることが示されてきた（Kim et al., 2006; 内田・北山, 2001）。また、アジア圏では受け手が自ら援助をリクエストする頻度が北米より低く、むしろ援助者が困っている相手の状況を察して申し出を行うことが頻繁に見られるとされている。言語表現においても文化差があることが知られている。たとえば吉成（2007）によると、援助者の表現において、英語話者では“Do you want to use this pen?”のように相手の意図や願望を確認する表現の出現頻度が高いが、日本語では特に目上に対してこのような表現を用いることはタブー視され、実際に出現頻度も低く、かわりに「ペン貸しましょうか」という申し出の表現や「ペン使いますか」のような援助者の行為（ペンの貸与）を前提とした行為質問の表現の使用がみられる。そこで本研究では援助場面における言語使用ならびにその際の状況や文化学習の程度の関連を検証することとした。

研究1)「援助のやりとりに関する意図確認：確認的発言が及ぼす影響」の研究を実施した。特に援助のやりとりにおける言語表現において、援助者からの申し出と被援助者からの依頼のどちらがよく行われるか、さらにはその際「明示的」と「暗黙」のいずれの表現が用いられるかを検討した。調査参加者には援助をした場面（もしくはされた場面）について記憶再生の自由記述を行ってもらい、その際の認知・感情の評定をもとめた。具体的には援助場面の描写とそこでなされた会話を再生記述してもらい、その後、援助のやりとり後の関係性や感情、関係の親しさなどを評定してもらった。これにより、言語表現が関係性の認知に与える影響を検証することが可能になる。平成25年度にはイギリスのプリマス大学で調査を実施した。今後、平成24年度までに収集された日本語話者でのデータとの比較を進める予定である。

研究2) 表現そのものについての言語学的検証

援助にまつわる会話表現を上記調査において収集し、日本語における援助表現の特徴を検討する。上記2つの知見をあわせて、日本語の表現と関係性の認知との関連を検証した。特に「テモラウ」「テクレル」表現とそれにまつわる認知について分析を進めた。その結果、自分の援助受け取り経験について、再生された援助者と自分との間の会話内で「与え手からの申し出（～しましょうか）」があった場合には、その状況を「テクレル」を用いて記述する傾向が見られた（たとえば「Aさんが私に傘を貸してくれた」など）。2つ目の調査ではテクレルあるいはテモラウで記述された状況文（たとえば「AさんがBさんに傘を貸してあげました」）を呈示し、その状況における援助の与

え手と受け手の会話を想像して記述してもらった。するとテクレルを含む状況文に対しては、与え手からの申し出表現を会話内に含む傾向が見られたが、テモラウを含む状況文に対しては会話内の依頼表現・申し出表現双方が見られた。

研究3) 研究1で収集した援助場面（傘がない人に傘を貸す、荷物が重そうな人を手伝うなど）を日本語母語話者ならびに日本語学習中の留学生に提示し、想定される会話を書き込んでもらう調査を実施した。現在分析中であるが、援助者からの申し出表現は日本語母語話者でより多い傾向が見られており、これらの表現と文化への適応の傾向を検証する予定である。

■対外活動ならびに成果の発表

これまでの調査結果は、平成25年に行われた日本心理学会にて発表され、現在は論文執筆を行っている。

内田由紀子・吉成祐子・京野千穂「言語と文化援助行動における言語表現の検証」“ワークショップ：言語と心のインターフェイス”、日本社会心理学会第54回大会（沖縄国際大学、宜野湾市）2013.11.3.

吉成祐子・内田由紀子・京野千穂「援助行動における言語表現：第2言語習得の観点から」“ワークショップ：言語と心のインターフェイス”、日本社会心理学会第54回大会（沖縄国際大学、宜野湾市）2013.11.3.

京野千穂・内田由紀子・吉成祐子「授受表現テモラウ・テクレルが示す話者の感情と認知」“ワークショップ：言語と心のインターフェイス”、日本社会心理学会第54回大会（沖縄国際大学、宜野湾市）2013.11.3.

癒し空間の比較研究 生態智の拠点としての聖地文化

— ところ・場所・癒しの研究

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)

■癒し空間の特色

「古事記」や「日本書紀」といった神話、各地方に伝わっている民話のなかで語られている日本各地の「聖地」を調査することによって、「場所に宿るところ」の諸相を明らかにしてきた。西田哲学の「場」の理論や「拡張された心」理論が述べるように、「こころ」は実体的なものでもなければ人間の身体に内属するものでもない。それはむしろモノや場所との関わりの中で常に移ろいながら想起され続けるものである。本研究では、寺社や聖地などの「癒し空間」に加え、負の感情を昇華させる装置としての「祭り」などに蓄積されている「場所の記憶」や「場所の力」を、宗教学的・哲学的・芸術的・社会的観点から多角的に分析し、「場所」において立ち現れる「こころ」の諸相を呈示し、記憶・感情・崇高さを想起させる場の特色とその心的メカニズムを突き止める。その先に、現代社会の「こころ」をめぐる諸問題を打破する突破口を模索していく。

■ 杵岐・対馬調査ほか調査概要

平成25年度は、5回のフィールド調査、1回のシンポジウムを行った。調査については以下のとおりである。

- 1) 杵岐・対馬調査：2013年5月2日～6日
- 2) 第6回東北被災地追跡調査：2013年8月30日～9月3日
- 3) 出雲大社～天橋立（山陰の聖地調査）：11月3日～4日と7日
- 4) 第3回羽黒修験道「冬の峰入り・松例祭」調査：2013年12月30日～1月1日
- 5) 天河大辨財天社例大祭・鬼の宿・節分祭・立春祭調査：2014年2月2日～4日

対馬と杵岐に伝わる延喜式内社とシャーマニズムの特異性を明らかにする

杵岐・対馬調査		
5/2	対馬	住吉神社 多久頭魂神社 高御魂神社
5/3	対馬	太祝詞神社 敷島神社 阿麻氏留神社 和多都美神社 海神社 天神多久頭魂神社 能理刀神社 霹靂神社 嶋大國魂神社 嚴原の八幡宮神社
5/4	対馬	宗家菩提寺万松院 嚴原八幡宮神社
	杵岐	市寸島神社
5/5	杵岐	国津意加美神社 稲荷神社 聖母宮 掛木古墳玄室 阿多弥神社 前方後円墳双六古墳 住吉神社 天手長男神社 塞神社
5/6	杵岐	国津神社 (鬼の足跡) 国片主神社 月読神社 興神社 高御祖神社

ために、神社を中心とする当地の「聖地」を調査した。杵岐・対馬は「卜部」による「古い」の拠点であり、京都大学東隣の吉田神社とも「卜部一族」を介してつながっている。卜部は、もともと亀の甲羅を焼いて吉凶を占う「亀卜」に従事する品部で、中でも、伊豆と杵岐・対馬の卜部は特別に取り立てられて宮中神祇官の官人となった。全国の延喜式内社は、3132座、2861社あるが、対馬国には29座（大6座・小23座）、杵岐国には24座（大7座、小

17座）もある。畿内を除く他の地域と比べても圧倒的な数を誇る杵岐・対馬は、日本古代の信仰を探るための重要な拠点となると考えられる。調査で訪れた神社は左表のとおりである。

■久高島研究



癒し空間としての久高島の歴史研究、地理研究、民俗史的研究を通じて、久高島という聖地のありようを探求した。夏には久高島へのフィールド調査を行い、今日の祭りの様子に関するインタビュー調査、参与観察を行う。ポケゼミ「久高島研究」の参加学生とともに、島の聖地を歩き、また島民たちにインタビューすることによって、「神の島久高島」の来歴と現状を深く掘り下げることができた。

また、「久高大運動会」では、前日と当日の朝の準備から手伝い、運動会にも最初の行進・開会式から最後の閉会式までフル参加し、リレーや障害物競走やフォークダンスや綱引きなど、一般参加できる競技には積極的に出場しながら、島における運動会の位置づけ・島民たちの行事に対する態度などを関与的に調査した。

参考文献

鎌田東二『歌と宗教——歌うこと。そして祈ること』ポプラ新書、ポプラ社、2014年。
鎌田東二編『究極 日本の聖地』KADOKAWA、2014年。

研究プロジェクト

子どもの発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■子どもの発達障害とプレイセラピー：これまでの実践と成果

学校や医療機関などで、発達障害は現在も主要な問題のひとつとなっている。こうした現場では、当人や家族の特性理解を進め、環境調整をし、適応的行動や具体的スキルの学習を目指すといったような、教育的・訓練的な発想が強くなっている。発達障害の子どもはちょっとしたコツがわからずにつまずいていることも多いため、このようなサポートの有効性が強調されることも多いであろう。

一方、本プロジェクトは、これまで臨床事例研究として専門家に向けてのみ示されてきたプレイセラピーの有効性を定量的視点からも示し、その意義を広く発信することを目指している。プレイセラピーとは、守られた枠組みの中で子どもが自由に遊ぶことを基本としている。子どもの自発的な遊びのなかにその子の心理的なテーマが現れ、専門的視点をもったセラピストと共に、子どもは遊びながらそれに取り組んでいく。こうしたプロセスは、環境調整などに比して時間を要し、直接的な効果は少ないという印象があるかもしれない。しかし、本研究のこれまでの成果からは、子どもの「心理的な」変化を目指しているはずのプレイセラピーにおいて、6カ月間のセラピーの間に発達指数が上昇したり、領域間のバランスがよくなるケースがみられることが明らかになってきている。変化があった事例について詳しく検討してみると、子どもの「身体軸」が確立したり、セラピストとの関係のなかで「自他の境界」が明確になったりと、遊びのなかに子どもの発達の能力が伸びる素地が確かに育っていることが示唆されていた（井芹ら、2014）。

■発達障害に「見える」子どもたち

ところが、実際にセラピーを開始してみると、発達障害という診断を受けた子どもであっても、そうとは見立てられない子どもが多いことがわかってきた。4割にものぼったこれらの事例を過剰診断や診断ミスと考えることも可能だが、実際、何らかの「発達障害らしさ」を感じさせる行動や言動が根拠となっている場合も多いのではないかとも思われた。加えて、これらの事例のなかには保護者に（も）発達障害の傾向が認められる事例が含まれていることが明らかとなってきた。

そこで、本プロジェクトでは、センター内のプレイルームで行った、子どもへの週1回のプレイセラピーおよび月1回の保護者面接について、親子それぞれの見立てを整理し、総合的な事例検討を試みることにした。以下にその概要を示したい。

■発達障害の子どもと家族関係

本来、保護者面接とは、保護者の抱える不安を受けとめ、親が子どもや自身を見つめ振り返る場として設定される。「発達障害の子×非・発達障害の保護者」の事例では、保護者が日常でも細やかに子どもを観察し、関わることでセラピーと相補的に作用するプロセスがみとれ、元来想定していたセラピーの体制が機能することが多い。

一方、「非・発達障害の子×発達障害傾向の保護者」の事例では、子どもの行動や成長、変化などを保護者が「わからない」と感じ、理解できないものとして語り、対応していることが、子どもを「発達障害的」に見せている側面がみられた。このようなケースでは、保護者面接のなかで担当セラピストと共に子どもの変化を捉えることで混乱が収まり、親子関係が変化する展開がみられた。また別の事例では、家族全

体が区切りのないひとつの塊のような状態であった。プレイセラピーでも子どもははじめ、際限のない遊びを繰り返していたが、セラピストとの違いを確認したり、自分の作品を完成させるなどの遊びを通じて、言葉や身体軸が安定した。また、こうした子どもの変化が家族全体のあり方をも変化させているようであった。

これらの検討から、家族内の関係がうまく機能していないために子どもが発達障害の診断を受けているケースがみられることが明らかになった。このような事例では、家の中で閉じていたユニークな対人様式や関係性が外部に向けてあらわになることが重要な契機となりうる。学校や地域の行事などで社会に参加してはいても、心理学的にみて家が外部と接触していないことはしばしばみられ、そのような場合には、子どもが他者や環境と関わる能力が十分に伸びないままにとどまってしまう可能性があるといえよう。

本プロジェクトでは発達障害の子どもも、診断は受けているが本来的には発達障害でない子どももどちらも受け入れている。プレイセラピーを通じて、その双方に展開や変化がみられるのが興味深い。ただし、ここでは発達障害の問題を親子いずれかに還元することが重要なのではない。子どもを発達障害に見せていた問題がどのように生じているのかを明らかにすることで、家族成員それぞれの本来的な力がそのまま生かされ、うまく関わり合うようになっていくことが重要である。

本研究は研究自体が実践であり、援助となっている。プレイセラピーを希望される方はセンターのウェブサイト「センターからの募集」欄をご覧ください。

発達障害の学習支援・コミュニケーション支援

田村綾菜 (昭和女子大学人間社会学部助教) + 小川詩乃 (京都大学霊長類研究所大学院)

+ 吉川左紀子 (こころの未来研究センター教授)

■支援のやり方

本研究プロジェクトでは、2007年11月から発達障害の子どもの対象として継続的な学習支援・コミュニケーション支援に取り組んできた。プロジェクト開始当初は、7名の子どもの保護者を対象に週1回のペースで、読み書きを中心とした学習指導をすることにより、支援のノウハウを蓄積した。現在では、約40名の子どもの保護者を対象に、1名あたり2カ月に1回程度の頻度で個別の学習支援・コミュニケーション支援を行っている。

■アンケートの結果

研究に協力してくれた子どもの保護者を対象としたアンケートの結果 (田村ら, 2014) では、「漢字が覚えやすくなった」「文章を書く時の間違いが減った」といった学習に関する意見や、「国語の授業への苦手意識が減ったように思う」「初めてのことで、やってみようと思えるようになった」といった学習への動機づけに関する意見があった。また「学校の集団生活に頑張りが過ぎて中、ここではゆっくり学習できる。ほめていただいてやる気につながる」「すごくほめてくださるので、帰る時は本人がすごく生き生きして楽しそう」といった意見のように、支援頻度は低くても、落ち着いた一対一の場面で子どもと向き合う時間そのものに意味があると考えられた。さらに「漢字の習得などにどのような手助けをしたら良いか分かった」「見せて教えれば、理解が進むと実感した」「いろいろ説明してもらって、できないと思っていたことができていたなど、少し親として安心できることが増えた」といった意見のように、保護者との関わりが効果的な支援につながると実感している。

■支援につなげるための実験的な研究の1例

また、上述したような個々の特徴に合わせた支援により、研究協力者と支援を通したラポール (信頼関係) 形成ができ、支援につなげるための実験的な研究を行うこともできるようになった。以下に、その1例を紹介する。

物語文を理解するためには、複数の登場人物がさまざまな出来事に直面し、いろいろな気持ちや考えを抱えながら、問題の解決を試みるといった複雑な内容を思い浮かべる必要がある。これまでの研究から、物語を理解する力と、他者の視点に立って他者の気持ちや考えを認識する力 (視点取得能力) には強い関連があることが示されている。共同研究員の常深浩平らは、視点取得が苦手とされる自閉症スペクトラム障害のある小学生を対象に、物語教材を通した視点取得能力育成の試みを行った (Tsunemi, et al., 2014)。

夏休み中の1週間程度、独自に作成した8つの物語を家で読むという宿題に取り組んでもらった。そして、その宿題に取り組む前後で、視点取得課題 (図1) の得点に変化がみられるかどうかを検討した。宿題に取り組んだ子どもたちと、取り組んでいない子どもたちの得点の変化を比較した結果、宿題に取り組んだ場合に得点の上昇が子どもが多いことがわかった。このことから、物語を読むことを通して、視点取得能力を育むことができる可能性が示された。さらに、約4カ月後に再び視点取得課題を実施したところ、同様の結果が得られ、物語を読んだ直後だけでなく、ある程度効果が持続することも確認された。なお、夏休みに宿題に取り組まなかった子どもたちには、冬休み以降に取り組んでもらった。しかし、物語を読む行為のどのような部分が視点取得能力の向上につながった



図1 視点取得課題の模式図 (荒木, 1988を参考に作成)

「お父さんと木登りをしないと約束した女の子が、木から降りられなくなってしまった子猫を助けてと頼まれたら、どうしたら良いのだろうか?」といった質問をし、自由回答形式で答えてもらう。

のかについてはわかっておらず、今後検討していく必要がある。

今後多様な視点を取り入れて、継続的な支援を実施するとともに、発達障害の実態に即した研究を展開してゆく計画である。

引用文献

- 荒木紀幸 (1988) 役割取得検査マニュアル
トーヨーフィジカル
田村綾菜・伊藤祐康・小川詩乃・吉川左紀子 (2014) 京都大学こころの未来研究センターにおける「発達障害の学習支援・コミュニケーション支援」プロジェクトの取り組み, 第55回日本児童青年精神医学会総会抄録集, p.243
Kohei Tsunemi, Ayana Tamura, Shino Ogawa, Tomoko Isomura, Hiroyasu Ito, Misako Ida & Nobuo Masataka (2014) "Intensive exposure to narrative in story books as a possibly effective treatment of social perspective-taking in schoolchildren with autism" *Frontiers in Psychology*, 5:2, doi: 10.3389/fpsyg.2014.00002

研究プロジェクト

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

毎年3月の恒例行事となっているこころの科学集中レクチャーであるが、2013年度のテーマは「文化、進化と心：人間すなわち文化的生物の不思議に迫る」。2014年3月4日から6日の3日間にわたって実施された。講師陣はこころの未来研究センター特任教授で本レクチャーのコーディネータである北山忍先生、生理心理学、認知科学がご専門の大平英樹先生（名古屋大学）、文化心理学がご専門の増田貴彦先生（カナダ・アルバータ大学）である。各講義の後のディスカッションのコーディネータは内田由紀子准教授が務めた。

■講義の概要

3日間の講義概要は下記のとおりである。

講義1 文化脳神経科学の視点（北山忍）

社会・文化と心理プロセスは脳を媒介として双方向的、かつダイナミックに影響し合っている。社会・文化プロセスは文化課題（cultural task）に集約され、文化課題は脳の可塑的変化の媒体となり、可塑的に変化した脳は文化課題の自発的な遂行を促し、結果として生物的適応を促進する、という考え方を紹介して、脳の可塑的変化、脳レベルでの文化の効果などに関する最新の研究を概観する。

講義2 社会・文化、生物的健康、長寿：炎症反応を手がかりに（北山忍）

炎症反応は細菌やウイルス感染等によって生体が起こす発赤、むくみ、発熱などの反応で、慢性的な社会的ストレスが恒常的な炎症反応を誘発してさまざまな疾病の原因となることが知られている。炎症反応を示す生体指標を予測する社会的要因（社会階層、個人の価値観や幸福観等）やその効果を調整する因子の特定は、疾病を未然に防

ぎ、質の高い長寿を達成するために不可欠である。この観点から行われている比較文化的疫学研究成果をもとに、健康にまつわるダイナミックな社会・生物現象を考察する。

講義3 意思決定を支える脳と身体の機能的相関（大平英樹）

不確実性が高いときには、しばしば直感や感情に基づいた意思決定が行われるが、そこでは脳と身体の双方向的な影響が選択を導いていると考えられる。神経画像と生理反応の同時測定により、そのメカニズムを探求する。

講義4 身体化された正義（大平英樹）

正義（justice）の心理学的基盤として、人間が進化的に発達させた共感を考える立場が優勢であった。しかし、近年経済学や思想において話題になっているジョセフ・ヒースの『ルールに従う』では、人間が他者と相互作用する場合に、何らかの原理や規則を創発させてしまう特性が基盤にあると主張している。こうした議論をもとに、正義がどのように、どの程度まで、進化生物学的基盤を有するのかを考える。

講義5 文化と認知：発達科学との協力に向けて（増田貴彦）

近年、文化心理学者が行っている発達研究を概観し、今後の文化研究の発展に発達科学がどのように関わってくるのかについて議論する。その中で、理論・方法のそれぞれの面において、協力関係を促進する要因、阻害する要因などを洗い出していく。

講義6 文化と表現：文化的表象研究から分かること（増田貴彦）

近年、文化心理学者が行っているアート・デザイン・広告などの文化的表象の研究を概観し、こうした研究が文化とこころの関係を探るうえでどのような役割を担うのかについて議論する。

■心の科学集中レクチャーのもつインパクト：受講生の感想から

3日間の集中レクチャーでは、各日を担当する講師による90分の講義が午前と午後であり、それぞれの講義の後には、3名の講師全員による60分のディスカッションと受講生による質疑が加わるという密度の濃い内容になっている。受講者は、京大の学生・院生・研究者が18名、他大学の学生・院生・研究者が7名で、センターのスタッフも加わり、30名がレクチャーに参加した。

受講生のアンケートには、

「最前線で活躍される先生がたの熱気ある講義・議論を目にすることができ、非常に面白い3日間だった」

「それぞれの先生のお話は三者三様で、しかも日を追うにしたがってそれらのお話を関連させるように議論が進んでいくのが大変面白かったです」

「先生方のディスカッションでは鋭く建設的な意見が飛び交い、新たなアイデアが誕生していくのを目の当たりにできたのもすばらしい経験でした」

「文化心理学の全体像、そして最先端の研究の関心がどのように推移しているのかについて深く知ることができ、とてもよい機会となった」

など、レクチャーの内容や講師陣のディスカッションから多くの刺激を受ける機会となったことがうかがえた。

心の科学集中レクチャーは、センターが実施する教育プロジェクトの柱として、今後も継続する予定である。

東日本大震災関連プロジェクト——こころの再生に向けて

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■こころの再生に向けて

平成23年（2011）3月11日、東日本大震災という、未曾有の事態が発生した。地震・津波・原子力発電所の事故という3つの要素による複合的かつ甚大な影響をもたらす災害を経験したことで、日本における価値観、社会関係のあり方は、被災地ではもちろんのこと、その他の地域においても変化したと考えられる。

本研究プロジェクトでは、東日本大震災関連プロジェクトとして、宗教学・民俗学・心理学のアプローチからこころの再生に向けての取り組みを行う。

■本プロジェクトのアプローチ

宗教学・民俗学のアプローチとしては、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、東北大学の鈴木岩弓氏が事務局の「心の相談室」、島菌進氏が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲場圭信氏が共同代表の「宗教者災害支援ネットワーク」などとの連携を保ちながら、①伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生、③脱原発社会の社会デザイン・世直しのありようを模索していく。その際、宗教的「世直し」思想と実践事例の解明とともに、21世紀文明のあり方、その中での日本文明の位置とあり方、そこにおける伝統文化（祭り、芸能、芸道、宗教など）の継承と活かし方、自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再発見・再評価と再構築、聖地など安らぎや浄化をもたらす「癒し空間」の活かし方、などに焦点を当てつつ考察していく。

■フィールド調査

2013年度は、2回のフィールド調査

を行った（5月、8－9月）。以下に集約されるように、被災地に鎮座している神社を調査する中で、東北地方の宗教的土壌の持つ意味が浮き彫りになりつつある。

①東北（陸奥国）延喜式内社100社のうち石巻市や女川町のある牡鹿半島に10社も密集している。これは地震や津波などの自然災害の多発に関係している。
②東北被災地の津波浸水線上に多くの神社があり、避難所になっているため、安全・安全装置として機能している。
③伊豆国に92座の延喜式内社があることの意味も、地震や火山の噴火などの自然災害と密接な関係があると推測される。

④神楽や虎舞・獅子舞などの芸能が地域復興の活力や絆・紐帯となっている。
⑤日本を代表する日本三大祭りの1つに挙げられている祇園祭の発生は、貞観地震（貞観11 [869] 年）を直接的な契機としている。

⑥日本の「癒し空間」の具体例といえる延喜式内社が、自然災害の襲来に対する防災・安心・安全装置や拠点でもあった。

⑦東日本大震災の被災地区の延喜式内社との位置関係から、主要古社が海岸線に近い河岸段丘に立地している確率が高いことが分かる。日本列島に生まれた「聖地・霊場」が自然の恵みに深く依拠し、それに対する敬虔なる畏怖・畏敬の念をもって維持されてきたことの地質学的・生態学的・自然地理学的意味が再確認される。

⑧延喜式内社などの各国主要古社が縄文遺跡など先史時代の遺跡および古代遺跡と近接し、縄文時代からの信仰と切り離せない。

以上の仮説をふまえると、「聖地」と呼ばれる場所では、種々の自然災害との浅からぬ関わりを読み解くことができる。東日本大震災の被害と復興もま

た、東北地方の宗教的土壌という観点からとらえ直すことで、「こころの再生」へと向かう1つの道筋が見えてくるといえよう。

■フォーラム

研究会の成果報告として、2度のシンポジウム「被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究」雄勝プロジェクト・シンポジウム「Symposium in Ishinomaki-revive」（2013年8月31日）、および「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」第4回シンポジウム（2013年7月9日）を行った。

7月9日のシンポジウムでは「震災と語り」をテーマとして、4名から基調報告を受け、震災後の被災地における「幽霊の語り」「喪失の語り」「グリーンケア」「スピリチュアルケア」、そこに動いている「こころ」と「こころの再生」について議論を行った。高橋原氏と鈴木岩弓氏は「震災後の幽霊の語り」と民俗のテーマのもと、「幽霊」の目撃体験、「怪異現象」の事例の数々と伝達パターンなどについて事例紹介した。やまだようこ氏が「喪失の語り——負の体験から立ち直るナラティブ」というテーマのもと、被災地での語りの実例を紹介し、語りを生きる力へとつなげていくプロセスをていねいに紹介した。島菌進氏は「震災とグリーンケアの語り——『悲嘆』に寄り添い生きる力を引き出す」というテーマで、グリーンケアの国内での全体的な動向と、自身が所長に就任した上智大学グリーンケア研究所の大震災後における取り組みを紹介し、活発な議論を喚起した。

高橋氏の報告にもあったように、今後は、医師、社会福祉士、臨床心理士、宗教者、それぞれのアプローチから、人間を「全体」として捉えた対処法を見出すことが重要となる。

研究プロジェクト

地域の幸福プロジェクト

内田由紀子(こころの未来研究センター准教授) + 福島慎太郎(同センター上廣こころ学研究所部門研究員 現在、青山学院大学総合文化政策学部助教)

日本社会の幸福においては、組織や地域における人々の関係性が主要な役割を果たすことが理論的・実証的に示されている(Uchida & Ogihara, 2012; Hitokoto & Uchida, 2014)。そして、周囲の他者との関係性により実現される幸福は、欧米型の「独立した個人」を前提とした幸福という側面だけではなく、組織や地域などの集団に応じた「集合的な幸福」として捉えることも必要になる。

そこで2013年度は、大きく、1.「農業者グループ・漁業者グループ」「地域コミュニティ」を対象にした質問紙調査研究、2. 特定の「農村コミュニティ」を対象にしたフィールド研究(実践研究)、そして3. 幸福感やつながり(社会関係資本)にかかわる講演等の活動を遂行した。以下に、各々の概要を記す。

■ 1. 質問紙調査研究

①農業者グループ・漁業者グループに対する質問紙調査

近畿・中国・四国地方を対象として、農業者ならびに漁業者に対する質問紙調査を実施した。分析の結果、メンバー同士の信頼や意見に対する寛容に代表される「ヨコのつながり」が特徴的である農業者グループのほうが、上下関係や規則の順守といった「タテのつながり」が特徴的である漁業者グループと比べて、グループリーダーの幸福感とメンバーから得られる信頼の関連が強かった。このことから、グループのつながりの形態によって、幸福感の規定要因が異なる可能性があることが示唆された。

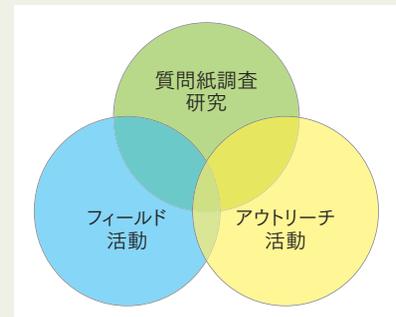
②地域コミュニティ群に対する質問紙調査

同じ日本国内においても、地域の発展や生業の形態に応じて独自の社会関係が形成されており、それぞれの地域

に特有の幸福感が形成されていると考えられる。これまでの議論では「どのような個人が幸福を感じているのか」という個人レベルでの検討が多かったが、地域の中で育まれる幸福感を検討し、「どのような地域で人々の幸福がどのように醸成されているのか、その地域差はあるのか」ということを精査していく必要がある。そこで、近畿・中国・四国地方において無作為に選定した「農村コミュニティ」「漁村コミュニティ」「都市コミュニティ」「その他の地域コミュニティ」の全世帯を対象とした質問紙調査を実施し、個人レベルでの幸福感だけではなく地域レベルでの幸福感を検討している。現在、合計413の地域コミュニティの7,365名から得た回答のデータ入力・整備が終了し、分析段階へと移行している。分析を通して、(1) 生業に応じた人々のつながりの源泉が、個人の生業としての農業・漁業のみではなく地域コミュニティとしての「農村」「漁村」にも存在すること、(2) 地域住民の幸福感はコミュニティを単位として規定されていることを実証的に示していきたい。

■ 2. フィールド研究

近年、水田や畑といった農地の利用・管理の担い手は、集落(農村コミュニティ)だけでなく、農業経営者である個人、あるいは集落とは関連しない大規模企業体へと移行してきている。農村における協力的行動が育まれてきたベースには、「集落」を単位としたコミットメントや愛着、対人関係が一定の役割を果たしてきたと考えられるが、農地管理様式の変化は協力的行動や規範意識の変化にもつながっている可能性がある。水田や畑といった農地は個人の資産であると同時に、農業を成り立たせる農道や用排水路は地域共有の資産である。土地持ち非農家が增大する中



で、緊密な住民のつながりに支えられた「農村(ムラ)」を持続するためには、集落全体で農道・農業用排水路を含んだ共有資源の管理をすることが大きな意味を持つ。

このような中、本研究プロジェクトでは、質問紙調査研究と並行して、農業集落をフィールドとした実践研究を実施してきた。具体的には、2013年度は4月より月に1回のペースで滋賀県世継集落の農業組合役員会に参加し、集落共有資源の維持・管理を含めた「農村コミュニティ」をどのようにして継承していくか、という議題に関する体制づくりならびにルール構築を行う意思決定の場に参画した。

2013年11月には、土地持ち非農家を含む集落の全戸に対する意向調査を実施し、収穫祭の実施をはじめとした次年度以降の具体的な実施計画を策定した。

■ 3. 幸福感プロジェクト成果の報告

2013年度は、国際学会発表や学術誌への投稿(Uchida, Ogihara, & Fukushima, in pressなど)を行うとともに、地域コミュニティと連携してワークショップ等を開催してきた。

具体的な活動としては、福島が京都府立図書館におけるワークショップや京都大学主催の研究者と市民の対話の場である「京都大学アカデミックデイ2013」にて発表するなど、積極的に本プロジェクトの成果を市民との対話の中で伝える活動を行っている。

心理療法場面にみられる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究

前川美行 (東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科准教授)

■はじめに

現代社会では、スマホやパソコン、デザイン化された標識等の多様な記号化情報に対する即座の反応が求められる。それは日常的に直接体験や身体感覚を伴わない情報に晒されることであり、便利で豊かな生活のためにはそれらのあふれる情報を使いこなさねばならない。使いこなすことに喜びを感じ埋没する場合も、苦勞しながらの場合も、いずれも知らず知らずのうちに、身体的・認知的・心理的に自分を変化させているのだろう。特に、子どもたちは早くから記号化情報に触れ、情報処理に適した様式を身につけながら成長する。それは、おそらく認知様式や対人交流、身体面に影響を与えていくことであろう。

ところで、近年の心理療法研究でも、高度な情報処理能力に比して貧弱な対人相互交流能力、葛藤の持てなさや共感能力の低さ、イメージ表現の平板化や記号化の問題が指摘されている。そのような特徴は「意識のあり方の変化」や「境界のなさ」等、意識や主体のあり方の視点から考察されている。すなわち、意識や主体の特徴が、対人交流能力やイメージ表現（夢・描画等）に顕著に表れるともいえる。では、実際にどのようにイメージ表現は変化しているのだろうか。

■研究の目的

本研究は、このような記号化情報に対する適応や、意識や主体のあり方の問題を、実際に心理療法において表現されるイメージ表現を分析することにより検証するものである。

イメージ表現の平板化や記号化、境界のなさなどは、自閉症スペクトラムの持つ特性と類似している。それは子どもたちの中に、自閉症スペクトラムが増加していることにも表れている。

翻って考えれば、子どもたちは情報に適応した成長をしているとも考えられ、子どもたちに見られる顕著な変化は、成人における変化の先取りであると考えることができる。すでに、心理療法場面におけるイメージ表現が、従来の内容的理解や心理的成熟度理解の視点のみでは把握しきれない特徴を持つことが臨床の実感として提起され始めていることから明らかである。

さらに、近年の意識・主体のあり方の変化は、急速な情報化に伴って顕著となっただけでなく、長年にわたる潜在的变化が先行していたことが考えられる。つまり、近代からの日本社会がたどった変化、あるいは外的変化に順応しやすい主体のあり方が背景にあることが考えられるのである。

そこで本研究では、特に自閉症スペクトラムと見立てられる成人の心理療法事例の経過を対象にして、イメージ表現の特徴を分析し考察する。「自閉症スペクトラム」の特性は現代の特徴を先鋭化したものであるとの考えに基づいている。

■平成25年度の研究内容と結果

平成25年度は、臨床の実感と先行研究をもとに理論的考察を行い、問題を明確にした。そして、継続中の心理療法自験例から対象を絞り込む作業を行った。事例としては、10年以上の経過を持ち、1つの転換点を経過したと思われる事例を選び、その経過のうち、特に初期10年の変化に注目することにした。それらの継続中の事例に対して、経過に注意しながら、許諾を得る作業を順次行っている。なお、事例は、以下の特徴を持っている。①心理療法開始直後には、成人の自閉症スペクトラムという視点が一般的に乏しく、見立てが難しく、心理的機序の理解が難しい事例であったこと。②非言語的なア

プローチとして、夢・箱庭療法・描画などのイメージ表現を用いて行っていること。

選んだ事例のうち、許諾を得た事例から経過の分析を行っている。

また、近代からの日本社会がたどった変化、あるいは外的変化に順応しやすい主体のあり方に関する論考は以下のように論文にまとめた（「イメージ表現と身体性——伝統的な平面感覚と伝来の視点」、東洋英和女学院大学心理相談室紀要2014, Vol.18, pp.65-75）。その概要を紹介したい。

日本の伝統的あり方として、風景（対象）の中に入り込んで捉える関係が特徴的であると言われているが、論文では「床」すなわち「身を置く場所」、特に足を置く面を意識する特徴に注目した。次に、オギュスタン・ベルクによる「日本の空間は面的である」との論考、山口晃の「日本人は実は平面よりも奥行きを志向してきたのではないか」との指摘を引用して考察を展開した。山口は視点を動かして対象を捉える究極の形として展開図の描画を「自然な表現」と呼んでいるが、展開図の描画は自閉症スペクトラムの描画にも見られる特徴であり、視点移動や多視点構成は日本の特徴であるとともに自閉症的特徴でもあることが考えられた。

以上より、私たちは無意識的な伝統様式を用いて、描いたり解釈したりしていると同時に、意識的には与えられた描画評価基準で判断している可能性を問題として提起した。その矛盾は心理療法におけるイメージ表現描写や理解にも見られることが予想され、学習した判断基準のみによる解釈は、イメージ表現の本来持つ豊かな特性を見落とす危険すら考えられた。26年度には、自閉症的イメージ表現の特徴を事例からさらに検証する予定である。

研究プロジェクト

子どもの発達障害と作業療法

長岡千賀 (追手門学院大学経営学部准教授)

■目的

発達障害を持つ子どもの療育の1つに作業療法がある。この作業療法は、ブランコやジャングルジム、ボールやお手玉などの遊具やおもちゃが備えられた作業療法室で行われることが多い(図1)。作業療法の実践者(セラピスト)は、子どもを思うままに遊具などで遊ばせるのではなく、その子どもにとってほどよい挑戦となる活動を、子どもとの関わりのなかで考え出し、その活動に子どもを導き、活動する子どもを補助したり見守ったりする。子どもは、最初不安を持ちながらもその活動を積極的に遂行し、成功したときに達成感を体験したり自分の新たな技能を見出したりする。

作業療法のセッションが子どもにとって意味のあるものになるよう、セラピストはセッション全体の治療の流れを調節する。しかし、これを円滑に進められるか否かはセラピストの「暗黙知」に依存するため、治療的関わりの質はセラピストの技量によって異なるのが現状である。

そこで本研究では、熟達したセラピスト(以降、熟達者)による子どもとの関わり方の特性を実証研究により明らかにすることを目的とした。作業療法学の研究者と認知心理学の研究者と一緒に研究を進めてきた。



図1 作業療法室

■熟達者と非熟達者の比較:子どもの活動持続時間

熟達者と、まだ経験年数が少ないセラピスト(非熟達者)にはどのような違いがあるだろうか。比較を通じて、熟達したセラピストの関わり方の特性を明らかにすることを、本研究の第1の目的とした。このため、まず発達障害を持つ子ども1名に対して、熟達者が施行したセラピーと非熟達者が施行したセラピーをビデオカメラで収録し、子どもが1つの活動を継続する時間(活動持続時間)などを分析指標として分析を行った(長岡ほか, 2012, 信学技報)。

測定の結果、熟達者のセラピーのほうが非熟達者のセラピーに比べて活動持続時間が長いことが分かった。また、活動と次の活動の切り替えにかかる時間は、熟達者のほうが非熟達者よりも短かった。

さらに、子どもの発話を分析した結果、子どもの独語(他者指向でなく場面に関係ない発話で反復的常同行動の1つ)は、非熟達者との関わりのなかでは発話の約1割を占めたが、熟達者の関わりの際には発されなかったことも分かった。

これらの結果から、熟達者は非熟達者に比べて、子どもが適応的な関わりを積極的にできるような活動を、より早く考え出し導くことができたと推測される。

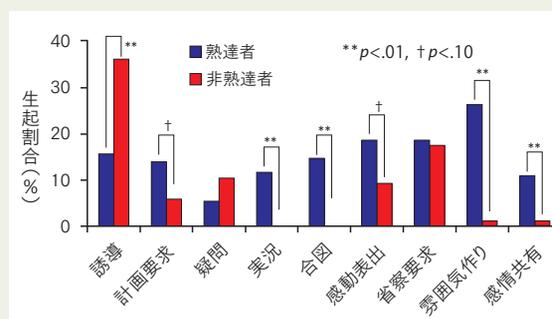


図2 セラピストの言葉がけ (生起割合は全発話に占める各機能の発話数の割合)

■セラピストの言葉がけ

上記の相違をもたらす原因の1つは、セラピストの言葉がけではないだろうか。そうした予測から、今度はセラピストの言葉がけを、発話の機能の観点からコード化した(図2 長岡, 2013, 日心第77回大会抄録集)。

結果、非熟達者は熟達者に比べて、「誘導(次の活動を提案する)」「疑問(子どもの意図を確かめる)」の発話を多くするのに対して、熟達者は非熟達者に比べて「計画要求(次の活動を子どもに選択・判断させる)」の発話が多いことが分かった。また、「実況(継続中の動作と今後の動作を確認する)」や「合図(動作を行うタイミングを示す)」をすることも熟達者の特徴であった。

■今後の展望

上記の結果から、熟達者の特徴は、子どものそのときどきの感覚や気持ち、意図を的確に読み取ることにありと推測している。今後は、他の熟達者のセラピーを分析対象とした場合も同じ結果が得られるかどうか検討する。

実践や養成場面に活かす知見を専門家や一般に発信することにより、より質の高い作業療法的支援が広まり、発達障害に関する正しい知識が一般にも伝わることを目指している。

高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響

積山 薫 (熊本大学文学部教授)

■研究の背景・目的

運動習慣のある高齢者は認知症のリスクが低いことから、近年では複合的な運動介入によって認知機能低下を予防・改善する効果の検証が行われている。しかし、運動介入が神経基盤に及ぼす影響の詳細なメカニズムは、ほとんど報告されていない。一方、本研究の代表者らは先の行動実験により、高齢者において視覚性ワーキングメモリ成績が優れるほど歩行機能が優れることを見出した。そこで、運動が認知機能に及ぼす影響を、視覚性ワーキングメモリ課題中の脳画像を用いて調べることにした。今回のfMRI研究では地域在住高齢者を対象として、1) 視覚性ワーキングメモリ課題中の脳活動で、運動能力と関連する活動を見出す横断的検討、2) 二重課題下での運動を含む介入による認知機能改善効果が、行動・脳活動データ、脳体積にどのような影響を与えるかを調査する縦断的検討の2つを行った。

■方法

シルバー人材センターを通じて募集した、地域在住高齢者52名(平均73.6歳)を対象に実験を行った。脳血管障害、変形性関節症、関節リウマチなど

の身体機能障害を有する者、および顕著な認知機能低下など精神・心理機能低下の認められる者は含まれていなかった。

全体としては、運動介入を基軸とした地域在住高齢者の縦断的研究である(図1)。まず、介入前測定として、参加者の認知機能と運動機能の評価を行った(Pre測定)。認知機能評価には全般的認知機能を測定するMMSE、Wechsler記憶検査、前頭葉機能を測定するTMTなど、5項目を実施した。運動機能評価には、10m単純歩行、目標に沿ったターンを含むTUG歩行検査、下肢筋力測定を中心に6項目を実施した。脳機能画像の測定に、こころの未来研究センターのMRI装置を使用し、ワーキングメモリ課題中の脳活動を撮像した。この課題では、顔または位置の画像を次々と提示し、N個前に見たものと同じかどうか判断してもらうN-back課題を与え、ブロックデザインによる撮像を行った。今回は1-back課題と0-back課題中の脳活動の差分をとることで、ワーキングメモリの脳活動とした。

介入前測定を参加者全員が終えると、層化無作為割り付け法によって参加者を介入群と非介入群の2群に分け、12週間の介入期間に移行した。各群はMMSEによる2名の除外者が出たため、25名ずつであった。介入として、ストレッチング、筋力トレーニング、二重課題下ステップ・トレーニング(座位・立



図2

位)などを行う運動教室を、約90分、週1回実施した(図2)。さらに介入群に対しては、介入期間中、歩数計を携帯してもらい、教室出席時に各週の平均歩数をフィードバックし、活動量の向上を促した。介入期間終了後、非介入群の中で介入を希望する参加者に対しては、同内容の運動教室を開催する。介入期間の終了後、再評価を行った。評価項目はすべて初期評価と同様であった。

■結果と今後の課題

介入前横断研究の行動データにおいては、1-back課題の正答率は、顔と位置のいずれでも、TMTやTUG歩行などと相関があったが10m単純歩行とは相関がなく、TMTやTUG歩行に含まれる前頭葉機能がワーキングメモリと共通することが示唆された。

介入前後で比較する縦断研究の行動データにおいては、介入群で1日の歩数が有意に上昇するとともに、TMT、Wechsler遅延再生課題など多くの認知機能評価項目において、有意な介入効果が認められた。

脳画像については、医師による構造画像の読影を経て、脳病変が認められた2名を除外して解析する。今後は、これらの行動データと脳活動や脳容量のデータとの対応関係を検討していく予定である。

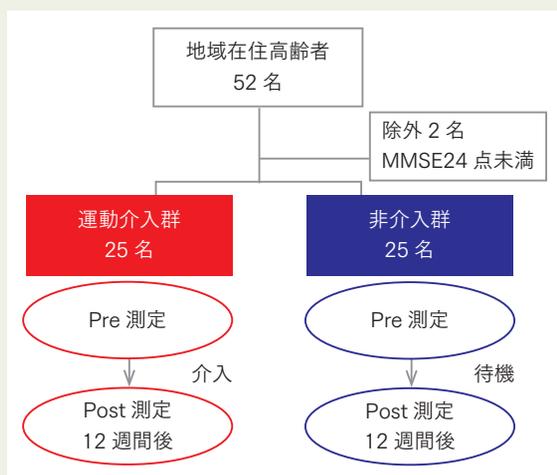


図1

研究プロジェクト

身体と象徴：自然・社会・人体のリズムの総合的研究

木村はるみ（山梨大学大学院教育学研究科准教授）

■研究発表と創作・実演発表

本プロジェクトでは「強弱」をテーマとして時間・空間・人体のリズムについて研究員それぞれの専門の立場から、以下のように研究発表を行った。

主催：比較文明学会関西支部・京都大学こころの未来研究センター共催

開催日：2013年 11月28日

会場：京都大学稲盛財団記念館大会議室

〈研究発表〉

中牧弘允（吹田市博物館館長・国立民族博物館名誉教授）「暦のシステムにみる時間の強弱」

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）「聖地感覚と聖地文化を通して見る空間の強弱」

木村はるみ（山梨大学准教授・京都大学こころの未来研究センター連携員）「舞踊表現に見るこころの強弱：魂振り」と魂しずめ」

山本雅一（作曲家・京都大学こころの未来研究センター共同研究員）「音楽表現における強弱」

〈舞踊作品創作と実演発表〉

「魂振り」と魂鎮め」

創作・実演（オイリュトミー&ダンス）：木村はるみ 古事記朗唱・神道ソング：鎌田東二 作曲：山本雅一 衣装：池田いよ 照明：吉田一弥 協力：奥井遼・足立順子

■時間

「時間の強弱」については中牧が担当し、世界のカレンダーの紹介とともに、C. ギーアツが「順列的」と分析したバリ島の暦や祭儀が暦日の組み合わせにもとづいていること、「満」「空」の2種類の分類などを紹介し、「重要なことの行われる日」と「そうでない日」、いわば「強い」日と「弱い」日が存在することについて述べ、日本における江戸時代の不定時法（季節によって一

時の長さが変わる）、ハレとケ、重日などの事例から「強い日と弱い日」について論じた。また明治の改暦に際しての暦注の廃止には六曜を見出す「おぼけ暦」をつくり、時間の均一化に対しては近年、旧暦にスローライフの精神を見出す人たちが増加していることを報告した。不規則性が持つ時間の強弱への憧れ、抵抗、新しい文明への模索を暦と時間感覚から論じた。

■空間

「空間の強弱」については鎌田が4つの諸相（1. 自然、2. 神話、3. 聖地、4. 儀礼）から研究発表を行った。4枚のプレートの上にある日本列島の特異性、四方の海・山・川・平野に見る空間の強弱と岬・川の合流点・山の入口などの境界線にある神社に象徴される空間の強弱を紹介した。神話については、「古事記」「風土記」を参考として日本列島の男性的空間・女性的空間を示すとともに神霊の到来する神聖空間として厩を挙げている。聖地にみる空間では、風水における東西南北の象徴性、鬼門・裏鬼門、冬至と夏至の方位、伊勢神宮（うつしよ）と出雲大社（かくしよ）の存在、西国三十三か所、大峰吉野熊野修験七十五間廂などを挙げている。儀礼としては、四方拝、天地拝、五体投地、跳躍、バンジージャンプ、胎内潜り、洞窟儀礼、迷路を挙げ、延喜式内社と自然災害の防災拠点としての寺社の機能と役割を論じた。

■身体

身体については「舞踊」と「音楽」から考察し、木村が京都市内大田神社の芸能調査（巫女神楽）の報告と並行しながら、身体表現を通して現象する空間の生成、時間の視覚化、エネルギーの流れをラバン理論・デルサルト理論、シュタイナーのオイリュトミー理論を



木村による発表 独舞「魂振り」と魂鎮め」のパフォーマンス

紹介しつつ舞踊作品創作につなげた。

山本は作曲家の立場から音楽学的強弱表現を研究発表し「魂振り・魂鎮め」の音楽を作曲した。実演は、鎌田の「古事記 神代」の朗唱、山本の作曲した楽曲「魂振り・間奏・魂鎮め」に合わせて、木村が創作独舞「魂振り」と魂鎮め」のパフォーマンスを行い、鎌田の神道ソング「まほろば」の歌唱でまとめた。

後半には高橋悟・奥井遼ならびに参加者とともに理論・実践の両サイドから討議した。話題の焦点は人間の表現行為の「形と力」、そのエネルギー・フローであり、具体的には求心力や遠心力など力の発動する「円形」の形姿の力の再評価・再認識、「反復」、「循環」するリズムの神秘性とその人体による視覚化・聴覚化であった。この課題を次年度に継続し、時間・空間・人体のリズムを見るアスペクトに集団・形・反復・流れ・思想というファクターを導入し、場・時・身による力とシンボル生成を再考する。

被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究 II

大西宏志 (京都造形芸術大学芸術学部教授)

■はじめに

2012年度から継続している本プロジェクトは、初年度に主要な震災関連の芸術実践の調査、および研究員自身による被災地等での芸術実践を行った。これらを通して「被災地のこころときずなの再生」には、芸術家のこころと被災地のこころとの間にどのようなきずなを築き、いかに継続してゆくかが重要な課題であると分かった。2013年度はこれを踏まえて宮城県石巻市を活動の拠点とし、(1) 宮城県石巻市旧雄勝町の予備調査(5月18~20日)、(2) 京都での研究会：現地での活動内容の検討(6月25日)、(3) 旧雄勝町での芸術実践(8月30日)と石巻市でのシンポジウム(8月31日)、および雄勝法印神楽の見学と地元団体からのヒアリング(9月1日)、(4) 芸術実践の記録映像の制作とパリ建築・文化財博物館での上映(10月22日~12月22日)を行った。本稿では、(1)(3)を中心に報告する。

■被災地での活動

(1) 予備調査

『雄勝町史』(雄勝町史編纂委員会編、1966年)、『市町村合併調査事業実施調査報告書』(宮城県総務課、2002年)によると、雄勝町(1941~2005年、現在は石巻市)は、かつて「十五浜村」と呼ばれていた。雄勝地区の12の浜(雄勝浜、明神浜、名振浜、船越浜、大須浜、熊沢浜、桑浜、立浜、大浜、小島浜、水浜、分浜)と周辺の3浜(河北町の釜谷浜、長面浜、尾崎浜)が合わさり1つの行政区になったときに命名された(1889年)。地域の成り立ちやアイデンティティを感じさせるよい名前であり、この地域が浜ごとに集落をつくって暮らしていた浜連合だったことが推測された。

(3) 芸術実践とシンポジウム

旧雄勝町・大浜地区にある石神社・葉山神社(宮司：千葉秀司)で、ストーンサークルセレモニーを実施。石神社は石峰山山頂にある巨石をご神体とする神社で、平安時代に延喜式内社に制定されている。葉山神社はその里宮である。石峰山は山岳修験道の霊場でもあり、鎌田教授を先頭に8名(鎌田、須田、近藤、岡田、上林、斉、ラディック、大西)で登拝し、被災地復興を祈念して雄勝特産の硯石を奉納した。また下山した後、葉山神社の境内に硯石を使ったストーンサークルを奉納した。これは、宗教圏の智恵と方法を芸術実践に取り入れることで、芸術が持つ“こころに働きかける力”を再生する試みであった。

また、石巻開成第II仮設団地にて、「NPOしらうめ」理事長・曹洞宗香積寺住職の川村昭光氏のコーディネートのもと、『Symposium in Ishinomaki revive』と題したシンポジウムを実施した。

第1部

1. 基調講演「こころときずなの再生と地域の伝統文化」鎌田東二
2. 活動報告「硯石を使った雄勝再生プランとYATAIプロジェクト」近藤高弘
3. 活動報告「YATAIプロジェクト」ミュリエル・ラディック
4. 活動報告「宗教とものづくりとアート」岡田修二
5. 活動報告「東北の巨石信仰」須田郡司

第2部

1. 基調講演「失われたコミュニティの復活」川村昭光
2. パネルディスカッション「モデルとして雄勝の再興を考える」
パネリスト：近藤高弘、岡田修二、須田郡司、千葉秀司、大西宏志、ミュリエル・ラディック、鎌田東二(助言者)、川村昭光(司会)



■まとめ

本研究プロジェクトでは自然の恵みと伝統文化・伝統産業を結びつける「祭りの創造」を今後の目標にしたい。そのときのポイントになるのが浜と海上交通である。雄勝周辺の浜は複雑に入り組んだリアス式海岸が特徴である。このことが津波の被害を大きくしたが、変化に富んだ美しい景観を作りだしている。ここには12の浜があり廃絶したものもあるが、それぞれ神社と祭りを持っている。これらをうまくネットワークできれば、四国88ヶ所巡りのような聖地巡礼のスポットになる。かつての海上交通を観光用に復活させ、12の浜の伝統文化を巡るツアーがつかれないか。また、アート・イベントと組み合わせるとアート・ツーリズムを育てることも可能だろう。

自然の景観だけではなく町並みもまた観光資源になる。震災以前は屋根や壁に硯石を使った美しい家があったが今は残っていない。硯石の粉末を塗料や漆喰に混ぜた壁材を開発し漆黒の町並みを実現できれば、これを目当てに観光客がやってくるだろう。低コストで扱いやすい建材を開発して復興住宅の壁や屋根に使うことで、町並みが観光資源に変わる可能性が生まれてくる。

吉川左紀子

論文

Nagaoka, C., Kuwabara, T., Yoshikawa, S., Watabe, M., Komori, M., Oyama, Y., & Hatanaka, C. "Implication of silence in a Japanese psychotherapy context: a preliminary study using quantitative analysis of silence and utterance of a therapist and a client." *Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy*, 2014, 4(2), 147-152.

Nakashima, S.F., Morimoto, Y., Takano, Y., Yoshikawa, S., & Hugenberg, K. "Faces in the dark: interactive effects of darkness and anxiety on the memory for threatening faces." *Frontiers in Psychology*, 2014, 5:1091.

学会発表

西口周, 山田実, 谷川貴則, 横山薫, 川越敏和, 吉川左紀子, 阿部修士, 大塚結喜, 中井隆介, 青山朋樹, 坪山直生「脳萎縮と視空間性ワーキングメモリ課題中の脳活動の関連性——機能的MRIを用いた検討」第49回日本理学療法学会大会(パシフィコ横浜, 横浜市) 2014.6.1.

Ueda, Y., Nagoya, K., Yoshikawa, S., & Nomura, M. "Observer's facial expressions affected perceived dominance." 日本認知心理学会第12回大会(仙台国際センター, 仙台市) 2014.6.28.

布井雅人, 吉川左紀子「他者の人数と割合が選好判断に及ぼす影響」日本認知心理学会第12回大会(仙台国際センター, 仙台市) 2014.6.29.

Ueda, Y., & Yoshikawa, S. "Perceived dominance of facial expression." British Academy Early Career Networking Event, The Mind Across Cultures (University of York, U.K.) 2014.8.6.

Minemoto, K., & Yoshikawa, S. "Face identity adaptation facilitates the recognition of facial expressions." British Academy Early Career Networking Event, The Mind Across Cultures (University of York, U.K.) 2014.8.6.

布井雅人, 吉川左紀子「選好判断への他者の人数割合の影響——絶対数が異なる場合の割合の影響の違い」日本心理学会第78回大会(同志社大学, 京都市) 2014.9.10.

嶺本和沙, 吉川左紀子「表情に対する順応が援助に関する判断に及ぼす影響」日本心理学会第78回大会(同志社大学, 京都市) 2014.9.12.

田村綾菜, 伊藤祐康, 小川詩乃, 吉川左紀子「京都大学こころの未来研究センターにおける『発達障害の学習支援・コミュニケーション支援』プロジェクトの取り組み」第55回日本児童青年精神医学会総会(アクティシティ浜松, 静岡市) 2014.10.12.

小川詩乃, 船曳康子, 吉川左紀子「発達障害児の読み書き困難評価と支援実践——発達障害の特性理解チャート(MSPA)を用いて」第55回日本児童青年精神医学会総会(アクティシティ浜松, 静岡市) 2014.10.13.

講演等

Sakiko Yoshikawa, "Mind, culture, and kokoro" British Academy Early Career Regional Event, The Mind Across Cultures (University of York, York, U.K.) 2014.8.5.

吉川左紀子「こころの科学は何をめざしているのか」学士会第18回関西茶話会(大阪電気倶楽部, 大阪市) 2014.10.18.

吉川左紀子「『幸福な人生』を考える——ブータンの幸福, 日本の幸福」第11回国土文化研究所オープンセミナー(日本橋浜町Fタワープラザ, 東京都) 2014.10.23.

吉川左紀子「人間関係とコミュニケーション」京都府看護協会実習指導者講習会(京都府看護協会研修センター, 京都市) 2014.10.29.

吉川左紀子「感情心理学」日本心理学会関西地区 高校生のための心理学講座シリーズ「心理学と社会: こころの不思議さを解きあかす」(京都大学文学部第3講義室, 京都市) 2014.12.13.

吉川左紀子「京大連携MRI研究施設での研究概要2012-2014」東京大学・駒場MRI実験施設立ち上げシンポジウム(東京大学駒場キャンパス18号館ホール, 東京都) 2015.3.27.

雑誌等

吉川左紀子「こころの科学は何をめざしているのか」『U7』, vol.60, 2014, 42-49.

吉川左紀子「今を語る: 目に見えない心の働きを見定める」『商工ジャーナル』2015年2月号, 62-65.

社会活動

文部科学省科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会委員.

文部科学省科学技術・学術審議会先端研究基盤部会委員.

文部科学省科学技術・学術審議会研究開発プラットフォーム委員会委員.

文部科学省大学設置・学校法人審議会(大学設置分科会)専門委員.

文部科学省研究成果展開事業「センター・オブ・イノベーションプログラム」構造化チーム委員.

京都市社会教育委員.

船橋新太郎

論文

Funahashi, S. "Saccade-related activity in the prefrontal cortex: its role in eye movement control and cognitive functions." *Frontiers in Integrative Neuroscience*, 2014, 8:54. DOI: 10.3389/fnint.2014.00054.

船橋新太郎「こころと感情」『最新精神医学』2014, 19: 271-275.

Mochizuki, K. and Funahashi, S. "Opposing history effect of preceding decision and action in the free choice of saccade direction." *Journal of Neurophysiology*, 2014, 112: 923-932. DOI: 10.1152/jn.00846.2013.

竹田里江, 竹田和良, 池田望, 松山清治, 船橋新太郎, 石合純夫「半側空間無視を有する認知症患者に対するコンピュータを用いた認知機能訓練の効果」『老年精神医学雑誌』2014, 9: 1035-1045.

船橋新太郎「意識の解明に向けた新たな挑戦」『日経サイエンス』2014年11月号, p.109.

Watanabe, K. and Funahashi, S. "Neural mechanisms of dual-task interference and cognitive capacity limitation in prefrontal cortex." *Nature Neuroscience*, 2014, 17: 601-611. DOI: 10.1038/nn.3667.

船橋新太郎「前頭連合野研究とワーキングメモリ仮説」『日本神経回路学会誌』2015, 22(1): 1-2.

船橋新太郎「書評 小野武年著『情動と記憶——しくみとはたらき』」『比較生理生化学』2015, 32(1): 49.

Watanabe, K. and Funahashi, S. "Primate model of interference control." *Current Opinion in Behavioral Sciences*, 2015, 1: 9-16. DOI:10.1016/j.cobeha.2014.07.004.

Funahashi, S. "Functions of delay-period activity in the prefrontal cortex and mnemonic scotomas revisited." *Frontiers in Systems Neuroscience*, 2015, 9: 2. DOI: 10.3389/fnsys.2015.00002.

Ichihara-Takeda, S., Yazawa, S., Murahara, T., Toyoshima, T., Shimozaki, J., Ishiguro, M., Shiraiishi, H., Ikeda, N., Matsuyama, K., Funahashi, S., and Nagamine, T. "Modulation of alpha activity in the parieto-occipital area by distractors during a visuospatial working memory task: a magnetoencephalographic study." *Journal of Cognitive Neuroscience*, 2015, 27: 453-463. DOI: 10.1162/jocn_a_00718.

渡邊慶, 船橋新太郎「二重課題の神経生物学——二重課題干渉効果と前頭連合野の役割」『霊長類研究』(in press).

Watanabe, K. and Funahashi, S. "A dual-task paradigm for behavioral and

neurobiological studies in nonhuman primates." *Journal of Neuroscience Methods* (in press) DOI: 10.1016/j.jneumeth.2015.03.006.

学会発表

Funahashi, S. (2014) Neural mechanisms related to dual-task interference in the primate prefrontal cortex. Seminar at Department of Biotechnology, Korea Advanced Institute of Science and Technology (KAIST), (Tejong, Korea) 2014.5.13.

船橋新太郎 (2014) 「二重課題干渉と前頭連合野のニューロン活動」神経科学セミナー (京都大学医学部, 京都市) 2014.6.2.

Ichihara-Takeda, S., Ikeda, N., Matsuyama, K., and Funahashi, S. (2014) Effects of tailor-made cognitive rehabilitation method based on the prefrontal function on patients with dementia: a randomized controlled study. 第16回世界作業療法士連盟大会 (パシフィコ横浜, 横浜市) 2014.6.14-21.

Funahashi, S. and Nakamoto, W. (2014) Monkeys' preference for visual items and orbitofrontal neural activities. 科学研究費補助金「質感脳情報学」第8回班会議および国際シンポジウム (東京大学生産技術研究所駒場リサーチキャンパス, 東京都) 2014.7.15-17.

Funahashi, S. and Nakamoto, W. (2014) Monkeys' preference for visual items and orbitofrontal neural activities. 第37回日本神経科学大会 (パシフィコ横浜, 横浜市) 2014.9.11.

Funahashi, S. (2014) Neural mechanisms related to dual-task interference in the primate prefrontal cortex. Mini-Symposium on Prefrontal Functions, Institute of Cognitive Sciences, East China Normal University, (Shanghai, China) 2014.12.1.

Funahashi, S. (2014) Neural mechanisms related to dual-task interference in the primate prefrontal cortex. 5th International Conference of Prefrontal Cortex, Kunming Institute of Zoology, Chinese Academy of Science, (Kunming, China) 2014.12.3-4.

Mochizuki, K. and Funahashi, S. (2014) Fluctuation of spatial representation and the dynamics of decision-making in prefrontal neuronal network. 2014 International Symposium "Vision, Memory, Thought: How Cognition Emerges from Neural Network." (東京大学, 東京都) 2014.12.6-7.

Watanabe, Y. and Funahashi, S. (2014) Information processing in the thalamic mediodorsal nucleus during spatial working memory performance. 2014 International Symposium "Vision, Memory, Thought: How Cognition Emerges from Neural Network." (同上) .

Funahashi, S. (2015) Flexible allocation of cognitive capacity during dual-task performances. 1st Kyoto University - UC San Diego Joint Symposium "New Era of Trans-Pacific Knowledge Interactions." Session C 1: Changing Brain, (ANA Crown Plaza Kyoto, 京都市) 2015.3.11.

船橋新太郎 「二重課題干渉効果と前頭連合野の関与」日本心理学会「注意と認知」研究会第13回合宿研究会 (ホテルサンルートプラザ名古屋, 名古屋市) 2015.3.16.

船橋新太郎, 中本若奈 「質感の変化による選好性の変化と前頭葉眼窩部の役割」科学研究費補助金「質感脳情報学」第9回班会議 (千里ライフサイエンスセンター, 豊中市) 2015.3.20.

カール・ベッカー

論文

学術論文 (* 以外は査読付き)

中嶋文子, カール・ベッカー, 赤澤千春, 寺口淳子, 小野千秋, 渡辺美佳, 浜崎美子, 栢岡千香子, 東真理, 山田利恵 (2014) 「早期離職した看護師のストレス対処能力 (SOC: Sense of Coherence: 首尾一貫感覚) と退職理由の関係について」『医療の広場』2014, 54(4), 7-10.

* 駒田安紀, 近藤恵, 赤澤千春, 中嶋文子, カール・ベッカー (2014) 「新人看護師のバーンアウトとソーシャルサポート源」『看護管理』2014, 24(4), 382-386.

* Hiyoshi-Taniguchi, Kazuko, Becker, Carl B., Kinoshita, Ayae, (2014) "Social Workers Can Use Sense of Coherence to Predict Burnout of End-of-Life Care-Givers." (Research Report from Japan). *British Journal of Social Work*, 01 December, 44/ 8 (2360-2374), 00453102.

* 糸島陽子, 奥津文子, カール・ベッカー他 (2014) 「新卒看護師・看護師長のエンドオブライフに関する教育ニーズ」『人間看護学研究』12月号, 25-32.

カール・ベッカー (2014) 「日本的な看取り: その準備, 受容, 意味」『京都医学会雑誌』61(2), 39-44.

沖永隆子, カール・ベッカー, 清家理, ローラ・スペッカー・サリバン, 金田伊代, 松本光生 (2015) 「患者と家族の終末期の意思決定を支えるために——アドバンス・ケア・プランニング実現に向けての開発研究」『生存科学』vol. 26.

カール・ベッカー (2015) 「臨死体験と脳」『Mind-Body Science』25号, 4-7.

著書・事典

カール・ベッカー (2014年4月) 「環境倫理と企業倫理」木村武史編『現代文明の危機と克服』日本地域社会研究所, 15-34頁.

カール・ベッカー (2014年9月) 「スピリチュアルケアとグリーフケアと医療」鎌田東二編『スピリチュアルケア』ビイング・ネット・プレス, 144-166頁.

Becker, Carl. (2014). 'Spirituality' In Ten Have, Henk (ed.) *Encyclopedia of Global Bioethics*. Dordrecht, Netherlands: Springer. 1-9. http://link.springer.com/referenceworkentry/10.1007/978-3-319-05544-2_398-1.

講演

カール・ベッカー 「霊性研究: 何故, どうやって?」霊性研究会定例研究会 (東京工業大学, 東京都) 2014.4.26.

Carl Becker, "Meaning: Measurement, Interpretation, and Grounding." Vienna Medical Society, Second World Congress of Logotherapy, 2014.5.17.

Carl Becker, "End-of-Life, Dying and Bereavement in Japan." Ashridge House, London, British Association for the Study of Spirituality, 2014.5.21.

カール・ベッカー 「家族介護者のこころを探る」35回こころの未来セミナー (稲盛記念館3階大ホール, 京都市) 2014.6.3.

カール・ベッカー 「幸せなシニア人生を歩むために」日本スカウト連盟 (大森東急ホテル, 東京都) 2014.6.7.

Carl Becker, "Dying and Bereavement in Asia." University of Hong Kong, World Conference on Grief & Bereavement, 2014.6.14.

カール・ベッカー 「死別体験と看護倫理」滋賀県立大学人間看護学部授業 (彦根市) 2014.7.4.

カール・ベッカー 「宗派を超え, 視野を広げる仏教」龍谷大学アジア仏教文化センター (龍谷大学大宮学舎, 京都市) 2014.7.6.

カール・ベッカー 「看護師を続けるためには」看護師教育講習会 (新潟リハビリテーション大学, 村上市) 2014.7.17.

カール・ベッカー 「上を向いて歩こうの看護」看護師研修月例会 (新潟県立がんセンター新潟病院, 新潟市) 2014.7.18.

カール・ベッカー 「挫折を超えるために悲しみを考える」上越教育大学家庭科教育授業 (上越市), 2014.7.19.

カール・ベッカー 「古典教育に意味があるのか」Classics and College Education in an Age of Globalization (国立台湾大学, 台北市) 2014.7.31.

カール・ベッカー 「幸福をどう探せるか——日本人の知恵から」左京医師会地域連携懇談会 (からすまホテル, 京都市) 2014.8.2.

カール・ベッカー「日本人の生死観と寺院の存在」高龍寺（今治市）2014.9.11.

カール・ベッカー「生きる目的をどう設けるか」きらめき未来塾2014フォローアップ研修（メルパルク京都,京都市）2014.9.19.

カール・ベッカー「安心して終焉を迎える日本的な看取り」京都大学公開春秋講義（京都大学時計台,京都市）2014.9.27.

カール・ベッカー「日本的な看取り：その準備,受容,意味」シンポジウム「高齢者の終末期医療を考える」京都府医師会（京都府医師会館,京都市）2014.9.28.

カール・ベッカー「魂のゆくえ——日本人の生き方と逝き方」神戸市老眼大学・生涯学習グループ連絡協議会（コムスタこうべ,神戸市）2014.10.6.

カール・ベッカー「医療従事者の死生観と日本人の経験智」京都北部緩和ケア研究会（舞鶴市商工観光センター,舞鶴市）2014.10.11.

カール・ベッカー「燃え尽きないため,看取りの意味を探る」第38回日本死の臨床研究会年次大会（別府国際コンベンションセンタービーコンプラザ,別府市）2014.11.1.

カール・ベッカー「ケアのこころ～ケアの生きがい」大分市市民講演会（大分市）2014.11.2.

カール・ベッカー「超高齢社会における生死を考える」立正佼成会（視聴覚ホール,東京都）2014.11.8.

カール・ベッカー「地域と伝統に基づく精神的ケア」第18回日本精神医学史学会（京都大学百周年時計台記念館,京都市）2014.11.9.

カール・ベッカー座長「日本医学哲学・倫理学会」（東洋大学,東京都）2014.11.24.

カール・ベッカー「総まとめ」人体科学会第24回大会公開シンポジウム「身心変容と脳科学——瞑想・太極拳・整体を事例として」（稲盛記念館3階大ホール,京都市）2014.11.29.

カール・ベッカー「日本人の死生観——生き方と逝き方」京都学園大学人文学部開設記念講演会（キャンパスプラザ京都,京都市）2014.11.30.

カール・ベッカー「看護倫理を考える」看護師研修会（武田病院,京都市）2015.1.16.

Carl Becker, "East Asian Wisdom Facing Elder Care, Death, and Bereavement." McKay Hospital, Taipei, Taiwan, 2015.1.31.

カール・ベッカー「何故生きるのか——日本人の幸福感を探る」京都いのちの電話公開講演会（メルパルク京都,京都市）2015.2.8.

カール・ベッカー「幸福の追求権」京都新聞（京都新聞ホール,京都市）2015.2.19.

カール・ベッカー「コメント」京都大学-UCSD（カリフォルニア大学サンディエゴ校）共同国際シンポジウム（ANAクラウンプラザホテル京都,京都市）2015.3.12.

Carl Becker, "Death, Dying, and Bereavement in Japan." Hull University, Hull, UK, 2015.3.24.

新聞・冊子等掲載

カール・ベッカー「選択肢——法律で明確化を」毎日新聞（富山版）2014年3月18日.

カール・ベッカー「異文化の中で問われる医療者の死生観と日本人の経験知」『国際看護』482, 5-7頁, 2014年5月10日, 483, 4-7頁.

カール・ベッカー, 「最期をどう迎えますか——自宅で見取り大切」中日新聞, 2014年6月14日.

社会活動

日本人体科学会理事.

日本宗教学会理事.

日本実存心身療法研究会理事.

日本自然治癒力研究会理事.

日本生命倫理学会理事.

精神医学史学会理事.

国際生命情報科学会評議員.

日本医学哲学・倫理学会評議員.

日本スピリチュアル・ケア学会理事.

仏教看護ビハーラ学会評議員.

仏教心理学会評議員.

国際統合医学会評議員.

Mortality Journal 編集員.

Near-Death Studies Journal 編集員.

Taiwan East Asian Studies Journal 編集員.

British Journal of Spirituality 編集員.

Personalized Medicine Universe 編集員.

河合俊雄

論文

Kawai, T. "Big Stories and Small Stories after a Traumatic Natural Disaster from a Psychotherapeutic Point of View." Gil, I. C. & Wulf, C. (Eds.) *Hazardous Future: Disaster, representation and the assessment of risk*. 2015, 95-108.

河合俊雄「河合隼雄と井筒俊彦」『三田文学』117月号, 2014, 242-251.

河合俊雄「女のいない男たちのインターフェイスしない関係」『新潮』2014年7月号, 2014, 234-237.

河合俊雄「井筒俊彦とエラノス精神」『井筒俊彦 言語の根源と哲学の発生』河出書房新社, 2014.

河合俊雄「『赤の書』——ユングと言葉」『心理臨床の広場』vol.7, No.1., 2014.

河合俊雄「ユング『赤の書』における近代意識とその超克」『日本病跡学雑誌』第87号, 2014, 43-50.

河合俊雄「河合隼雄との三度の再会」上廣倫理財団（編）『わが師・先人を語る 1』弘文堂, 2014, 221-258.

河合俊雄「身心分離とインターフェイスにおける身心変容技法」『身心変容技法研究』第4号, 2015, 45-51.

著書

Kawai, T. "Big Stories and Small Stories in the Psychological Relief Work after the Earthquake Disaster: Life and Death." Huskinson, L. & Stein, M. (Eds.) (2014) *Analytical Psychology in a Changing World: The search for self, identity and community*. Routledge, 23-41.

河合俊雄（2014）當村上春樹遇見榮格：從《1 Q84》的夢物語談起。心靈工坊。

編集

河合俊雄（河合俊雄編）（2014）『青春の夢と遊び』岩波現代文庫。

河合俊雄（河合俊雄編）（2015）『「出会い」の不思議』創元こころ文庫。

河合俊雄（河合俊雄編）（2015）『カウンセリングを語る 上』創元こころ文庫。

河合俊雄（河合俊雄編）（2015）『カウンセリングを語る 下』創元こころ文庫。

河合俊雄（河合俊雄編）（2015）『こころと人生』創元こころ文庫。

河合俊雄（河合俊雄編）（2015）『より道わき道散歩道』創元こころ文庫。

河合俊雄（河合俊雄編）（2015）『カウンセリングと人間性』創元こ

ころ文庫.

学会発表

Kawai, T. "Neue Möglichkeiten der Jung'schen Psychologie: Vormoderne Weltanschauung und Herausforderung der modernen Zeit." (Basel University, Basel) 2014.5.28.

Kawai, T. "Intersubjectivity, the third subject and open field in the analysis." in 12th International Conference of Journal of Analytical Psychology. (Hilton Hotel, Berlin) 2014.5.31.

河合俊雄「曼荼羅としての箱庭」韓国箱庭療法学会(ソウル)2014.7.13.

Kawai, T. "Initiation and transcendence as substantiated goal or psychological difference: in reference to psychotherapy and Buddhism." International Society of Psychology as the Discipline of Interiority. (基調講演) (Crown Plaza Hotel, Berlin) 2014.7.19.

Kawai, T. "Psychological relief work after the (11.3.2011) earthquake: Jungian perspectives and conflicts with systems." In: "Analysis and Activism: Social and Political Contributions of Jungian Psychology" (Hallam Conference Center, London) 2014.12.7.

講演

河合俊雄「亡き魂の現前：千麗と河合隼雄」阿留辺幾夜宇和コンサートにおけるスピーチ。(千麗舞山荘,京都市) 2014.4.13.

河合俊雄「人類の知の遺産・河合隼雄」(東京自由大学,東京都) 2014.5.11.

河合俊雄「主体性は超えられるのか？——心理療法における揺らぎと超越」『東京で学ぶ京大の知』シリーズ15 ころの未来—私たちのころは何を求めているのか 第4回(京都大学東京オフィス,東京都) 2014.6.25.

河合俊雄「奈良の大仏と華厳——ユング派心理療法との接点」奈良女子大学臨床心理相談センターセミナー(奈良女子大学文学系S棟,奈良市) 2014.9.21.

河合俊雄「発達障害と現代の中高生の意識」大阪上宮高校・中学校教員研修.2014.10.9.

河合俊雄「傷からの回復ところの創造」(基調講演) 学習院大学人文科学研究科臨床心理学専攻博士後期課程設置記念シンポジウム『日本人のころと文化——傷つきから再生への道』(学習院大学百周年記念会館正堂,東京都) 2014.11.30.

シンポジウム, 新聞掲載, エッセイ, ラジオ出演

河合俊雄「河合俊雄 河合隼雄との三度の“再会”」『考える人』2014夏号, 2014, 116-123.

河合俊雄「解説」河合隼雄(河合俊雄編)『青春の夢と遊び』岩波現代文庫, 2014.

河合俊雄「解説」河合隼雄『河合隼雄の幸福論』PHP研究所, 2014.

河合俊雄「解説」河合隼雄(河合俊雄編)『「出会い」の不思議』創元ころ文庫, 2015.

河合俊雄シンポジウム記録「身殻と身柄—(ひと)をめぐって」『ユング心理学研究』第7巻第1号 ユング派の精神療法, 2014, 43-61.

河合俊雄「河合隼雄の三編」『精神療法』増刊第1号, 2014, 34-39.

河合俊雄「虚と実のあいだ オリジナル難しい」東京新聞・中日新聞2014年5月10日朝刊

河合俊雄「脱『他者』時代へのコミットメント」毎日新聞2014年7月7日夕刊

河合俊雄「経験と哲学, イメージとことば——井筒俊彦からの学び」井筒俊彦全集第7巻『イスラーム文化1981年-1983年』(月報第7号), 慶應義塾大学出版会, 2014.

鎌田東二・河合俊雄(対談)「日本のころと未来 きれいが動かす

ころと共に」きれいのデザイン研究室(編)『にほんのきれいのあたりまえ——新しいくらし方をデザインする』フィルムアート社, 2014.

河合俊雄「河合隼雄のカウンセリング教室」『医道の日本』73(12), 2015, 32.

河合俊雄「ユング派心理療法の新しい可能性」2013年度第3回日本ユング心理学研究所研修会講演録『ユング心理学研究』第7巻第2号, 2015, 69-87.

河合俊雄「場への信頼——共に在ること, 創ること」日本箱庭療法学会第28回大会一般公開シンポジウム(東洋英和女学院大学, 横浜市) 2014.10.4.

河合俊雄「伝播する井筒俊彦」井筒俊彦生誕100年記念トークセッション(慶應義塾大学三田キャンパス, 東京都) 2014.11.8.

河合俊雄「ワザとところ 能の伝承〜稽古と修行と教育」京都府/京都大学ころの未来研究センター共同企画シンポジウム(京都観世会館, 京都市) 2015.1.12.

河合俊雄「心理療法から見る古来・現代・未来のころ」Kyoto University Academic Talk, エフエム京都α-Station, 2015.3.4.

河合俊雄「トラウマからの回復ところの創造」島根県臨床心理学研究会主催特別研修会(松江テルサ, 松江市) 2015.3.15.

鎌田東二

論文

鎌田東二「神道の生死観——いのち, 来るときと去るとき」公益財団法人日独文化研究所編『日独文化研究所シンポジウム〈生と死〉』こぶし書房, 2014年4月.

鎌田東二「神道と音」『怪』41号, 角川書店, 2014年4月.

鎌田東二他『ミャンマー仏教を語る——世界平和パゴダの可能性』現代書林, 2014年5月.

鎌田東二他『災害と文明——東日本大震災と防潮堤問題を考える』比較文明学会, 2014年4月.

鎌田東二「詩と宗教と哲学の間——言語と身心変容技法」安藤礼二・若松英輔責任編集『井筒俊彦 言語の根源と哲学の発生』河出書房新社, 2014年5月.

鎌田東二「生態智と平安文明」『文明と未来』東海大学出版会, 2014年5月.

鎌田東二「日本の風土と宗教心」『大阪府保険医雑誌』579号, 2014年12月号, 大阪府保険医協会.

鎌田東二「スサノヲという爆発——放浪する翁童神のメッセージ」足利市立美術館編『スサノヲの到来——いのち, いかり, いのり』2014年9月.

鎌田東二『映画 花の億士へ——石牟礼道子の世界』監督金大偉, 制作藤原書店, 2015年1月.

鎌田東二「『身心変容技法』としての歌と剣——『身心変容技法研究』試論」『身心変容技法研究』第3号, 京都大学ころの未来研究センター, 2015年3月.

鎌田東二「ころの練り方探究事始めその五——安部公房と三島由紀夫を中心に」『モノ学・感覚価値研究』第9号, 京都大学ころの未来研究センター, 2015年3月.

鎌田東二『月刊京都 霊性の京都学56-67』2014年4月号~2015年3月号, 白川書院.

鎌田東二「神道から見た日本仏教」『龍谷大学アジア仏教研究センター2014年度研究報告書』龍谷大学, 2015年3月.

著書

鎌田東二編著『究極 日本の聖地』KADOKAWA, 2014年4月.
鎌田東二編著『講座スピリチュアル学』第1巻, 角川学芸出版, 2014年9月.
鎌田東二編著『講座スピリチュアル学』第2巻, 角川学芸出版, 2014年11月.
鎌田東二他共著『乳房の文化論』淡交社, 2014年12月.

学会発表

鎌田東二他「身心変容技法が問いかけるもの」日本宗教学会第73回学術大会パネル発表(同志社大学, 京都市) 2014年9月14日.
鎌田東二他「人体科学と身心変容」人体科学会第24回学術大会シンポジウム(京都大学, 京都市) 2014年11月29日.

招待講演

鎌田東二「スサノヲという爆発」『スサノヲの到来展』足利市立美術館, 2014年11月9日.
鎌田東二「スサノヲカの探究と表現——その爆発の形を考える」『スサノヲの到来展』DIC川村記念美術館, 2015年2月1日.
鎌田東二「神道と仏教から見たこころのワザ学と日本文化」『第57回品川セミナー』京都大学東京オフィス, 2015年3月6日.

新聞掲載

鎌田東二「ふるさとづくり会議 生活の場活性化へ提言 国づくりとの連動が鍵」徳島新聞2014年4月1日.
鎌田東二「今を生きる宗教の意義と力 心の平安に大きな役割 被災者と地域を支える」徳島新聞2014年5月1日.
鎌田東二「『老いと踊り』国際シンポジウム 西洋は若さが至上価値 日本では経験・年齢重要」徳島新聞2014年6月2日.
鎌田東二「日本は『大人』なの? 守るべきものと少年」徳島新聞2014年7月1日.
鎌田東二「和合して新しい実となったつぶてソング」徳島新聞2014年8月1日.
鎌田東二「『分断』どう向き合う 震災後の自然と社会 いのちの連環再構築を」徳島新聞2014年9月22日.
鎌田東二「痛ましさの中の希望 福島から水俣へ, そして『苦海浄土』の水俣から福島へ 祈りのような『福音』聴く」徳島新聞2014年10月1日.
鎌田東二「環境に即した知恵必要 半農半X人と環境再生医のメッセージ」徳島新聞2014年11月1日.
鎌田東二「スサノヲの到来展」徳島新聞2014年12月1日.
鎌田東二「阪神大震災から20年」徳島新聞2015年1月3日.
鎌田東二「安心なき時代の安心」徳島新聞2015年2月2日.
鎌田東二「二宮尊徳に学ぶ」徳島新聞2015年3月2日.
鎌田東二「御嶽山心の痛みに向き合うには」朝日新聞2014年11月10日.
鎌田東二「日本の神話『古事記』——敗残者の系譜をどうやって鎮めるのか」『月刊シアターX批評通信』51号, シアターX, 2014年12月.
鎌田東二「天神信仰と『悲とアニメ展』開催に寄せて」『北野天満宮社報』平成27年新年号, 2015年1月.
鎌田東二「神道と仏教から見た心のワザ学と日本文化」読売新聞2015年3月23日朝刊.

ラジオ・テレビ出演

鎌田東二「私の聖地発見」, NHK ラジオ第2「宗教の時間」2014年5月4日出演.
鎌田東二「京都遊空間〜遊プロジェクト京都の『おもしろ発見・まち・京都』」, 京都FM「ラジオ・カフェ」2015年2月26日出演.

NHK・Eテレビ「地域伝統芸能まつり」岩手県紫波神楽解説, 2015年3月14日.

展覧会監修

「悲とアニメ——モノ学・感覚価値研究会展」2015年3月7日~14日, 北野天満宮.

書評・舞台評

「宗教の枠を超え協力を 綾部でシンポ 社会での役割考える」(シンポジウム「土・火・水・空(そら)を問う——世界連邦都市綾部から」) 京都新聞2014年4月20日, あやべ市民新聞同年4月23日.

「歌うことは祈ること 苦悩を浄化する力——京都大の鎌田教授」『中外日報』2014年4月18日.

鎌田東二編著『究極 日本の聖地』書評: 嵐山光三郎「リレー読書日記」『週刊現代』2014年6月2日号, 小学館.

鎌田東二企画・編『講座スピリチュアル学第1巻スピリチュアルケア』書評: 京都新聞2014年9月28日, 徳島新聞同年11月13日「人間存在を総合的に探究」, 河北新報同年12月13日「悲嘆と向き合う 京大教授『スピリチュアル学』刊行」.

『週刊仏教タイムス』2014年12月4日. 「修験・回峰行・瀧行・水行 指導者が精神を開陳 荒行シンポ」 佛教タイムス社.

鎌田東二監修「悲とアニメ——モノ学・感覚価値研究会展」評: 「鎮魂の能舞 北野天満宮」朝日新聞2015年3月12日朝刊.

内田由紀子

論文

Ogihara, Y., & Uchida, Y. (2014). Does individualism bring happiness? Negative effects of individualism on interpersonal relationships and happiness. *Frontiers in Psychology*, 5:135. doi: 10.3389/fpsyg.2014.00135.

Uchida, Y., Ueno, T., & Miyamoto, Y. (2014). You were always on my mind: The importance of "significant others" in the attenuation of retrieval-induced forgetting in Japan. *Japanese Psychological Research*, 56, 263-274.

内田由紀子 (2014). 「東日本大震災後の幸福——震災がもたらした人生観と幸福感の変化」『季刊環境研究』172, 83-91.

Uchida, Y., Takahashi, Y., & Kawahara, K. (2014). Changes in hedonic and eudaimonic well-being after a severe nationwide disaster: The case of the Great East Japan Earthquake. *Journal of Happiness Studies*, 15, 207-221. 10.1007/s10902-013-9463-6.

Takemura, K., Uchida, Y., & Yoshikawa, S. (2014). Roles of extension officers to promote social capital in Japanese agricultural communities. *PLOS ONE* 9: e91975. doi:10.1371/journal.pone.0091975.

Ikeda, K., Fujimoto, S., Morling, B., Ayano-Takahara, S., Carroll, A. E., Harashima, S., Uchida, Y., & Inagaki, N. (2014). Social orientation and diabetes-related distress in Japanese and American patients with type 2 diabetes. *PLOS ONE* 9: e109323. doi:10.1371/journal.pone.0109323.

Ishii, K., Kitayama, S., & Uchida, Y. (2014). Voluntary settlement and its consequences on predictors of happiness: the influence of initial cultural context. *Frontiers in Psychology*, 5:1311. doi: 10.3389/fpsyg.2014.01311.

内田由紀子 (2014). 「日本の『幸福』を考える」『人間生活工学』15巻2号, p 1-3.

内田由紀子 (2014). 「つなぐ存在としての普及指導員」『農業と経済』80, 52-53.

Hitokoto, H. & Uchida, Y. (2015). Interdependent Happiness: Theoretical Importance and Measurement Validity. *Journal of Happiness Studies*, 16, 211-239.

Norasakkunkit, V., & Uchida, Y. (2014). To conform or to maintain self-

consistency? Hikikomori risk in Japan and the deviation from seeking harmony. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 33, 918-935.

内田由紀子 (2015). 「農業者・農業普及指導員調査から見る人の心をつなぐ力へのアプローチ」『技術と普及』2015年3月号.

Uchida, Y., Ogihara, Y., & Fukushima, S. (2015). Cultural construal of wellbeing - Theories and empirical evidence. In Glatzer, W., Camfield, L., Moller, V., & Rojas, M. (Eds.), *Global Handbook of Quality of Life: Exploration of Well-Being of Nations and Continents*. (pp. 823-837). Springer Netherlands. DOI: 10.1007/978-94-017.

Park, J., Uchida, Y., & Kitayama, S. (2015). Cultural variation in implicit independence: An extension of Kitayama et al. 2009. *International Journal of Psychology*. Online Version DOI: 10.1002/ijop.12157.

Nagaoka, C., & Uchida, Y. (in press). Preliminary study on the relation between the coping patterns and the mental health of radiation control personnel and non-destructive inspectors engaged in the periodic inspections of nuclear plants. *Journal of Occupational Health*.

Savani, K., Wadhwa, M., Uchida, Y., Ding, Y., & Naidu, N. V. R. (in press). When Norms Loom Larger Than the Self: Susceptibility of Preference-Choice Consistency to Normative Influence Across Cultures. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*.

京野千穂, 内田由紀子, 吉成祐子 (印刷中) 「援助行動に対する話者の認知が授受補助動詞テモラウ・テクレルの使用に与える影響——質問紙調査による分析」『社会言語科学』.

Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (in press). How do Japanese perceive individualism? Examination of the meaning of individualism in Japan. *Psychologia*.

Uchida, Y., & Takemura, K. (in press). Regional communities. *Psychologia*.

Takemura, K., Uchida, Y., & Fujino, M. (in press). Extension officers as social coordinators: Comparison between agricultural and fishing communities in Japan. *Psychologia*.

長岡千賀, 内田由紀子 (印刷中) 「原子力発電所の定期検査における労働職場環境のストレスと精神的健康の構造——放射線管理員と非破壊検査員を例とした予備的検討」『計画行政』.

著書・事典
内田由紀子 (2014). 「文化の変容と心の適応」山岸俊男 (編著) 『社会行動の文化・制度的基盤』勁草書房, pp. 63-90.

内田由紀子 (2014). 「遠距離結婚生活の中での育児と研究生生活」仲真紀子, 久保 (川合) 南海子編 『女性研究者とワークライフバランス——キャリアを積むこと, 家族を持つこと』新曜社, pp. 19-38.

Uchida, Y., Ogihara, Y., & Fukushima, S. (in press). Interdependently achieved happiness in East Asian cultural context: A Cultural Psychological point of view. In Trommsdorff, G. & Assmann, W. R. (Eds.), *Engaging in interdisciplinary research. Quality of life in cultural context*. Universitätsverlag Konstanz, UTB, Germany.

内田由紀子 (2014) 「感情と文化」『誠信心理学辞典』誠信書房.
内田由紀子 (2014) 「文化と自己」『誠信心理学辞典』誠信書房.

Uchida, Y., & Norasakkunkit, V. (2014). Asian versus Western views. In: Michalos A.C. (Ed.), *Encyclopedia of Quality of Life and Well-Being Research*. Dordrecht, Netherlands: Springer, pp 248-253.

編集
Frontiers in Psychology, Research Topic "Cultural change: Adapting to it, coping with it, resisting it, and driving it" Topic Editor (with Vinai Norasakkunkit and Tuukka Toivonen).
Psychologia, Special issue "Regional studies" (with Kosuke Takemura, 2015).

学会発表
内田由紀子 「文化と幸福, 指標作成」第87回日本産業衛生学会 (メイ

ンシンポジウム) 招待講演 (岡山コンベンションセンター, 岡山市) 2014.5.24.

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2014, 7.16). Are unique names increasing? Individualization in Japan. The 22nd International Congress for Cross-Cultural Psychology, Reims, France.

内田由紀子, 竹村幸祐, 福島慎太郎 「生業コミュニティ文化の検証: 農業・漁業・都市地域比較」 「ワークショップ: 文化の単位を問う: 地域・生業・国家比較を通じた検証」日本社会心理学会第55回大会 (北海道大学, 札幌市) 2014.7.26.

内田由紀子 「文化変容と心の適応」 「ワークショップ: 文化変容と維持: 「こころの性質」の変化についての社会・文化心理学的考察」日本社会心理学会第55回大会 (北海道大学, 札幌市) 2014.7.27.

Tominaga, H., Yamasaki, T., Uchida, Y., & Miyamoto, Y. Effects of Pair Ensemble on Attention and Affective Experience. International Conference on Music Perception and Cognition and 5 Conference for the Asia-Pacific Society for Cognitive Sciences of Music, Yonsei University, Seoul, South Korea, 2014, 8.5.

Uchida, Y. (基調講演) Cultural Construal of "Interdependent Happiness" in Japan: Cultural Psychological theories and empirical evidence. The 14th European Association for Japanese Studies. Slovenia, Ljubljana, 2014.8.28.

荻原祐二, 内田由紀子, 楠見孝 (2014) 「日本の個人主義者は孤独か? 日本における個人主義と対人関係」日本グループ・ダイナミックス学会第61回大会.

内田由紀子 「日本におけるニート・ひきこもりとグローバリゼーション」 「ワークショップ: 変容する日本社会と組織: 職場のメンタルヘルスと幸福感の検証」日本心理学会第78回大会 (同志社大学, 京都市) 2014.9.10.

荻原祐二, 内田由紀子, 楠見孝 (2014) 「ユニークになりたい親は子どもにユニークな名前を与えるか? 個人主義指標としての個性的な名前の検討」日本心理学会第78回大会発表論文集, 235. (同志社大学, 京都市) 2014.9.11.

内田由紀子 「子育てと研究生生活」 「ワークショップ: 研究者のワークライフ・バランス: キャリアを積むことと家庭を持つこと」日本心理学会第78回大会 (同志社大学, 京都市) 2014.9.12.

内田由紀子 「若者の幸福感と文化的基盤: 個人主義と関係志向の狭間で」日本社会病理学会第30回大会シンポジウム招待講演 (下関市立大学, 下関市) 2014.10.5.

富永仁志, 阿部修士, 内田由紀子 「相互協調的自己観は利他行動傾向を高めるか」平成26年度生理研研究会, 第4回社会神経科学研究会抄録集, 31. (岡崎コンファレンスセンター, 岡崎市) 2014. 10.30.

内田由紀子 「こころと幸福: 日本的幸福観考察」第36回全国大学メンタルヘルス研究会招待講演 (龍谷大学, 京都市) 2014.12.11.

Uchida, Y., Takemura, K., Fukushima, S., Saizen, I., Koizumi, N., Kawamura, Y., & Yoshikawa, S. (2015.2.26). Farming, but not fishing, cultivates shared culture within a community. The 11th Cultural Psychology Preconference (at the 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology), Long Beach, California, USA.

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2015, 2.26). Are unique names increasing? Rise in uniqueness and individualism in Japan. The 11th Cultural Psychology Preconference (at the 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology), Long Beach, California, USA.

Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2015, 2.27). Does individualism damage interpersonal relationships and subjective well-being in Japan? Longitudinal

examination for a causal link. The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, USA. (ポスターワード)

Katsumura, F., Akutsu, S., Uchida, Y., Kitayama, S., & Ogihara, Y. (2015, 2.27). Differential Impacts of Employees' Cultural Self-Concepts on Job Satisfaction and Workplace Social Relationship Between Japanese Companies and Foreign-owned Companies in Japan. The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, USA.

Akutsu, S., Uchida, Y., Katsumura, F., Ogihara, Y. & Kitayama, S. (2015, 2. 26). Do Japanese workers feel lonelier in local Japanese companies than in foreign-owned multinational companies in Japan? If so, why? - A cultural psychological inquiry. The 11th Cultural Psychology Preconference (at the 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology), Long Beach, California, USA.

Fukushima, S., Uchida, Y., & Saizen, I. (2015, 2.28). Effects of social norms on cooperative behavior in correlation with geographical network size: An empirical approach to cultural unit and transmission. The 11th Cultural Psychology Preconference (at the 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology), Long Beach, California, USA.

講演・ワークショップ等

内田由紀子「人が育つ組織」研究会 パネリスト (京都大学, 京都市) 2014.5.27.

内田由紀子「日本文化における主体性とは何か——日本人の意識、感情、関係性からの考察」『東京で学ぶ京大の知』シリーズ15 ころの未来—私たちのころは何を求めているのか 第1回 (京都大学東京オフィス, 東京都) 2014.5.28.

内田由紀子「仕事と組織における幸福とは何か——GNHを手がかりに」盛和塾北大阪例会 2014.6.24.

内田由紀子「教師の働きがい、子どもたちの自己肯定感を育てる」姫路市立前之庄小学校 (姫路市) 2014.8.4.

Uchida, Y. (2014.8.25) How do we construct happiness and social capital? Evidence from community research in Japan. University of Vienna, Japanese studies.

Uchida, Y. "The social and emotional context of aging in rural areas." 京都工芸繊維大学「超高齢社会における農村・農家の将来像」(京都市) 2014.9.19.

内田由紀子「日本の地域における幸福感」第112回西日本経済同友会会員合同懇親会 (高知市) 2014.10.3.

内田由紀子「文化と幸福——ソーシャル・キャピタルとの関連」東洋大学大学院社会学研究科院生セミナー (東洋大学HIEC21共催) (東京都) 2014.10.10.

内田由紀子 パネルディスカッション「選択する未来」シンポジウム (内閣府主催, 松江市) 2014.10.14.

内田由紀子「日本における組織と地域のメンタルヘルス」京都農協健康保険組合 メンタルヘルス講習会 基調講演2014.11.6.

Uchida, Y. Cultural models of social relationships and well-being in Japan. 国際協力基金「日中韓次世代リーダーフォーラム2014」(稲盛財団記念館, 京都市) 2014.11.7.

内田由紀子「農業者・農業普及指導員調査から見る人の心をつなぐ力へのアプローチ」農業普及活動高度化全国研究大会基調講演 (東京都) 2014.11.26.

内田由紀子 ディスカッション「当事者主催——自分のことは自分で決める」第6回クオリア AGORA 京都クオリア研究所 (京都大学楽友会館, 京都市) 2014.11.27.

内田由紀子「地域の幸福とソーシャル・キャピタル——『つなぐ』

仕事再考」慶應義塾大学 (東京都) 2014.12.3.

内田由紀子, 福島慎太郎「農業者・農業普及指導員調査から見る人の心をつなぐ力へのアプローチ」平成26年度近畿ブロック提案型研修 近畿農政局 2015.1.29.

内田由紀子 話題提供 “Women and Wish” フォーラム第1回「男女共同参画推進センターのサービスを利用して」(芝蘭会館別館, 京都市) 2015.1.26.

内田由紀子「日本における幸福感——国際比較と地域比較」デンソー基礎研究所 2015.2.4.

内田由紀子「文化と幸福——日本における関係志向的幸福についての文化心理学的実証研究」たちばな賞授賞式 (京都大学楽友会館, 京都市) 2015.3.3.

内田由紀子「日本における“リスク”の文化・社会心理学的考察」朝日新聞社未来への発想委員会, 2015.3.16.

ワークショップ企画・運営

持続可能性と幸福研究ネットワーク (2012年5月より継続).

「人が育つ組織」(NPO法人ミラック, 株式会社ウエダ本社との共催) (2014年4月より).

メディア・冊子等掲載

冊子「未来に繋がる青いリボンのエトセトラ」(京都大学男女共同参画推進センター) 2014年4月発行.

内田由紀子「日々の暮らしをこげげんに」リビング京都中央2014年5月31日.

内田由紀子「いい人間関係が築けているかが満足度を大きく左右」サンケイリビング2014年8月29日.

西日本経済同友会合同懇談会における基調講演発言の紹介「幸福度で地方発展を」高知新聞2014年10月4日.

選択する未来シンポジウム (2014年10月14日, 内閣府主催, 松江市) における発言紹介 (山陰中央新報2014年10月15日, 日本海新聞2014年10月20日, 日本経済新聞島根版2014年10月15日, 読売新聞島根版2014年10月15日, 読売新聞全国版2014年10月21日, 毎日新聞島根版2014年10月16日).

書評「女性研究者とワークライフバランス」京都新聞2014年10月19日.

内田由紀子「京大人間図鑑 Vol.5」2014年10月31日. <http://research.kyoto-u.ac.jp/people/uchida/01/>

内田由紀子「しあわせ予報2015」インタビュー記事掲載, 千寿会, 2014年12月17日. <http://www.belle-desse.jp/cocoro/index.htm>

池田香織, 内田由紀子「日本人特有の協調性が糖尿病患者の心の負担になる」研究紹介「大学受験パスナビ」2015年1月20日. <http://passnavi.evidus.com/news/20150120/html/1>

内田由紀子「内田由紀子博士の未来教育論」『Nキューブ』vol.19巻頭インタビュー, 2015年2月15日.

受賞

内田由紀子 第7回たちばな賞 (京都大学優秀女性研究者賞) 研究者部門 2015.3.3.

内田由紀子, 竹村幸祐 日本農業普及学会奨励賞 2015.3.6.

荻原祐二, 内田由紀子, 楠見孝 (2014). 「日本の個人主義者は孤独か? 日本における個人主義と対人関係」日本グループ・ダイナミックス学会第61回大会 (優秀学会発表賞受賞, 2014.9.7).

Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2015, 2). Does individualism damage interpersonal relationships and subjective well-being in Japan? Longitudinal examination for a causal link. The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, USA. (granted SPSP

Student Poster Award & SPSP Diversity Fund Graduate Travel Award).

社会活動

ドイツ日本研究所顧問。

農林水産政策研究所客員研究員。

土佐経済同友会GKH委員会。

文部科学省安全・安心科学技術及び社会連携委員会委員

阿部修士

論文

Abe, N., Greene JD. (2014) "Response to anticipated reward in the nucleus accumbens predicts behavior in an independent test of honesty," *Journal of Neuroscience*, 2014, 34 (32): 10564-10572.

Abe N., Fujii T., Ito A., Ueno A., Koseki Y., Hashimoto R., Hayashi A., Mugikura S., Takahashi S., Mori E. (2014) "The neural basis of dishonest decisions that serve to harm or help the target," *Brain and Cognition*, 2014, 90: 41-49.

Hayashi A., Abe N., Fujii T., Ito A., Ueno A., Koseki Y., Mugikura S., Takahashi S., Mori E. (2014) "Dissociable neural systems for moral judgment of anti- and prosocial lying," *Brain Research*, 2014, 1556: 46-56.

阿部修士 (2015) 「不正直さの個人差を生み出す脳のメカニズム」 *Clinical Neuroscience*, 中外医学社, 2015, 33 (2): 159-161.

学会発表・ワークショップ等

西口周, 山田実, 谷川貴則, 積山薫, 川越敏和, 吉川左紀子, 阿部修士, 大塚結喜, 中井隆介, 青山朋樹, 坪山直生「脳萎縮と視空間性ワーキングメモリ課題中の脳活動の関連性——機能的MRIを用いた検討」第49回日本理学療法学会大会 (パシフィコ横浜, 横浜) 2014.5.30-6.1.

阿部修士「自分の意思で決めるとはどういうことか? ——心理学と脳科学の視点から」「東京で学ぶ京大の知」シリーズ15 ところの未来—私たちのところは何を求めているのか 第2回 (京都大学東京オフィス, 東京都) 2014.6.4.

Abe N., Greene JD. "Reward sensitivity in the nucleus accumbens predicts dishonest behavior" International Symposium: Adolescent brain & mind and self-regulation (The University of Tokyo, Tokyo) July 5, 2014.

柳澤邦昭, 阿部修士, 嘉志摩江身子, 野村理朗「扁桃体——前頭前野腹外側部の相互作用が文化的世界観防衛を予測する」日本社会心理学会第55回大会 (北海道大学, 札幌市) 2014.7.26-27.

柳澤邦昭, 阿部修士, 嘉志摩江身子, 野村理朗「情動刺激に対する感受性と文化的世界観防衛の関連」日本グループ・ダイナミックス学会第61回大会 (東洋大学, 東京都) 2014.9.6-7.

柳澤邦昭, 阿部修士, 嘉志摩江身子, 野村理朗「死関連脅威に対する扁桃体活動が快情動刺激の感受性を高める」日本心理学会第78回大会 (同志社大学, 京都市) 2014.9.10-12.

阿部修士「正直な行動を選択する脳のメカニズム」公開シンポジウム「インタラクションを通じた相互信頼感形成」(東京大学, 東京都) 2014.9.21.

Abe, N., Fujii, T., Ito, A., Ueno, A., Koseki, Y., Hashimoto R., Hayashi A., Mugikura S., Takahashi S., Mori E. "Neural basis of dishonest choices for harmful and helpful stories" 17th World Congress of Psychophysiology (International Conference Center Hiroshima, Hiroshima) September 23-27, 2014.

Abe, N. "Reward sensitivity in the nucleus accumbens predicts dishonest behavior" (symposium: functional neuroimaging of deception) 17th World Congress of Psychophysiology (International Conference Center Hiroshima, Hiroshima) September 23-27, 2014.

富永仁志, 阿部修士, 内田由紀子「相互協調的自己観は利他行動傾向

を高めるか」第4回社会神経科学研究会 (岡崎コンファレンスセンター, 岡崎市) 2014.10.30-31.

Nishio, Y., Abe N., Shigemune Y., Mugikura S., Fujii T., Mori E. "Cholinergic modulation of emotion and memory in humans: a pharmacological fMRI study." Society for Neuroscience 44th Annual Meeting (Walter E. Washington Convention Center, Washington DC, USA) November 15-19, 2014.

Kajimura S., Kochiyama T., Nakai R., Abe N., Nomura M. "Subtype- and phenotype-specific altered functional connectivity of social anxiety." Society for Neuroscience 44th Annual Meeting (Walter E. Washington Convention Center, Washington DC, USA) November 15-19, 2014.

Suzuki M., Kawagoe T., Nishiguchi S., Abe N., Otsuka Y., Nakai R., Yamada M., Yoshikawa S., Sekiyama Y. "Neural correlates of working memory in advanced aging: an fMRI study" 2015 Ageing Summit (The O₂, London, England) February 10-12, 2015.

Yanagisawa K., Abe N., Kashima ES., Nomura M. "Amygdala-VLPFC interaction predicts the response to anger provocation elicited by mortality threats." The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (Long Beach Convention Center, Long Beach, USA) February 26-28, 2015.

Ueda R., Ashida H., Abe N. "Neural basis of inhibiting socially unacceptable love." Cognitive Neuroscience Society 2015 Annual Meeting (San Francisco Hyatt Regency, San Francisco, USA) March 28-31, 2015.

メディア掲載

「日々の暮らしを“ごきげん”に」リビング京都2014年5月31日.

「うそつき, 脳で分かる? 京大, 活動領域で解明」日本経済新聞2014年8月6日夕刊.

「うそつき, 脳で分かる? 活動領域で解明-京大」時事通信2014年8月6日.

「“うそつき”は脳で分かる 京大研究G発表」日テレNEWS24・NNNストレイトニュース2014年8月6日.

「[解明] 正直者とうそつきの「個人差」京大が研究」ABC朝日放送ABC WEB NEWS (関西ニュース) 2014年8月6日.

「嘘つきのメカニズム 脳の『側坐核』が関係」関西テレビKTVニュース2014年8月6日.

「“正直者”と“うそつき” 脳に違い」日本テレビ「ヒルナンデス」2014年8月6日.

「“嘘つき”の人・脳の活動に違い」日本テレビ「情報ライブミヤネ屋」2014年8月6日.

「うそつきの始まりは“脳”」朝日放送「キャスト」2014年8月6日.

「“うそつき”は脳でわかる・京大が発表」日本テレビ「Oha! 4 NEWS LIVE」2014年8月7日.

「うそつき脳で分かる?」日本テレビ「スッキリ!!」2014年8月7日.

「京都大学が脳の違い発見」日本テレビ「ウェークアップ! ぶらす」2014年8月9日.

「うそと脳活動に關係」京都新聞2014年8月23日朝刊.

「なぜ正直者と嘘つきがいる? 脳活動からその原因を解明」『蛭雪時代』2014年11月号, p178.

「ウソと真の境界線」日本テレビ「ウェークアップ! ぶらす」2014年12月27日.

熊谷誠慈

著書

Kumagai, S. (2014). *Bhutanese Buddhism and Its Culture*. Kathmandu Vajra

Publications.

熊谷誠慈 (印刷中). 「ボン教の歴史の概要」『仏教史研究ハンドブック』法蔵館.

論文

熊谷誠慈 (2014). 「ブータンにおける仏教と国民総幸福 (GNH)」『宗教研究』380, 25-52.

Kumagai, S. (2014). "History and Current Situation of the Sa skya pa school in Bhutan." *Bhutanese Buddhism and Its Culture*, Kathmandu: Vajra Publications, 127-139.

研究発表・講演等

熊谷誠慈 「求めるべき幸福とは——ブータンの国民総幸福政策とその根底に横たわる精神性」『東京で学ぶ 京大の知 シリーズ15 ころの未来—私たちのころは何を求めているのか 第3回 (京都大学東京オフィス, 東京都) 2014.6.11.

熊谷誠慈 「ブータンの仏教と文化——ブータン仏教の歴史とその現状」, (龍谷大学, 京都市) 2014.6.12.

熊谷誠慈 「ボン教文献中の認識機序記述にみられる仏教思想の影響」, 「仏典における認識機序記述の研究」研究会 (京都大学, 京都市) 2014.7.13.

熊谷誠慈 「悩みと不安のむかし: 古き仏教は悩みや苦しきとどう向き合ってきたか」『第13回ころの広場「悩みと不安のイマ, むかし」』 (京都大学, 京都市) 2014.8.6.

Seiji Kumagai "Bonpo's Absorption and Development of the Buddhist Theory: with a Focus on Abhidharma Theory," 17th International Conference of the International Association for Buddhist Studies, Wien: University of Wien. 2014.8.22.

Seiji Kumagai "How did the Mādhyamika Tradition Universalize the Concept of Emptiness?" *Bouddhisme et universalisme, Colloque international à Kyōto*, Kyoto: Kyoto University. 2014.10.4.

熊谷誠慈 「仏教はころをどうとらえてきたか——存在論的・認識論的視点から」, ころの古層と現代の意識研究会. 2014.10.22.

熊谷誠慈 「ブータンの仏教思想と社会制度に学ぶ」第25回日本老年医学会北陸地方会同時開催市民講座: 日本社会の超高齢化に向けて「高齢者のころに向き合う」(近江町交流プラザ, 金沢市) 2014.10.26.

Seiji Kumagai "Significance of Preservation of Spiritual Heritage and Traditional Culture," Shergawong (Arnachar Pradesh State in India): Vivekananda Kendra Vidyalaya (VKV) school. 2014.11.7.

Seiji Kumagai "Balance between Spirituality and Materiality," Bomdila (Arnachar Pradesh State in India): Bomdila Government school. 2014.11.8.

熊谷誠慈 「チベット・ブータンの宗教文化研究の紹介: 文献研究およびフィールド研究の両側面から」Lecture Series 第4回 (京都大学, 京都市) 2014.11.27.

熊谷誠慈 「苦とどう向き合うか: 仏教思想とブータンの国民総幸福政策 (GNH)」生きづらさ学旗揚げワークショップ (京都大学, 京都市) 2014.12.20.

熊谷誠慈 「ころ観の変遷ところの未来——仏教学からみたころ観の時代的展開と地域的展開」(京都大学, 京都市) 2014.12.21.

Seiji Kumagai "Bhutanese Buddhism Research Project and Its Future Perspective," Tashigang (Bhutan): Royal University of Bhutan (Sherubtse College). 2015.3.4.

Seiji Kumagai "Bhutanese Buddhism and Japanese Buddhism," Trongsa (Bhutan): Institute of Language and Culture Studies, Royal University of Bhutan. 2015.3.7.

メディア

熊谷誠慈 「探究人 『幸せの国』の仏教思想に迫る よりよい社会へ

のヒント ブータンと精神文化交流を」京都新聞2014年8月23日.

Kumagai, S. "Book titled 'Bhutanese Buddhism and Its Culture' launched" BBS News. 2015.2.27.

Kumagai, S. "Book titled 'Bhutanese Buddhism and Its Culture' launched" BBS ウェブ版 (<http://www.bbs.bt/news/?p=48839>). 2015.2.27.

畑中千紘

学会発表

Hatanaka, C. "Dreams of an Adult Developmental Disorder Woman" Psychological Seminar (Dream Interpretation and Psychological Theory) (City West Raum Berlin, Berlin) 2014.7.24.

畑中千紘 「2000年代における大学生の心理学的変化——2003年と2013年のロールシャッハ・テストの比較から」日本ユング心理学会第3回大会 (文京学院大学, 東京都) 2014.6.7-8.

畑中千紘 「『語り』の欠如した心理療法の展開可能性——身体と夢を通じた空虚さとの関わり」日本箱庭療法学会第28回大会 (東洋英和女学院大学, 東京都) 2014.10.4-5.

Hatanaka, C. "Dreams of 20's woman who speaks as an autistic spectrum disorder patient" Psychological Seminar (Dream Interpretation and Psychological Theory) (Hotel NH Berlin City West, Berlin) 2015.3.11-12.

講演

畑中千紘 「悩みと不安のイマ: 現代の悩みのかたちを考える」京都府・京都大学ころの未来研究センター共同企画第13回ころの広場 悩みと不安のイマ, むかし (稲盛財団記念館大会議室, 京都市) 2014.8.6.

畑中千紘・土井奈緒美 「子どもの発達障害への心理療法的アプローチからの実践報告」『先生のためのころ塾2014』(稲盛財団記念館大会議室, 京都市) 2014.9.21.

畑中千紘 「ころを知り, ころとつきあう仕事とは——ころの古層から最新の心理学研究まで」SGH (スーパーグローバルハイスクール事業) 同窓生による特別授業 (金沢大学教育学部附属高等学校, 金沢市) 2015.3.14.

清家理

論文・著書

清家理 『医療ソーシャルワーカーの七転び八起きミッション』メジカルビュー社, 2015.3.

Aya Seike, Takashi Sakurai, Chieko Sumigaki, Akinori Takeda, Hidetoshi Endo and Kenji Toba, "Verification Study of Educational Support Intervention for Family Caregivers of Person with Dementia," *International Journal of American Geriatric Society*, 2015, (in press).

学会発表・講演

清家理, 住垣千恵子, 武田章敬, 櫻井孝, 鳥羽研二 「認知症家族介護者の教育的支援におけるエコマップの有用性——ソーシャルワークアセスメントスキルの応用」第15回認知症ケア学会 (東京国際フォーラム, 東京都) 2014.5.31.

銘荊尚子, 住江浩美, 武田章敬, 清家理 「高齢者の意思決定支援のあり方——退院調整看護師による退院支援からの考察」第56回日本老年医学会学術集会 (福岡国際会議場, 福岡市) 2014.6.13.

住江浩美, 銘荊尚子, 武田章敬, 清家理 「病院発信型『医療と介護の連携強化』の方策と意義——医療介護連携セミナーからのアプローチ」第56回日本老年医学会学術集会 (同上).

清家理, 銘苅尚子, 住江浩美, 武田章敬, 鷺見幸彦, 鳥羽研二「エンディングライフの備えと意識に関するパイロットスタディー」第56回日本老年医学会学術集会(福岡国際会議場, 福岡市) 2014.6.13.

清家理, 住垣千恵子, 武田章敬, 鷺見幸彦, 櫻井孝, 鳥羽研二「認知症介護QOL スケールの構成要素抽出研究 第1報」第56回日本老年医学会学術集会(福岡国際会議場, 福岡市) 2014.6.14.

Aya Seike, Takashi Sakurai, Chieko Sumigaki, Akinori Takeda, Kenji Toba, "Study on the needs for educational support programs for family caregivers of person with dementia- For effective implementations of inter-disciplinary programs," Alzheimer's Association International Conference, Denmark, Copenhagen. 12-16 July 2014.

清家理「認知症を持つ人の介護と負担を考える——介護者の私をいたわることの5W1H」(中日文化センター, 名古屋市) 2014.7.17.

清家理「コメディカルに医療・保健・福祉政策って必要ですか？」

信州大学医学部医療保健福祉政策論講演(松本市) 2014.7.24.

清家理「家族・介護者のケア——どこまで聖人君子で存在できるのでしょうか」第1回老人保健施設管理医師研修会(第II期)(東京都) 2014.9.27.

清家理「学びあいから生まれる新たな価値と力——孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究より」, 平成26年度上廣こころ学研究部門研究発表会(稲盛財団記念館大会議室, 京都市) 2014.12.21.

清家理, 吉川左紀子「くらしの学び庵の歩み——学びあいから生まれているもの」, 「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクトシンポジウム: 超高齢社会を健やかに幸せに生きる(稲盛財団記念館大会議室, 京都市) 2015.3.21.

社会貢献

平成26年度老人保健健康増進等事業「認知症の早期診断, 早期対応につながる初期集中支援チーム設置・運営に関する調査研究事業」外部委員.

社会貢献人材育成事業プロジェクト企画・運営(吉川左紀子と協働)「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト, くらしの学び庵.

上田祥行

学会発表・ワークショップ等

Ueda, Y., Nunoi, M., Ichimura, K., Shirasuna, Y., & Fujino, M., "Saccade trajectories are immediately curved in accordance with the degree of threat from task-irrelevant stimuli," Vision Sciences Society 14th Annual Meeting, St. Pete Beach, USA. 2014.5.18.

Ueda, Y., Nagoya, K., Yoshikawa, S. & Nomura, M., "Observer's Facial Expressions Affected Perceived Dominance." 日本認知心理学会第12回大会(仙台市) 2014.6.28.

Ueda, Y., & Yoshikawa, S. "Perceived dominance of facial expression." British Academy Early Career Networking Event, The Mind Across Cultures (University of York, UK.) 2014.8.6.

上田祥行「創造的思考を支えるメカニズム」企画シンポジウム「創造的思考・洞察的問題解決のメカニズムを探る」日本心理学会第78回大会(同志社大学, 京都市) 2014.9.11.

藤野正寛, 上田祥行, 齋木潤, 野村理朗「瞑想技法の違いが脳の機能的結合性に与える効果」日本心理学会第78回大会(同志社大学, 京都市) 2014.9.12.

上田祥行, 菊野雄一郎, 山本洋紀, 齋木潤「機能的脳イメージングと遺伝子多型解析による実行注意の個人差の解明」日本心理学会第78回

大会(同上)。

Ueda, Y., Kikuno, Y., Yamamoto, H., & Saiki, J., "Higher affinity state allele variants in DRD4 and CHRNA4 lead to increased executive attention and related brain activations," Society for Neuroscience, Washington DC, USA. 2014.11.19.

上田祥行, 黒須慎吾, 齋木潤「複数の刺激セットで探る探索非対称性のメカニズム」日本基礎心理学会第33回大会(八王子市) 2014.12.7.

横澤一彦, 金谷翔子, 椽谷英幸, 上田祥行「顔と声の結びつけを規定する要因についての検討」日本心理学会「注意と認知」研究会第13回合宿研究会(名古屋市) 2015.3.15.

上田祥行, 黒須慎吾, 齋木潤「探索非対称性の一貫性から探索のメカニズムを探る」日本心理学会「注意と認知」研究会第13回合宿研究会(名古屋市) 2015.3.16.

奥井遼

論文

奥井遼「知識の参照点としての身体——淡路人形座の稽古場面における『ままならなさ』の現象学的記述」『学ぶと教えるの現象学』16, 2015, 41-54.

奥井遼訳(Bernard Andrieu 著)「現象学から顕現学へ——1990年以降フランス哲学における『生ける身体living body』の誕生」『身心変容技法研究』4, 2015, 207-211.

著書

奥井遼『くわざ』を生きる身体——人形遣いと稽古の臨床教育学』ミネルヴァ書房, 2015年.

学会発表

Okui, Haruka. "Lived Experience of Master and Novice: A Phenomenological Description of a Training Session at the Awaji Puppet Theatre." 33rd International Human Science Research Conference (St Francis Xavier University, Canada) 2014.8.13.

Okui, Haruka, Peralta, Alicia, Vargas, Francisco, and Yin, Yin. "The World of Thinging Thing: Several Phenomenological Snapshots" 33rd International Human Science Research Conference (St Francis Xavier University, Canada) 2014.8.13.

奥井遼「身体の知, 生きられた身体——湯浅泰雄とメルロ＝ポンティ」人体科学会第24回大会若手パネル「湯浅泰雄の問いかけたもの」(京都大学, 京都市) 2014年11月30日.

Okui, Haruka. "Investigation for Philosophy of the body in Japan." 32nd Research Meeting on Arts and Principles of Body-Mind Transformation, 1st Research Meeting, Philosophy of the Body (Kyoto University, Japan) 2015.1.22.

エッセイ

奥井遼「前のめりに議論する」『こころの未来』13, 2014, 43.

奥井遼『パドマ幼稚園アニュアル・レポート』パドマ幼稚園, 2014.

●2014年10月1日「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級1期目第1回〕」(於：風伝館／京都市上京区)。講義：青山朋樹(京都大学大学院医学研究科)「毎日できる運動で衰え知らず!」、意見交換会、挨拶：吉川左紀子、熊野英介(風伝館館長・アマタグループ代表)。司会：清家理。共催：京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻近未来型人間健康科学融合ユニット、公益財団法人信頼資本財団、後援：アマタグループ、京都信用金庫、京都大学医学部附属病院。

●10月2日 第27回身心変容技法研究会+こころ観研究会(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。発表：濱田覚(京都大学大学院教育学研究科博士課程3回生、教育哲学)、総合討論。司会：鎌田東二。

●10月6日 第3回京都大学ヒマラヤ宗教研究会(於：稲盛財団記念館2階225会議室)。発表：小西賢吾「フィールドからみるボン教研究——ボン教の地域性に着目して」。

●10月12日「支える人の学びの場 こころ塾2014 仙台」(於：仙台国際センター)。挨拶：吉川左紀子、講演：乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科)「発達する脳内ネットワークと発達障害」、明和政子(京都大学教育学研究科)「心の発達の定型・非定型を考える」、事例報告と討議：加藤寿宏(京都大学大学院医学研究科)、小松則登(愛知県心身障害者コロニー中央病院)、嶋谷和之(大阪市更生療育センター)、乾敏郎、明和政子、吉川左紀子(司会)。共催：京都大学大学院医学研究科脳機能リハビリテーション学分野発達障害系研究室、後援：東北文化学園大学。

●10月15日「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級1期目第2回〕」(於：風伝館)。講義：荒井秀典(京都大学大学院医学研究科)「老化

と病気の予防で錆知らず!」、意見交換会、よろず相談会(医療：荒井秀典、心理：吉川左紀子、法律：小山秀司)。司会：清家理。

●10月30日 第28回身心変容技法研究会+こころ観研究会(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1：今福龍太(東京外国語大学大学院教授／文化人

類学)「身心変容技法と歌・芸能」、発表2：安田登(能楽師・ワキ方)「くわいの身心変容技法」。司会：鎌田東二。

●11月2日「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2014」Bコース第1回(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講義：乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科)「身体性の脳内機構：身体でわかることの大切さ」、宇野彰(筑波大学人間総合科学研究科)「発達性読み書き障害とその支援」、実践報告：田村綾菜(愛知県コロニー発達障害研究所)、小川詩乃(京都大学大学院医学研究科)。司会：吉川左紀子。

●11月5日「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級1期目第3回〕」(於：風伝館)。講義：幣憲一郎(京都大学医学部附属病院)「毎日できる栄養管理で病気知らず!」、意見交換会。司会：清家理。

●11月8日「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2014」Bコース第2回(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講義：乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科)「他者を知り、共鳴する脳と発達障害」、黒川嘉子(奈良女子大学生活環境学部)「プレイセラピーの中で向き合う現実」、実践報告：村上公也(元京都市立小学校特別支援学級教員)。司会：吉川左紀子。

●11月9日「支える人の学びの場 医



上京区の町家「風伝館」で開かれた「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」

療専門職のためのこころ塾2014」第1回(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講義：乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科)「1歳までの認知発達の神経基盤」、明和政子(京都大学大学院教育学研究科)「心の発達の定型・非定型を考える」、事例報告：石原詩子(京丹波町子育て支援課)。司会：吉川左紀子。

●11月13日 第29回身心変容技法研究会+ワザ学研究会(於：稲盛財団記念館2階225室)。テーマ：「東アジアシャーマニズムと現代文化と身心変容技法」。発表1：金香淑(目白大学准教授／文化人類学・韓国シャーマニズム研究・比較文化論)「現代韓国におけるシャーマニズムと『癒し』の実態」、発表2：アルタンジョラー(ワザ学共同研究員／文化人類学・モンゴルシャーマニズム研究)「いまを生きるモンゴル・シャーマニズム——ワザを中心として」。司会：鎌田東二。

●11月16日「支える人の学びの場 医療専門職のためのこころ塾2014」第2回(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講義：乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科)「高次認知機能と身体性」、渡邊克巳(東京大学先端科学技術研究センター)「認知科学からみた発達障害」、事例報告：嶋谷和之(大阪市更生療育センター)。司会：吉川左紀子。

●11月17日 第36回こころの未来セミナー「Death and Dying East and West :



「支える人の学びの場 ころ塾2014 仙台」(2014年10月12日)

東洋・西洋における死と臨終」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講演：Tony Walter (University of Bath Centre for Death & Society)。司会：カール・ベッカー。

●11月17日 第4回京都大学ヒマラヤ宗教研究会(於：稲盛財団記念館2階225会議室)。発表：小西賢吾「フィールドからみるボン教研究——ボン教の地域性に着目して part.2」。

●11月19日 「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級1期目第4回〕」(於：風伝館)。講義：吉川左紀子「健やかなところで暮らす知恵」、意見交換会、よろず相談会(医療：荒井秀典、心理：吉川左紀子、栄養：幣憲一郎、法律：小山秀司)。司会：清家理。

●11月20日・21日 科研 身心変容技法の比較宗教学 大荒行シンポジウム(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。
[11月20日]「大荒行シンポジウム」1. 企画趣旨説明：鎌田東二、2. 吉野修験道の荒行(奥駈け)：田中利典(大峯金峯山修験本宗宗務総長・金峯山寺執行長)、3. 羽黒修験道の荒行(峰入り)：星野尚文(羽黒修験道松聖・所司役)、4. 熊野修験：那智四十八滝の荒行(青岸渡寺滝行)：高木亮英(西国三十三所一番札所那智山青岸渡寺副住職)、5. 日蓮宗遠壽院の100日荒行：戸田日晨(日蓮宗大荒行堂遠壽院住職・傳師)、6. コメント：倉島哲(関西学院大学教授/社会学)、7. 総合討論。司会：鎌

田 東 二。[11月21日]「『大荒行』身心変容技法研究会」1. 吉野修験道の荒行の検討：田中利典、コメンテーター：町田宗鳳(広島大学教授・僧侶)、小西賢吾、2. 羽黒修験道の荒行の検討：星野尚文、コメンテーター：棚次正和(京府立医科大学教授)

)、奥井遼、3. 日蓮宗の荒行の検討：戸田日晨、コメンテーター：津城寛文(筑波大学教授)、アルタンジョラー(ワザ学共同研究員)、4. 天台修験道の荒行(千日回峰行と十二年籠山行)と総合討論 発題：鎌田東二、コメンテーター：篠原資明(京都大学教授)、井上ウイマラ(高野山大学教授)、永澤哲(京都文教大学准教授) 5. 総合・総括討論 司会：鎌田東二。

●11月22日 「支える人の学びの場 医療専門職のためのころ塾2014」第3回(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講義：乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科)「言語・非言語コミュニケーションの神経機構」、熊田孝恒(京都大学大学院情報学研究科)「注意と学習による自動化」、事例報告：松島佳苗(京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻)。司会：吉川左紀子。

●11月23日 「支える人の学びの場 医療専門職のためのころ塾2014」第4回(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講義：乾敏郎(京都大学大学院情報学研究科)「他者を知り、共鳴する脳と発達障害」、田中康裕(京都大学大学院教育学研究科)「発達障害と『三つの誕生』」、事例報告：小松則登(愛知県心身障害者コロニー中央病院)、修了証授与。司会：吉川左紀子。

●11月28日 学術広報誌『ころ塾の未来』第13号刊行。

●12月3日 「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級1期目第

5回〕」(於：風伝館)。講義：清家理「介護って何?」、意見交換会、よろず相談会(看護相談ゲスト：銘苅尚子・国立長寿医療研究センター地域医療連携室副看護師長、住江浩美・同退院調整看護師)。司会：清家理。

●12月4日 第5回ブータン文化講座「『関係性』から読み解くGNH(国民総幸福)」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。講演：上田晶子(名古屋大学大学院国際開発研究科准教授)、司会：熊谷誠慈。

●12月11日 第30回身心変容技法研究会+ころ塾観研究会(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。テーマ：「身心変容技法と認知神経科学」発表1：藤野正寛(京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座修士一回生)「瞑想の認知科学」、発表2：林紀行(大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座助教・精神医学教室兼任)「マインドフルネス的観点からのトラウマケアとメタアナリシス」、司会：鎌田東二。

●12月17日 「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級1期目第6回〕」(於：風伝館)。講義：田中聡(京都信用金庫業務部接客ていねい推進課)「老後の備えて? アリとキリギリス物語」、意見交換会、よろず相談会、修了式。司会：清家理。

●12月21日 京都大学ころ塾の未来研究センター研究報告会2014「ころ塾の未来——私たちのころ塾は何を求めているか」(於：稲盛財団記念館3階中会議室/ポスター会場：大会議室)。開会の挨拶：吉川左紀子、研究報告1：熊谷誠慈「ころ塾観の変遷ところ塾の未来：仏教学からみたころ塾観の時代的展開と地域的展開」、研究報告2：畑中千紘「悩まないころ塾との対話：臨床心理学からみたころ塾の現在」、ポスターセッション+休憩、研究報告3：吉川左紀子「ころ塾の学際研究の『つなぐ』価値——ころ塾の未来の『未来』に関する考察」、[ディスカッション] ディスカッサント：島菌進(上智大学

グリーンケア研究所所長)、増田寿幸(京都信用金庫理事長)、閉会の挨拶。司会:内田由紀子。

●12月21日 京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門2014年度研究報告会「学びの経験と社会」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。センター長挨拶:吉川左紀子、来賓ご挨拶:丸山登(公益財団法人上廣倫理財団事務局長)、上廣こころ学研究部門の取り組み紹介:河合俊雄、研究報告1:清家理「学び合いから生まれる新たな価値と力——孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究より」、研究報告2:奥井遼「身体的経験を通じた学びの豊かさ——淡路人形座における稽古場面より」、研究報告3:阿部修士「嘘つきはより嘘つきに——繰り返される誘惑には抗えないのか?」、[部門研究者による全体討論]モデレーター:鎌田東二、コメンテーター:熊谷誠慈、畑中千紘、福島慎太郎、梅村高太郎、閉会の挨拶:カール・ベッカー。司会:熊谷誠慈。

●12月25日・26日 こころの未来 脳科学集中レクチャー2014「脳損傷からみたこころ」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師:森悦朗(東北大学大学院医学系研究科高次機能障害学教授)。司会:阿部修士。

●2015年1月12日 京都府/京都大学こころの未来研究センター共同企画シンポジウム「ワザとこころ 能の伝承——稽古と修行と教育」(於:京都観世会館/京都市左京区岡崎)。開会挨拶:吉川左紀子、趣旨説明:鎌田東二、[第1部:能の稽古の伝承のトーク]観世清河寿(観世流二十六世宗家)、観世三郎太、鎌田東二(司会)、[実演:舞囃子]観世清河寿、観世三郎太、[第2部:シンポジウム]「能の伝承——稽古と修行と教育」観世清河寿、観世三郎太、西平直(京都大学大学院教育学研究科教授/教育人間学)、河合俊雄。司会:鎌田東二。主催:京都府、京都大学こころの未来研究センター、後援:一般財団法人観世文庫、古典の日推進委員会、協力:公益社団法人能楽

協会京都支部、公益社団法人京都観世会、京都観世会館。

●1月15日 第31回身心変容技法研究会+ワザ学研究会(於:稲盛財団記念館2階225室)。テーマ:「身心変容技法と儀礼」。発表1:松平勇二(名古屋大学文学研究科博士研究員/文化人類学)

「ジンバブエの憑依儀礼における身心変容技法とンピラ音楽」、発表2:小西賢吾「祭りにおける『反復』と『興奮』にみる身心変容——秋田県角館の事例から」、司会:鎌田東二。

●1月17日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト[初級2期目第1回]」(於:風伝館)。講義:青山朋樹(京都大学大学院医学研究科)「毎日できる運動で衰え知らず!」、意見交換会、挨拶:吉川左紀子。司会:清家理。共催:京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻近未来型人間健康科学融合ユニット、公益財団法人信頼資本財団、後援:アマタグループ、京都市、京都市教育委員会、京都信用金庫、京都大学医学部附属病院、研究大学強化促進事業「百家争鳴」プログラム、文部科学省地(知)の拠点整備事業(以下、同タイトル初級2期の共催、後援はすべて同じであるため記載省略)。

●1月22日 第32回身心変容技法研究会/第1回「身体哲学」研究会合同開催(於:稲盛財団記念館3階小会議室1)。趣意説明:奥井遼「Investigation for Philosophy of the body in Japan」、発表:ベルナル・アンドリュウ(Bernard ANDIEU, ルーアン大学教授/フランス身体哲学)「From Phenomenology to Emersiology: The birth of living body in the philosophical research in France among 1990」、コメンテーター:マルク・アンリ・デロッシュ(Marc-Henri DEROCHE, 京都大学白眉センタ



京都大学こころの未来研究センター研究報告会2014「こころの未来——私たちのこころは何を求めているか」(2014年12月21日)

ー助教/心の哲学・仏教思想)。

●1月24日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト[初級2期目第2回]」(於:風伝館)。講義:幣憲一郎(京都大学医学部附属病院)「毎日できる栄養管理で病気知らず!」、意見交換会、よろず相談会。司会:清家理。

●2月12日 第33回身心変容技法研究会+ワザ学研究会(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。テーマ:「身心変容技法とワザと身体」。発表1:奥井遼「身心変容技法と人形浄瑠璃の身体論——教育学の観点から」、発表2:河田(鈴鹿)千代乃(神戸女子大学文学部教授/日本文学・芸能研究)「筑紫舞・傀儡(くぐつ)舞と芸能とシャーマニズム」、発表3:鎌田東二「身心変容技法研究会総括——洞窟体験から始まるシャーマニズム・芸能・瞑想」。司会:鎌田東二。

●2月14日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト[初級2期目第3回]」(於:風伝館)。講義:荒井秀典(国立長寿医療研究センター)「老化と病気の予防で錆知らず!」、意見交換会。司会:清家理。

●2月26日・27日 fMRI解析セミナー「resting-state fMRI」(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。講師:河内山隆紀(株式会社ATR-Promotions, 脳活動イメージングセンタ)。司会:阿部修士。

●2月27日 熊谷誠慈准教授の出版記



京都観世会館で開催された京都府／京都大学こころの未来研究センター共同企画シンポジウム「ワザとこころ 能の伝承——稽古と修行と教育」(2015年1月12日)

念祝賀会がダムチョ・ドルジ ブータン王国内務大臣ご臨席のもと王立ブータン研究所(ブータン王国ティンプ市)にて開催される。著書名: Bhutanese Buddhism and Its Culture (Kathmandu: Vajra Publications, 2014)。

●2月28日 「くらしの学び庵: 孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級2期目第4回〕」(於: 風伝館)。講義: 吉川左紀子「健やかなところで暮らす知恵」、意見交換会、よろず相談会。司会: 清家理。

●3月3日 内田由紀子准教授が第7回京都大学たちばな賞研究者部門を受賞。授賞式(於: 京都大学楽友会館)にて研究発表「文化と幸福——日本における関係志向的幸福についての文化心理学的実証研究」。

●3月4日・5日・6日 2014年度こころの科学集中レクチャー「こころの謎——遺伝から脳、そして主観へ」(於: 3/4、3/6 稲盛財団記念館3階大会議室、3/5 南部総合研究1号館・再生研西館1F共同セミナー室)。
〔3月4日〕講師: 下條信輔(カリフォルニア工科大学生物学・生物工学部教授、センター特任教授/認知科学、神経科学) 講義1: 「ポストディクシオン

(後付け再構成)、意識、自由意思」、講義2: 「クオリア(感覚の絶対質)とシェアド・リアリティ——『感覚代行』を入り口に」。
〔3月5日〕講師: 北山忍(ミシガン大学心理学部教授、文化・認知プログラム所長、センター特任教授/文化心理学、文化神経科学) 講義1: 「不協和の社会・生物モデル: 脳神経科学と動物行動学からの知見を中心に」、講義2: 「一般的他者のイメージと不協和: 文化脳神経科学のアプローチ」。
〔3月6日〕講師: 入來篤史(理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー、センター特任教授/神経科学、認知神経生物学) 講義1: 「ニッチ構築・境界と道具」、講義2: 「勤と心の曖昧さ・西洋科学と東洋文化の交差」。司会: 内田由紀子、阿部修士。

●3月5日 第34回身心変容技法研究会+京都伝統文化の森推進協議会公開セミナー(於: 稲盛財団記念館3階大会議室)。開催趣旨説明: 鎌田東二、基調講演1: 三宅一樹(彫刻家・元多摩美術大学非常勤講師・芸術学博士)「木彫刻のアニミズム」、基調講演2: 伊勢武史(生態学者・進化生物学者・京都大学フィールド科学教育研究センター准教授・PhD/ハーバード大学)「森の

自然と人のかかわり——生態学・進化生物学の視点)、総合討論。司会: 鎌田東二。

●3月6日 内田由紀子准教授が平成26年度日本農業普及学会奨励賞を竹村幸祐滋賀大学経済学部准教授(元センター特定研究員・現連携研究員)と共に受賞。

●3月14日 「くらしの学び庵: 孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級2期目第5回〕」(於: 風伝館) 講義: 清家理「介護って何?」、意見交換会。司会: 清家理。

●3月21日 「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト2014年度シンポジウム「超高齢社会を健やかに幸せに生きる」(於: 稲盛財団記念館3階大会議室)。開会挨拶: 吉川左紀子、趣旨説明: 清家理「くらしの学び庵と歩み『学びあいから生まれているもの』」、〈くらしの学び庵特別講義編〉講師: 坂本龍太(京都大学白眉センター特定助教)「ブータンからの叡智——幸せに生きるとは」、基調講演: 鳥羽研二(独立行政法人国立長寿医療研究センター総長)「こころも身体もすこやかに歳を重ねるとは」、くらしの学び庵Q&A編「幸せに歳を重ねるために必要なこと」、司会: 吉川左紀子、パネラー: 鳥羽研二、西窪一(京都市役所保健福祉局長寿社会部長)、田中聡(京都信用金庫業務部でない推進課副長)、坂本龍太、清家理、閉会挨拶: 荒井秀典(独立行政法人国立長寿医療研究センター副院長)。後援: 京都市、京都市教育委員会、研究大学強化促進事業「百家争鳴」プログラム、文部科学省 地(知)の拠点整備事業。

●3月28日 「くらしの学び庵: 孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔初級2期目第6回〕」(於: 風伝館)。講義: 田中聡(京都信用金庫業務部接客でない推進課)「老後の備えて? アリとキリギリス物語」、意見交換会、よろず相談会、修了式。司会: 清家理。